

# 足原田遺跡Ⅰ

Ishiharada Site I

西関東連絡道路関連発掘調査報告書

2005・8

山梨県教育委員会  
山梨県土木部



足原田遺跡谷跡上層の状況



足原田遺跡谷跡下層の状況

\*周辺縁地は合成したもの

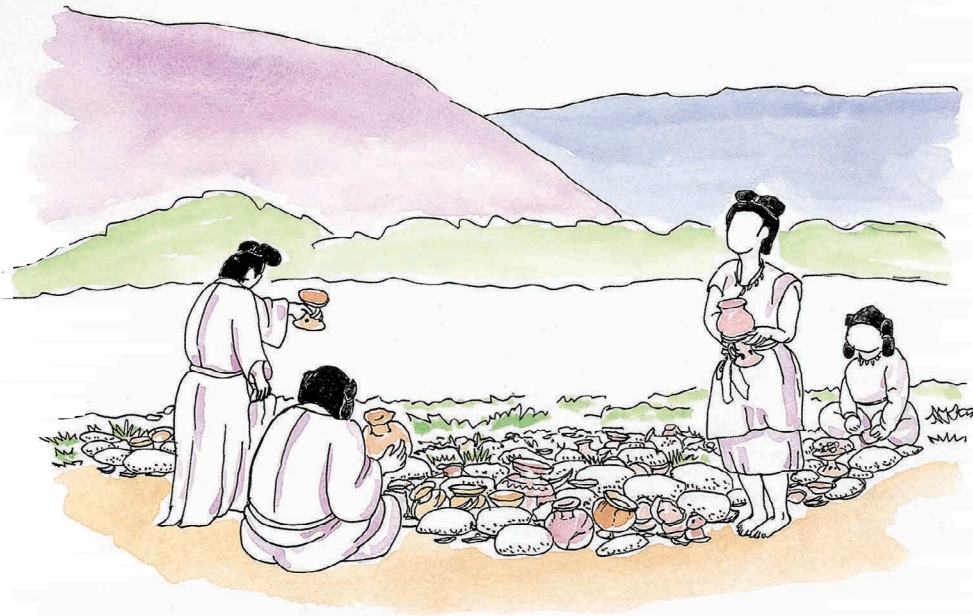




(Ⅱ区谷土器集中)



(5溝土器集中)



(5溝土器集中)



(5溝土器集中)



(4溝土器集中)

浅い谷には、おびただしい土器と石が捨てられていた。

今を去る1600年ほど前の古墳時代に、山梨市万力のこの場所では、累々と壊れた土器が捨てられていった。今ここはただの土器捨て場としか見られないが、当時は生活で使用されなくなった土器や木器、金属器などのあらゆるものを、祈りを込めて彼の世界へ送る、「物送りの場」ではなかったろうか。木や金属は腐り土となっても、土器は不変の焼き物として1600年の時空を超えて残った。

さらにもうひとつの想い。

この時代の甲斐国では、現在の中道町にある国指定の銚子塚古墳や大丸山古墳が造られている。銚子塚古墳は前長169メートルで、4世紀の東日本では最大クラスの規模である。これを造るのに甲斐国の住人すべてを動員したに違いないと思う。だとすれば、移動に際して持ちきれない生活道具の大部分を、人々が捨てた場とも想いたい。慟哭しながら、土器を捨て、石を投げつけ、またその上から土器を投げつけた……そんな幻影がよぎる。





1号住居跡遺物出土状況



3・4号住居跡





平安時代の終わり頃、今から900年ほど前のこの地には、石と砂地の自然堤防上にささやかな村があった。農耕に使う鉄製鎌や糸を紡ぐ紡錘車が発見されていることから、近くには水田か陸稲の畑があり、鎌で稲を刈り取って米を収穫したり、糸を紡いで布を織っていたのであろう。食器には東海地方や美濃地方から運ばれた灰釉陶器の碗がある。

平和でつつましい暮らしが続いたある日、突然、驚きの声が村中に響いた。「火事だ〜」振り向くと家がごうごうと火を吹き、もうもうと煙を立てて燃え始めている。家財道具を持ち出すこともできず、迷惑う人や呆然とする村人がいる。

しかし、火事の家跡に、すぐさま新しい家が建てられたことが、発掘調査で明らかになった。古代の人々は雑草のように焼け跡から蘇ったのである。



# 序 文

本報告書は山梨県土木部が進めている西関東連絡道路（甲府山梨区間）建設に伴う足原田遺跡発掘調査報告書Ⅰ（平成15年度発掘調査地区）です。

足原田遺跡は山梨市万力950番地他に所在し、すぐ近くには古来より歌に読まれた「差し出の磯」があります。この小山の上に立つと「塩の山」を含む峡東地方全域を望むことができ、足元の断崖絶壁は笛吹川に厳しく洗われた様子が露わになっています。古くは『古今集』に「しほのやまさしでの磯にすむ千鳥きみがみよおばちよとぞなく」の歌があり、この他、平安・鎌倉期の歌集『按納言集』や『三百六十番歌合』など多数の歌集に「塩の山差し出の磯」の歌枕が見られます。

また、笛吹川の右岸にある万力林は、武田信玄が笛吹川下流の万力・落合・正徳寺・岩下の集落や耕地を、水害から守るために設置した堤防が築かれたことから、「万力」の地名がつけられたと伝えられる場所です。

足原田遺跡は万力堤防が築造される以前には幾度となく河川の氾濫に会い、南西方向に緩やかな扇状地が形成された一角にあります。平成14年度に行われた試掘調査により発見され、当初は古墳時代前期の4世紀の遺跡と考えておりましたが、古墳時代から平安時代・中世までの遺跡であることがわかりました。

平成15年に行われた発掘調査では、古墳時代の4世紀から5世紀の谷と、そこに投げ込まれた大量の土師器群が発見されました。平成14年度に発掘された山梨市上岩下に所在する武家遺跡は、本遺跡と場所や年代の近い弥生時代の遺物や古墳時代前期後半の方形周溝墓2基と土師器が発掘されています。これらの遺跡は、古墳時代前期の集落や方形周溝墓が発見されている塩山市西広門田の西田遺跡や同市赤尾の下西畑遺跡などとのつながりも想定され、今まで不明なことが多かった東山梨地域の古墳時代前半の解明に、大変意義のある発掘調査の成果です。

また、平安時代終わり頃の6軒の住居の発見は、奈良時代より甲斐国の中心地として栄えた古代山梨郡の終焉の姿を伝える遺跡として貴重であります。律令時代のこのあたりは山梨郡山梨郷（8世紀以前は「里」）・加美郷・大野郷に含まれていたと考えられていますが、万力地域は山梨郷に含まれます。

隣接する山梨市小原や七日市場などは、奈良正倉院宝物の純の墨書「甲斐国山梨郡可美里日下部〔 〕純一匹」にある可美里に含まれるといわれ、古代から連綿と人々の営みが継続する地域の一角であり、平安時代の末には、甲斐源氏の安田義定が小原庄を拠点として、この一帯を支配したとも伝えられています。このように、各時代ともに山梨県の歴史を学ぶ上で貴重な遺跡であることが、成果として評価されています。

この発掘調査につきましては、山梨県土木部新環状・西関東道路建設事務所をはじめ、山梨市教育委員会、地元万力区等の関係者の方々からご協力をいただきましたことに、厚く感謝申し上げます。

平成17年 8月 31日

山梨県埋蔵文化財センター




所長 渡 辺 誠



## 例 言

- 1 本書は平成15年度に行われた西関東連絡道路建設に伴う、山梨市万力950番地他の足原田遺跡発掘調査報告書Ⅰである。
- 2 発掘調査及び整理報告書作成事業は山梨県土木部の委託を受けて、山梨県教育委員会・山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査・整理作業は次の職員態勢で実施した。  
平成15年度 発掘調査・基礎的整理作業  
調査研究課 長沢宏昌・小林(石神)孝子・小林弘典  
発掘作業員 相沢淑美 雨宮久美子 飯島澄子 小倉ユリ 小野薫 加賀美昌友 栗原教子  
栗原礼子 黒瀬直子 黒瀬信子 嶋津小百合 千野富子 戸田ひろ 永田政則  
萩原里江子 正木なつ子 宮久保あさの  
整理作業員 栗原礼子 小菅春江 小林順子 清水真弓 平順孝 斉藤律子 萩原里江子  
三好美智 新津多恵 正木なつ子  
平成16年度 本格的整理作業  
資料普及課 山本茂樹  
整理作業員 石坂恵理 遠藤実雄 栗原礼子 斉藤玲子 佐野眞雪 中川美千子 萩原里江子  
早川みどり 保坂秋蘭 正木なつ子  
平成17年度 報告書作成・印刷  
資料普及課 山本茂樹 石神孝子  
整理作業員 佐野眞雪
- 4 発掘調査の中の谷部の遺物出土状況図、および谷部出土遺物の一部(94点)の実測は、シン技術コンサルに委託した。なお、谷の遺物出土状態の詳細データは埋蔵文化財センターで保管している。
- 5 本報告書の編集・執筆は山本が行った。なお、自然科学分析(微細物分析・植物遺体同定・炭化材の樹種分析)については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告原稿を転載した。
- 6 本遺跡の出土品及び記録図面・写真は埋蔵文化財センターに保管してある。
- 7 本報告書作成にあたり、中世瓦器の分析について(財)京都府埋蔵文化財センター伊野近富氏の協力を得た。

## 凡 例

- 1 遺構遺物の縮尺は原則として次の通りである。  
[遺構] 住居跡1/60 カマド跡1/30 谷1/200  
[遺物] 古墳時代・平安時代土師器1/3 拓本1/3 鉄器1/2 古銭2/3
- 2 全体図のグリッド杭は5mメッシュとし真北で打設してある。住居跡の平面図の方位は磁北を示している。必要に応じてそれぞれの利用が可能である。なお座標は世界測地系座標を使用。
- 3 遺構断面・土層図のレベルポイントは標高を示している。
- 4 遺物図版中の陶磁器の断面は 、土師器の赤彩は  で示す。なお、遺構内の焼土は  で示した。また、平安時代の遺構図面中●は土師器・陶器、▲は鉄の出土地を表す。
- 5 土器観察表中の色調名は農林水産省技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』2001年度版を使用した。



# 目 次

口絵

序

例言・凡例

第1章 調査の経過	1
第1節 発掘調査の原因と過去の経過	
第2節 発掘調査の事務・調査経過	
第3節 発掘作業の経過	
第4節 整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の成果	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
1) 谷跡	
2) 谷跡出土遺物	
2 平安時代の遺構と遺物	45
1) 1号住居跡	
2) 2号住居跡	
3) 3号住居跡	
4) 4号住居跡	
5) 5号住居跡	
6) 6号住居跡	
3 その他の遺構と遺物	58
1) 遺物集中地区	
2) グリッド出土遺物	
第4章 理化学的分析	63
足原田遺跡の自然科学分析報告	
(パリノ・サーヴェイ株式会社)	
第5章 総括	69
第1節 古墳時代	
第2節 平安時代	
第3節 その他	
まとめ	76
写真図版	



## 挿図目次

第1図	山梨市遺跡分布図	4
第2図	調査区全体図	9・10
第3図	谷跡全体図土層図	11・12
第4図	谷跡出土遺物図(1)	13
第5図	谷跡出土遺物図(2)	14
第6図	谷跡出土遺物図(3)	15
第7図	谷跡出土遺物図(4)	16
第8図	谷跡出土遺物図(5)	17
第9図	谷跡出土遺物図(6)	18
第10図	谷跡出土遺物図(7)	19
第11図	谷跡出土遺物図(8)	20
第12図	谷跡出土遺物図(9)	21
第13図	谷跡出土遺物図(10)	22
第14図	谷跡出土遺物図(11)	23
第15図	谷跡出土遺物図(12)	24
第16図	谷跡壺出土位置図	25/26
第17図	谷跡甕出土位置図	27/28
第18図	谷跡台付甕出土位置図	29/30
第19図	谷跡S字甕出土位置図	31/32
第20図	谷跡蓋・甌等出土位置図	33/34
第21図	谷跡埴・坏等出土位置図	35/36
第22図	谷跡高坏・器台出土位置図	37/38
第23図	1号住居跡(1)	47
第24図	1号住居跡(2)	48
第25図	1号住居跡(3)	49
第26図	1号住居跡(4)	50
第27図	2号住居跡	51
第28図	3・4号住居跡(1)	52
第29図	3・4号住居跡(2)	53
第30図	5号住居跡	54
第31図	6号住居跡	55
第32図	遺物集中地区出土遺物	60
第33図	谷跡他出土遺物	61
第34図	遺物出土位置図(1)	71
第35図	遺物出土位置図(2)	72
第36図	遺物出土位置図(3)	73
第37図	平安時代土器区分	75

## 表目次

第1表	谷跡出土遺物観察一覧表	39
第2表	平安時代住居出土遺物観察表	56
第3表	グリッド等出土遺物観察一覧表	62
第4表	古墳時代土師器出土位置一覧表	70

## 写真図版目次

図版1	遺跡遠景・調査風景
図版2	谷跡(旧4・5溝部分)
図版3	谷跡(旧5溝部分)
図版4	谷跡および出土遺物(壺)
図版5	谷跡出土遺物(壺)
図版6	谷跡出土遺物(壺)
図版7	谷跡出土遺物(甕)
図版8	谷跡出土遺物(甕)
図版9	谷跡出土遺物(甕)
図版10	谷跡出土遺物(S字口縁台付甕)
図版11	谷跡出土遺物(S字口縁台付甕)
図版12	谷跡出土遺物(蓋・甌・鉢など)
図版13	谷跡出土遺物(埴・坏)
図版14	谷跡出土遺物(高坏・器台)
図版15	1号住居跡・出土遺物
図版16	1号住居跡・出土遺物
図版17	2号住居跡・出土遺物、3・4号住居跡
図版18	3・4号住居出土遺物、5号住居跡・出土遺物、6号住居跡・出土遺物
図版19	グリッド出土遺物(G31)
図版20	谷跡など出土平安時代・中世遺物

# 第1章 調査の経過

## 第1節 発掘調査の原因と過去の経過

西関東連絡道路は、国道140号線の交通量の緩和と埼玉県等の西関東地方と山梨県の甲府盆地をつなぐ道路として全長110キロメートルが計画され、この内、甲府市和戸町から山梨市万力までの5キロメートルの建設計画が平成6年に地域高規格道路の計画路線に指定された。平成7年に調査区間、平成8年に整備区間に指定され平成16年6月には甲府市桜井町～春日居町鎮目の間、2.9kmが共用開始されている。また、万力ランプと国道140号線をつなぐ1.5kmの取付け道路の中に、今回の足原田遺跡は存在する。

県教育委員会では道路建設事業と埋蔵文化財との調整を平成9年度から開始し、道路予定地及び予定地周辺の分布調査及び建設予定地内での試掘調査、記録保存のための発掘調査を行ってきた。平成10年度は現笛吹市春日居町鎮目の平林2号墳、平成11年度は甲府市横根町の道々芽木遺跡、平成12年度は甲府市横根町の久保田・道々芽木遺跡、平成13年度は甲府市桜井町の道々芽木遺跡、平成14年度は山梨市落合の中沢遺跡と同市上岩下の武家遺跡、平成15年度は山梨市万力の足原田遺跡の調査を実施している。

## 第2節 発掘調査の事務・調査経過

足原田遺跡の調査については、山梨県教育委員会が平成14年度に山梨県土木部新環状・西関東道路建設事務所と協議を行い、山梨県埋蔵文化財センターが平成14年10月3～4日に用地買収後の土地について試掘調査を実施した。この結果、古墳時代の前期の遺物がまとまって出土したため、記録保存すべき埋蔵文化財包蔵地として把握され、本格的な発掘調査を平成15年度に実施することとなった。

本格的な調査の手続きは平成15年度に行われ、次のような書類の手続きと打合せが行われた。

- 平成15年4月14日 新環状・西関東道路建設事務所・学術文化財課・埋蔵文化財センター打ち合せ

### 議題

道路・水路の切りまわし

廃土置き場について

埋め戻しの必要性

プレハブ設置・駐車場の確認

- 平成15年5月22日 表土剥ぎ着手

- 平成15年5月28日 県埋蔵文化財センター所長より文化財保護法58条の2（報告）を県教育長に提出。同日建設事務所及び山梨市教育委員会へ発掘調査着手の通知を送付（教埋文2第5-2号）。

着手予定平成15年5月22日 終了予定平成15年10月31日 調査面積3,800㎡

- 平成15年6月2日 西関東建設事務所・学術文化財課・埋蔵文化財センター打ち合せ

### 議題

遺跡地内からの畑への出入り口の確保

今後の調査の進行予定について

- 平成15年6月17日 山梨建設(株)・西関東建設事務所・埋蔵文化財センター打ち合せ

### 議題

表土剥ぎの時期および水路道路の切りまわし

- 平成15年7月29日 西関東事務所・埋蔵文化財センター打ち合せ

### 議題

調査工程の変更（一部の調査地区で多量の遺物の出土があり、この地区の8月中の終了予定は変更。

ぶどうの出荷を待って道路・水路の切りまわし対応）

- 平成15年11月28日 調査終了



- ・平成15年12月3日 山梨県教育委員会教育長宛（日下部警察所長宛）、埋蔵文化財発見通知を送付。（教埋文2第12-3号）
- ・平成15年12月4日 教学文3第12-21号により県教育長より日下部警察署長宛に発見通知を送付
- ・平成15年12月8日 山梨県教育委員会学術文化財課長宛（西関東事務所長宛）、発掘調査終了報告の送付。未買収地のため未調査地区は平成16年度以降に継続して調査を行うことを申し添える。（教埋文2第5-2号）
- ・平成16年3月19日 県教育長宛に足原田遺跡発掘調査実績報告書の提出。（教埋文2第3-6号）
- ・平成16年3月30日 学術文化財課長より道路建設課長へ精算報告書の提出
- ・平成17年3月24日 県教育長宛に足原田遺跡整理事業実績精算報告書の提出
- ・平成17年3月31日 学術文化財課長より道路整備課長へ実績精算報告書提出
- ・平成18年3月末 県教育長宛に足原田遺跡整理事業実績報告書の提出予定
- ・平成18年3月末 学術文化財課長より道路整備課長へ実績精算報告書提出予定

### 第3節 発掘作業の経過

- 平成15年5月22日～ プレハブ設置場所整地及び設置・第1区表土剥
- 平成15年6月2日～ 作業員発掘開始、昭和測量(株)基準点測量
- 平成15年6月5日～ 昭和測量(株)グリッド杭設置、峡東測量(株)境界杭設置
- 平成15年8月6日～ シン技術コンサル(株)遺物集中地区写真実測開始
- 平成15年8月13日～ 1号住居跡調査開始
- 平成15年8月28日～ 2号住居跡調査開始
- 平成15年9月12日～ 3・4・5号住居跡調査開始
- 平成15年10月3日～ 池谷建材による表土剥ぎ コンクリート・石垣等の除去  
5溝の北西側に続きが現れる。谷部の検出。
- 平成15年11月13日～シン技術コンサル(株)による谷部Ⅱ区の写真撮影と遺物取り上げ
- 平成15年11月27日 現場作業終了・プレハブ撤去

### 第4節 整理事業の経過

- 平成15年度は基礎的整理（水洗・注記・復元等の作業）
- 平成15年12月8日～水洗作業
- 平成15年12月10日～注記作業
- 平成16年2月25日～土器接合
- 平成16年3月26日 15年度整理事業終了
- 平成16年度本格整理開始
- 平成16年7月5日～土器接合の再開（住居跡）
- 平成16年7月12日～グリッド出土土器接合
- 平成16年7月23日～谷部出土遺物接合
- 平成16年9月1日～土器台帳整理・接合関係調査・土器実測開始
- 平成16年9月30日 接合終了
- 平成16年10月1日～出土位置・接合関係調査・図面整理
- 平成16年12月13日～委託実測土器抽出・遺構トレース開始
- 平成16年12月24日 土器実測委託（94点）
- 平成16年12月10日 原稿執筆開始
- 平成17年1月11日 現場写真選別

平成17年3月7日 出土遺物写真撮影・図版作成

平成17年3月31日 原稿・図版完成

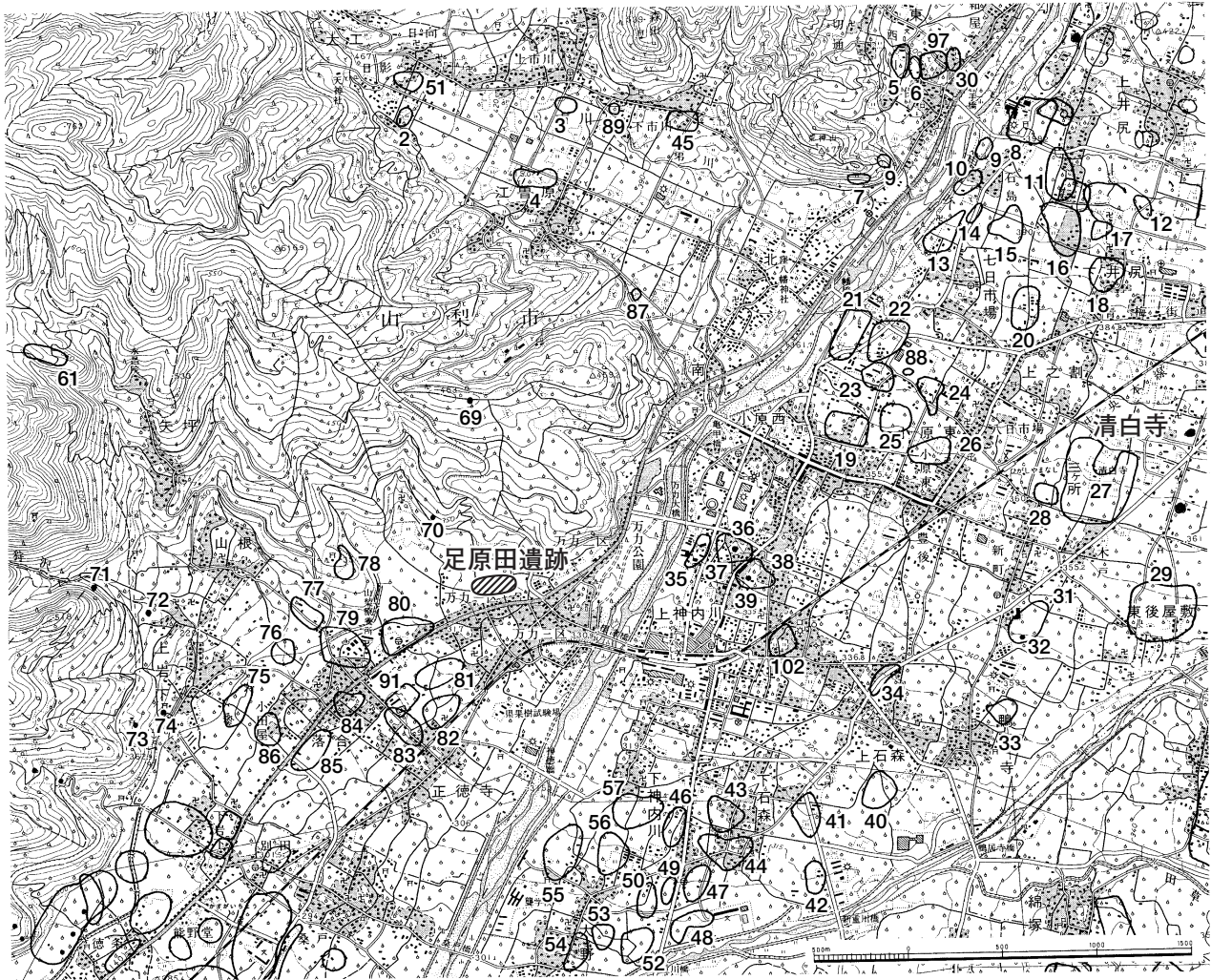
平成17年度入稿・印刷

平成17年6月24日 契約 株式会社 アド井上

平成17年6月27日 入稿

平成17年8月31日 印刷・刊行





山梨市

No	遺跡名	種別	所在地	旧国	旧郡	旧町	旧村	旧庄	旧平	旧中	旧郡	旧市	旧町	旧村
1	堂平遺跡	散布地	水口字堂平											
2	大工南遺跡	散布地	大工											
3	市川西遺跡	散布地	市川											
4	江曾原遺跡	集落跡	江曾原											
5	村西遺跡	散布地	東字村西											
6	久保遺跡	散布地	東字久保											
7	中下西遺跡	散布地	岩手字中下											
8	宮ノ前遺跡	散布地	七日市場字宮ノ前											
9	上川窪遺跡	散布地	七日市場字上川窪											
10	下弥勒遺跡	散布地	七日市場字下弥勒											
11	宮ノ前南遺跡	散布地	七日市場字宮ノ前											
12	石原遺跡	散布地	下井尻字石原											
13	天神前遺跡	散布地	七日市場字天神前											
14	西ノ久保遺跡	散布地	七日市場字西ノ久保											
15	中沢遺跡	散布地	七日市場字中沢											
16	十王堂遺跡	散布地	下井尻字十王堂											
17	阿弥ノ堂遺跡	散布地	下井尻字阿弥ノ堂											
18	宮ノ西遺跡	散布地	下井尻字宮ノ西											
19	安田氏館跡	館跡	小原西字八王字											
20	東原遺跡	散布地	七日市場字東原											
21	立司遺跡	散布地	小原東字立司											
22	大泉庵遺跡	散布地	小原東字大泉庵											
23	原塚遺跡	散布地	小原東字原塚											
24	大堀北遺跡	散布地	小原東字大堀											
25	大堀東遺跡	散布地	小原東字大堀											
26	大堀南遺跡	散布地	小原東字大堀											
27	三ノ所遺跡	散布地	三ノ所											
28	進方屋敷跡	館跡	三ノ所											
29	東後屋敷遺跡	散布地	東後屋敷											
30	久保田遺跡	散布地	岩手字久保田											
31	野田遺跡	散布地	三ノ所字野田											
32	八七塚古墳	古墳	三ノ所字野田											
33	鴨居寺遺跡	散布地	鴨居寺											
34	上手原遺跡	散布地	上石森字上手原											
35	日下部南院前遺跡	散布地	上神内川											
36	平塚遺跡	散布地	上神内川字平塚											
37	平塚古墳	古墳	上神内川字平塚											
38	塚越遺跡	散布地	上神内川字塚越											
39	稲荷塚古墳	古墳	上神内川字塚越											
40	上黒木遺跡	散布地	上石森字上黒木											
41	原敷遺跡	散布地	下石森字原敷											
42	道下遺跡	散布地	下石森字道下											
43	林ノ上遺跡	散布地	下石森字林ノ上											
44	浜森遺跡	散布地	下石森字浜森											
45	市川東遺跡	散布地	市川											
46	宗高北遺跡	散布地	下石森字宗高											
47	宗高東遺跡	散布地	下石森字宗高											

No	遺跡名	種別	所在地	旧国	旧郡	旧町	旧村	旧庄	旧平	旧中	旧郡	旧市	旧町	旧村
48	雲林遺跡	散布地	下石森字雲林											
49	宗高南遺跡	散布地	下石森字宗高											
50	宗高西遺跡	散布地	下石森字宗高											
51	大工北遺跡	散布地	大工											
52	天神前東遺跡	散布地	大野字天神前											
53	天神前北遺跡	散布地	大野字天神前											
54	天神前西遺跡	散布地	大野字天神前											
55	榎田遺跡	散布地	大野字榎田											
56	寺南遺跡	散布地	大野字寺南											
57	杉木遺跡	散布地	大野字杉木											
58	松畑遺跡	散布地	歌田字松畑											
59	琵琶塚古墳	古墳	歌田字松畑											
60	柳屋遺跡	散布地	下栗原字柳屋											
61	氷晶院西山遺跡	散布地	矢野											
62	宮後遺跡	散布地	下栗原字宮後											
63	北川後遺跡	散布地	下栗原字北川後											
64	市田遺跡	散布地	市川											
65	西田遺跡	散布地	上栗原字西田											
66	西小路遺跡	散布地	中村字西小路											
67	大林北遺跡	散布地	上栗原字大林											
68	大林南遺跡	散布地	上栗原字大林											
69	富士塚	塚	万力											
70	藤沢古墳 (長瀬寺前古墳)	古墳	万力字相平塚											
71	観音塚古墳 (夕野沢古墳)	古墳	上野字夕野											
72	山寺古墳	古墳	上野字山寺											
73	牧割寺古墳	古墳	上野字牧割寺											
74	天神塚古墳	古墳	上野字天神山											
75	武家遺跡	散布地	上野字武家											
76	中沢遺跡	散布地	落合字中沢											
77	池保遺跡	散布地	落合字池保											
78	金松遺跡	散布地	落合字金松											
79	延命寺遺跡	散布地	落合字延命寺											
80	原前遺跡	散布地	落合字原前											
81	岩間遺跡	散布地	正徳寺字岩間											
82	宮田遺跡	散布地	正徳寺字宮田											
83	天神前跡	散布地	正徳寺字天神前											
84	原敷遺跡	散布地	落合字原敷											
85	前田遺跡	散布地	落合字前田											
86	半庭遺跡	散布地	落合字半庭											
87	江曾原史前遺物包蔵地	包蔵地	南地内 (兒川川床)											
88	日下部遺跡	集落跡	七日市場字大泉庵 (山梨北中校敷)											
89	荒神山遺跡	跡	東											
90	榎田遺跡	散布地	市川字榎田											

第1図 山梨市遺跡分布図 (H.17.3.21以前)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1・2図）

足原田遺跡は山梨県山梨市万力950番地他に所在する。

遺跡は甲府盆地東縁を西南方向に流れる笛吹川の西側に位置し、秩父多摩甲斐国立公園の南端を構成する棚山（1171m）や兜山（913m）の東側の山裾に近く、笛吹川が形成した巨大な扇状地の西端にある緩やかな自然堤防状の地形、標高324m辺りに存在する。

遺跡のある平坦地は緩やかに南西方向にその体を伸ばし、南東側は緩やかに傾斜して笛吹川の方向に傾斜して行くが、北西側は通称万力ヤマジと一部がつながりながら、南西に下るにしたがって、やがて浅い谷を形成していくので、遺跡は緩やかな自然堤防の尾根状地形の上に乗ることとなる。

笛吹川は日本三大急流の一つと言われる富士川の大きな支流で、釜無川と荒川とともに盆地を流れる3大河川の一つである。その源頭は奥秩父山系の山中に発するが、三富村西沢溪谷の東沢との合流地点から南巨摩郡鵜沢町で釜無川と合流して富士川と名前を変えるまでの間を笛吹川と言う。

この川の支流には琴川・鼓川・兄川・弟川・重川・日川・金川などがあり、どの支流も氾濫を繰返して盆地に大量の砂礫を掃出してきた歴史がある。江戸時代の「甲斐国志」には、笛吹川の流路が現在とほぼ同じ場所を通過していたことが記されているが、明治40年の大水害以前には笛吹市石和町石和辺りでは現在の平等川付近の流路を通過していた。古い時代には塩山市を流れ下る重川に東から押されて、笛吹川の流路は兜山の裾の平等川まで押されていた時が何回もあったのであろう。

恐らく笛吹川は足原田遺跡を洪水で洗ったことがたびたびあった。遺跡の乗る微高地が石や砂礫で構成され、また、遺跡そのものも砂礫によって削り取られている個所が多いことは、厳しい自然の洗礼に頻繁に会いながらも、人々が我慢強く生業の営みを続けていたことを雄弁に物語っている。

地名「万力」の由来は、『甲斐国志』によれば「水防最一ノ処」で、その衛護を祝するために名付けられたという。現在も万力公園内に中世を起源と思われる堤防が残り、これによって、かつての上万力村や落合村、山根村、正徳寺村などは水害から守られるようになった。

ちなみに車で現地へ赴く場合は、国道140号線を甲府方面から山梨市に入り、「フルーツ公園入口」の交差点を左折して、すぐにもう一度左に曲がって西関東道路アクセス道路入ると、100mほど入った地点が遺跡の始まりである。電車ではJR東日本の中央線山梨市駅を左に出て西側に進み、笛吹川に架かる根津橋をわたって国道140号線を横切り、フルーツ公園方面に行くと、西関東道路のアクセス道路があるので、これを左に入ると前述の様に遺跡がある。駅からは西へ僅か1kmである。

### 第2節 歴史的環境（第1図）

足原田遺跡からは古墳時代4世紀の土器と平安時代11世紀頃の村跡、中世陶磁器などが発見されている。歴史的な背景は、これらの時代を中心として述べる。

足原田遺跡の所在する山梨市は甲府盆地が北東側に大きく広がっているその西辺にあり、北西からの季節風が西の兜山・棚山に遮られた温暖な場所に位置している。

山梨市内には約90ヵ所の遺跡があるが、この内約3万年前のナウマン像の化石が出土した兄川河床は人類の足跡が定かではない。縄文時代の遺跡は、20ヵ所あまり存在しているが、山梨市七日市場の七日子遺跡から中期の石囲炉3基が検出され、同市大野からは中期の住居跡13軒が発見されているほか、東後屋敷・七日市場・下石森や兄川・弟川流域に遺跡がある。弥生時代の遺跡は5ヵ所と少なく、重川流域と落合に知られている。

古墳時代の集落は、三ヶ所や上神内川、下石森、大野などに12ヵ所の集落と西部山麓や上神内川、三ヶ所に8基の後期古墳があり、中でも上岩下の牧洞寺古墳や天神塚古墳などは横穴式石室の全長が8～10mク



ラスで、県内第3位の規模を誇る。平成14年度に西関東連絡道路関連で発掘調査を行った山梨市上岩下316番地他の武家遺跡では、弥生時代の溝1条、古墳時代前期の住居1軒と方形周溝墓2基が検出されている。山梨市におけるこの時期の調査は武家遺跡が最初で、今までは4世紀から5世紀の集落や古墳は発見されていなかったが、足原田遺跡の膨大な4～5世紀の土器群の出土によって、古墳時代の早い時期にこの地域で大きな集落が営まれた可能性があり、その勢力が6世紀後半に至って甲斐国の中心勢力の一つに成長したことが明らかになった。

このようなことは今まであまり知られていなかったもので、さらに、小規模な方形周溝墓群や中期古墳の発見も期待できる。しかし、前期古墳の中心地である中道町の銚子塚古墳周辺の勢力は、盆地内部の集落の力を結集して巨大古墳の築造に関わったわけだから、山梨市地域では前期古墳が無く、甲斐地域権力が山梨郡へ移動してきた古墳時代後期の6世紀に至って、始めて古墳の築造が行われたとしても不思議ではない。

上岩下の武家遺跡の方形周溝墓群の存在は、前述の考えを裏付ける資料の一つであるが、方形周溝墓群は山梨市内で今後は何ヵ所も発見されるものと思う。

今から1200～1000年ほど前の古代律令時代には山梨郡は甲斐国の中心地となっており、現在の山梨市の地域は古代山梨郡内の山梨郷(春日居町付近から山梨市落合、万力あたり)、加美郷(山梨市八幡・岩手から小原・七日市場・下井尻あたり)、大野郷(山梨市大野、神内川・石森あたり)などに比定されるが、このような甲斐国の中心地である山梨郡が置かれたのは、この地が笛吹川の広大な氾濫原であり、しかも温暖で肥沃な土地が農業の生産性を高めたことに起因するのではないかと思われる。奈良・平安時代の集落遺跡は58箇所を数え、最も遺跡数の多い時代となっている。

昭和24年から同34年まで4次にわたり発掘調査された日下部遺跡は、山梨市小原東の山梨北中学校庭から発見された遺跡で、10世紀頃の平成時代住居30軒や掘立柱建物等の遺構と、土師器・須恵器・鎌等の鉄製品などが出土し、発掘当時は県内外から大変注目された遺跡である。

この遺跡の名前となった「日下部」は、古代の氏族名による。奈良の正倉院に伝わる宝物中にある東大寺落慶法要に使われた伎楽面を入れた調庸白絶金青袋の墨書銘に「甲斐国山梨郡可美里日下マ〔 〕絶一匹」とあり、笛吹市一宮町大原遺跡では「日下」と墨書のある土師器坏が出土しており、古代に部民やその管理者である「日下部・日下部直」が置かれていたことが知られている。

「日下部」は東国に広く設置されていた部民であるが、『古事記』には「甲斐国造が中央氏族の日下部連と同祖」とされていることから、山梨郡に置かれた「日下部」や「日下部直」が甲斐国の中心的な氏族であった可能性が高い。しかしながら、明治8年に置かれた日下部村域が、古代氏族の中心地であったかどうかは、その地名からは確定できない。

平安時代末には甲斐源氏一族の安田義定が当地域に盤踞したといわれる。八幡庄安田郷を当初の拠点とした彼は、牧庄を拠点として盆地東部に勢力をおき、小原庄に館を構えたとも伝えられている。安田氏は治承4年(1180)には富士川の戦いで平氏に大勝するなどの活躍をし、その勇名を残している。

なお、中世にはいと集落遺跡の数が急激に減少してしまう。この傾向は県内全域で認められるものであるが、それは、建物が竪穴住居から平地住居や掘っ建て柱建物、高床建物へと変化していくことに主要な原因があると思われる。しかし、市内には県指定史跡となっている「連方屋敷」や「大野砦」「上野氏屋敷」「栗原氏館」など中世豪族の屋敷や館などがのこり、隣の笛吹市春日居町下岩下からは戦国時代の甲州金貨大判3枚が出土しているなど、中世の甲斐では有力者の拠点的な存在が認められる地域である。

「甲斐国志」によれば、この金貨出土場所は原田仁兵衛屋敷跡の北側と伝えられ、近くには武田信虎誕生屋敷、原三右衛門屋敷跡など戦国期の遺跡がある。下岩下は山梨市上岩下や万力に接している地域で、山梨市においても豪族の割拠があり、平安時代末から連綿とした人々の営みを確認できることが、本遺跡出土の白磁や青磁などの陶磁器や瓦器製の小型脚付土釜破片からもうかがうことができる。

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 遺跡の概要

甲府盆地東部の笛吹川左岸に位置する本遺跡は、笛吹川の形成した自然堤防上にあり、標高324mに立地する。遺跡の時代及び遺構は、古墳時代では谷部への大量の土師器への投棄場、平安時代後期の竪穴住居6軒とそこから出土した土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器等である。また、明確な遺構を伴わないが包含層からは青磁・白磁等があり中世の重要な遺跡があった可能性も指摘できる。

特筆すべきことは、大量の古墳時代土師器が出土した谷であるが、土師器とともに円礫が折り重なって出土したことである。谷における土器の廃棄や廃棄に伴う祭祀行為が行われたかは不明で、古墳時代4世紀～5世紀初頭に物送りの場として、周辺集落から持ちこまれた可能性も否定できない。共同祭祀の場とすれば、この地域の共同体の首長の存在も想定できよう。この首長層が6世紀には上岩下古墳群を築造した勢力へと発展したこともありうることである。

次の平安時代末の集落は小型の竪穴住居がまばらに散在しているので、短期間の集落であることがわかる。3号住居を4号住居が切りとって造られていることから、少なくとも2時期の時間差を知ることができる。3号住居は火災に遭って焼失したもので、土師器や鉄製品等の生活道具の出土量は少なく、当時はつつましい生活状況であったことがうかがわれる。

- ・調査対象面積 3,800㎡
- ・調査対象地番 山梨市万力950番地他
- ・調査遺構 古墳時代前期の谷跡と土器廃棄場  
平安時代後期集落 竪穴住居6軒

### 第2節 調査の方法（第2図）

発掘調査区は道路敷地であり、ゆるく左カーブした道路のためグリッドは緯度・経度に沿って5mメッシュで設定した。したがってグリッドナンバーは、そのグリッドの南西角の杭ナンバーが示す。基点は本年度調査区の西端とし、北から南にA～K、西から東へ1～45のナンバーを付した。したがって遺跡北西端のグリッドはA1グリッド、遺跡南東端のグリッドはK45グリッドとなる。

A1グリッド杭の座標は北緯35° 41′ 21″、東経138° 40′ 17″で、K45グリッド杭の座標は北緯35° 41′ 20″、東経138° 40′ 25″である。遺跡調査のためのベンチマークを2箇所に設置した。レベル原点として設置したK B M. 1（A9グリッド杭の南に設置）は標高323.070m、K B M. 2（E32グリッド杭の南西に設置）は標高324.805mである。

発掘調査はまず試掘調査によって確認された表土の厚さを重機によって剥ぎ取りを行い、この後に作業員によるジョウレンで遺構の確認作業を行った。この段階での出土品は原位置に残し、測量会社によるグリッド杭設置を待って、小破片はグリッドで取り上げた。

また、遺物の集中地区については、遺物の出土状況を平板測量などで位置やレベルを記録しながら取り上げた。

遺構が検出された場合は、住居内ではその出土位置に残して平板測量により記録を作成し、住居内は1～2本のセクションベルトを残して土層図を作成した。遺構の図面は20分の1で平板測量し、住居内の竈は10分の1の平面図とセクション図を作成した。古墳時代の谷は、当初幅の狭い溝と考え4号溝、5号溝と命名したが、この北側を拡張したときに大きな谷の一部であることが明らかとなり、後にこれを一括して扱うことにした。

4号・5号溝は一部平板実測で遺物を取り上げていたが、5号溝の調査途中から航空測量会社に出土遺物の写真实測を行い、上面の出土状態を図化した後、光波測量機により遺物を取り上げてさらに掘り下げ、

第2面の下層の遺物分布図を写真測量図化、光波測量機による取り上げをした。したがって、谷全体の遺物や石等の記録は一部整合性にかける部分がある。

### 第3節 調査の成果

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

##### 1) 谷跡(第3図)

調査区の北西側から発見された浅く幅広い谷跡で、道路敷内で確認されている遺構の幅は東端で8m、西端で5m、全長は60mである。西端は周辺の確認面とほぼ平坦となっており、遺物の分布状況から投棄された谷の一部とみなすことができ、東側では谷の縁と底の差は30~50cmで、緩やかな皿状の窪みとなっている。

谷の土層は西側の調査区壁面A18杭の西側約70cmから2m幅で断面(A-A')の観察を行った(第3図)。谷を埋めている土層は、表土から8層が認められる。最上面の表土(耕作土)は60cmの厚さがあり、2層目は30cm厚の灰色砂質土である。3層は10cm程度の黄褐色砂質土、4層は粒子の粗い明灰色砂質土、5層は厚さ30cmの灰色砂質土であるが、3層より粒子が細かく締まった層である。6層は次の7層・8層とともに谷の覆土の主たる構成土であり、7層の灰色砂質土を間層に挟んだ有機質を含む黒色土層である。遺物はこの6層と7層に含まれている。また、旧5号溝とした北側の断面図(B-B')でも、3層と4層が遺物包含層であり、この層には有機質を多く含む。なお、断面(A-A')の6層・7層がこれに対応する。なお、旧4溝としたA・B-11・12グリッドは、溝といってもほとんど浅い平坦面をしている。

このことから、谷の黒色土層が形成された一定期間の後、その谷に土師器や石が廃棄された時代が続き、やがて洪水砂により覆われたことが想定される。この洪水砂は硬く粒子が締まっていることから、洪水砂でも最も岸に近い部分に形成される土であり、粘質土も含むためにこのような硬さを持っている可能性がある。谷の遺物包含層となる覆土は、東側部分の谷頭では厚く、西側の下流に行くに従って浅くなる傾向がある。ただし、現況では水が流れた跡は不明で、この谷の全体規模も不明である。

##### ① 谷跡の遺物出土状態(第16~22図)

谷からは膨大な点数の遺物が出土している。平板実測による点数と光波測量機による点数の合計は凡そ1万点近い数となっている。膨大な数のために、上層と下層とを分けて作図しているが、ここでは1枚の平面図に納めてある。従って、多量の土器片の下や石の下の遺物は図化されていない。この欠を補うために、写真図版ではできるだけ出土状態が観察できる様に配慮した。

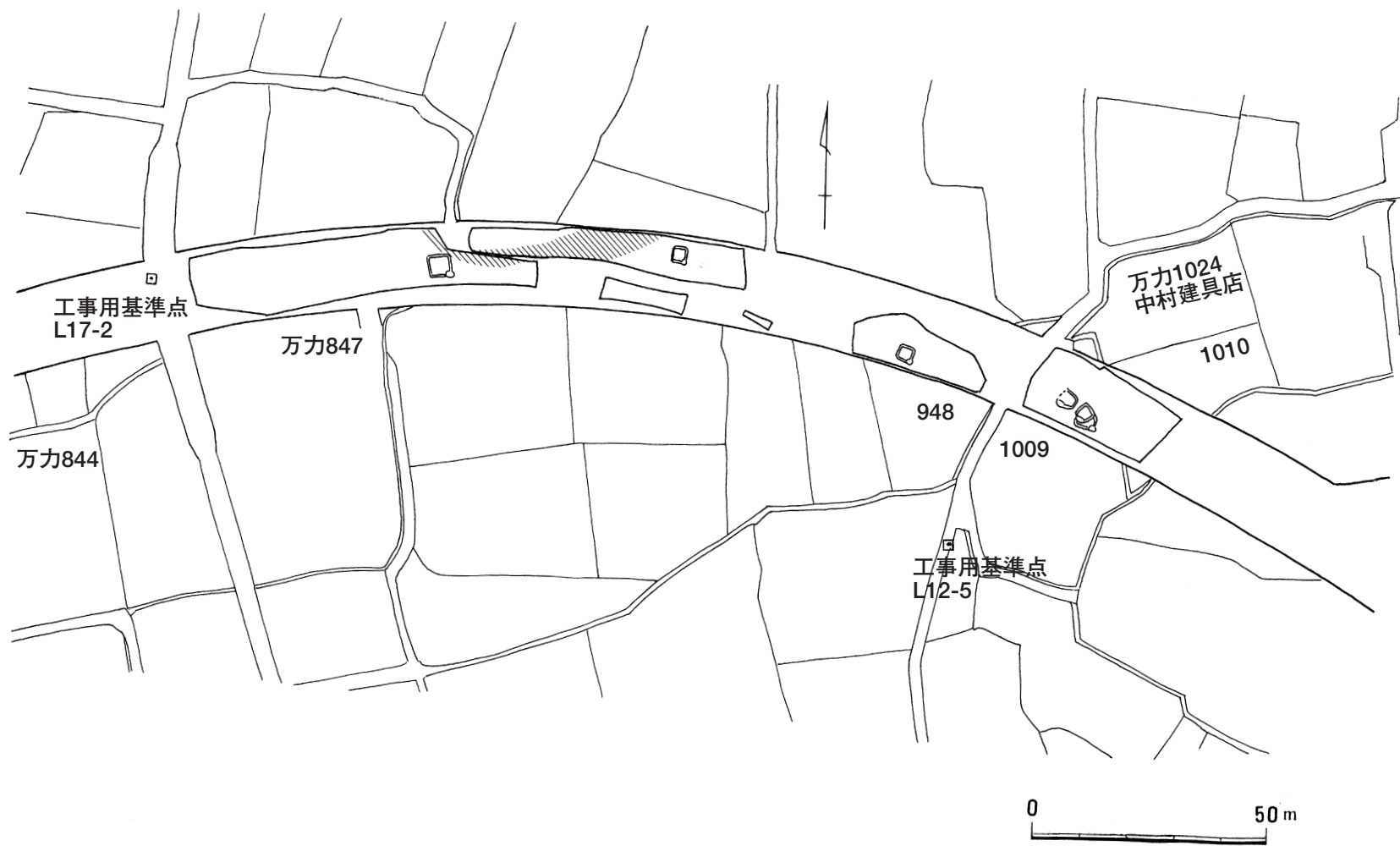
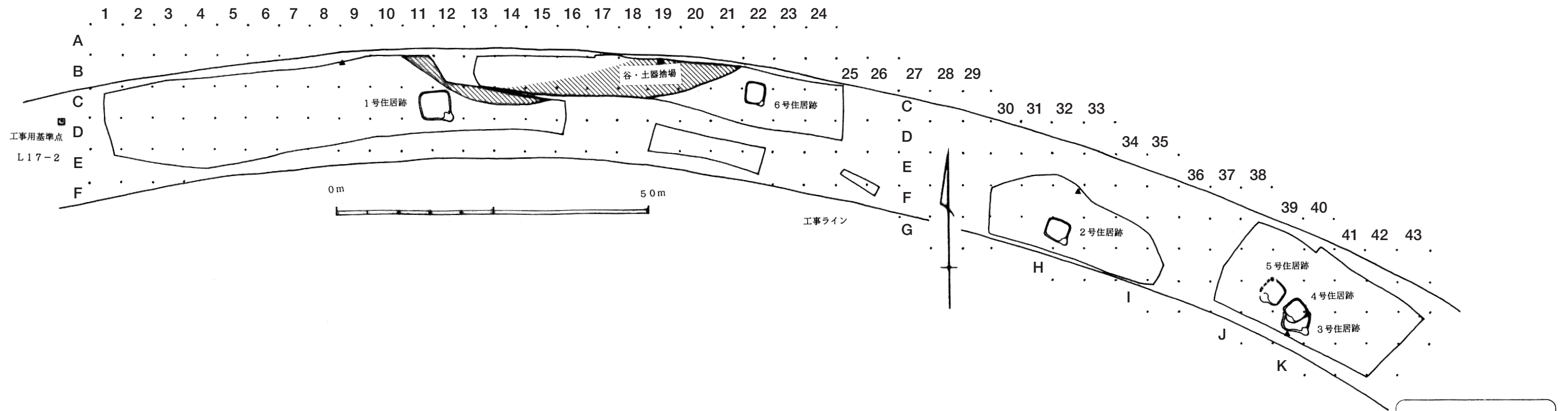
遺物の出土状態の特徴を上げるとすれば、

- i 土師器と石は折り重なって出土する。石は人頭大から30キロを超える一抱えもあるものもあり、なぜ土師器とともに谷に捨てられたのか、調査や整理では明らかとなっていない。
- ii 土師器は完全な形をしたものもまれにあるが、大部分は破損している。しかも、その場で破損したものは少なく、大部分は他所で破損したものが投棄された状態で出土している。
- iii 祭祀に使われる土師器には、主に高坏や器台、埴等が多いが、ここでは甕、壺、台付甕などの器が満遍なく谷から出土しており、生活で破損した雑物の投棄や廃棄の可能性が高い。ただし、埴・小型丸底鉢・坏などは谷のうち、旧5溝と呼んだ部分に集中する。
- iv しかし、全体が物送り場としての祭祀場の可能性は残る。
- v 土師器の大部分は、古墳時代前期であるが、一部に平安時代の土師器や灰釉陶器、白磁、12世紀以降の瓦器、青磁器破片瓦出土している。古代末から中世初頭の有力者の存在を想定できる。

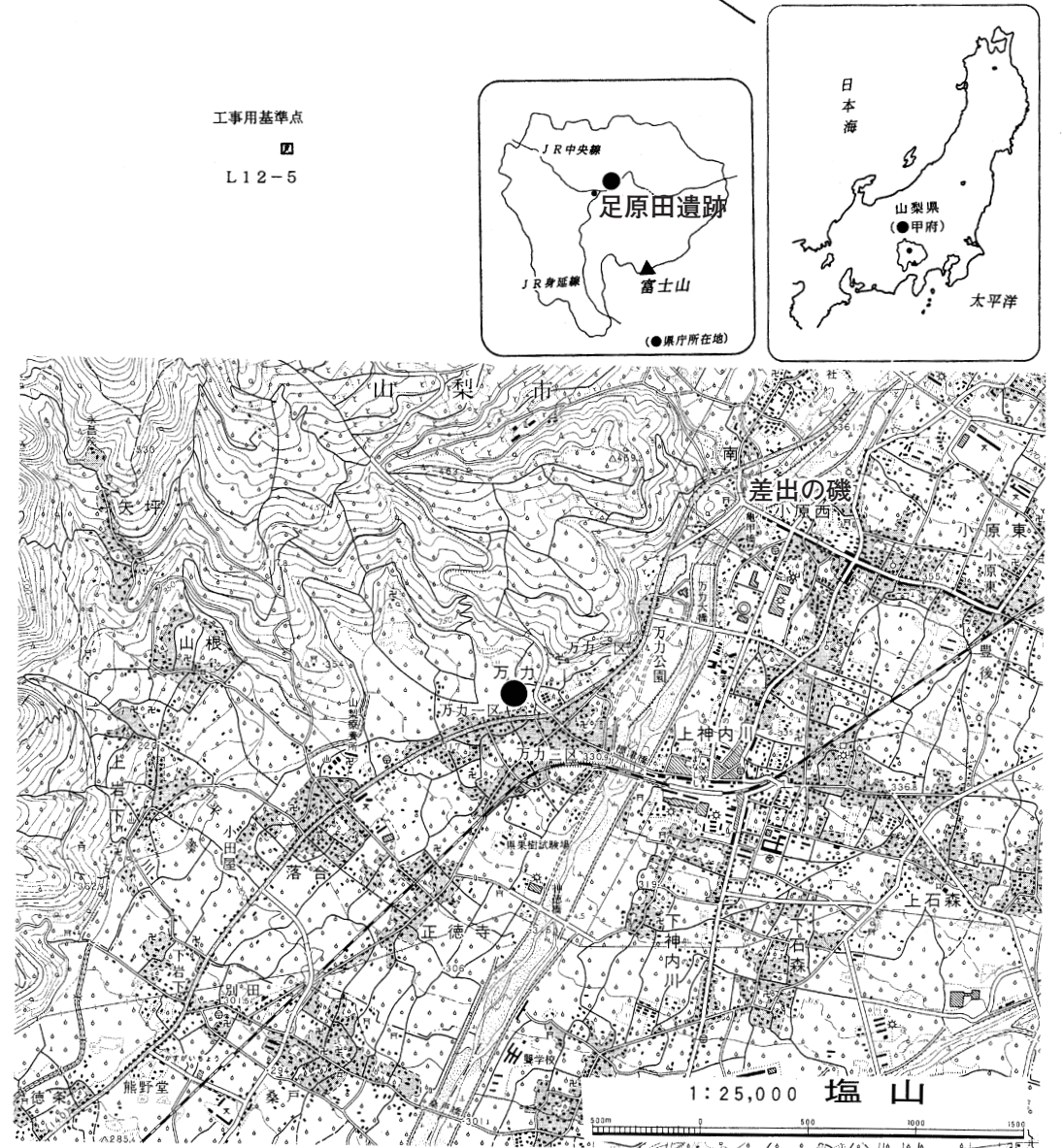
##### 2) 谷跡出土遺物(第4~15図)

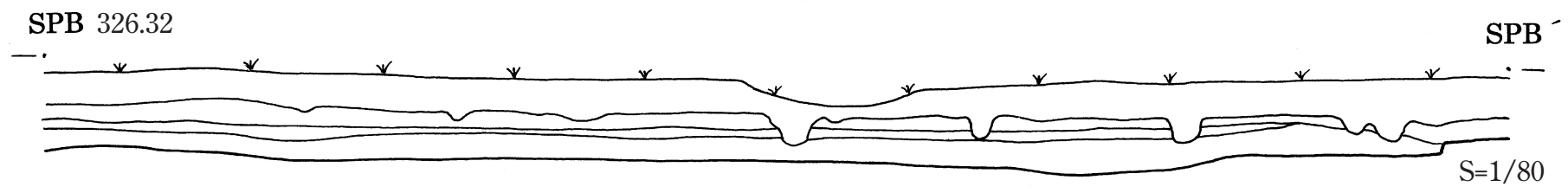
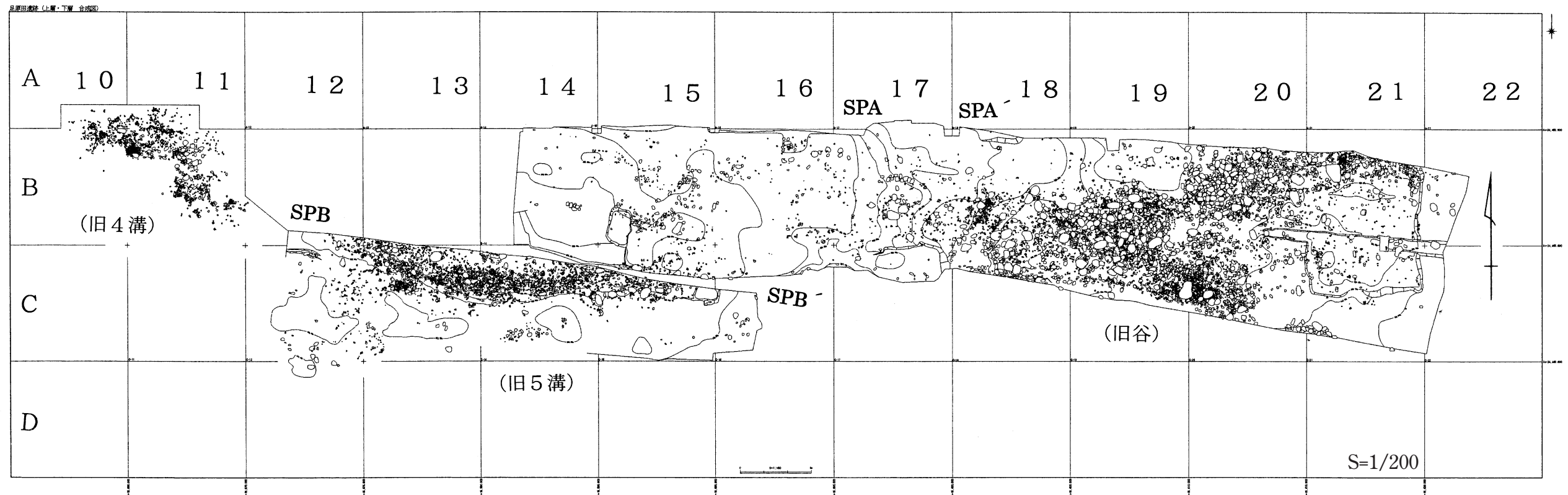
谷跡出土の遺物は、おおよそ古墳時代前期に属する土師器が主体を占める。壺、甕、台付甕、S字口縁台付甕、蓋、甑、小形土器(てづくね土器など)、鉢、碗、埴(直口壺)、坏、小型丸底鉢、高坏、器台等が出土している。以下、機種別に出土土器の概要を記す。





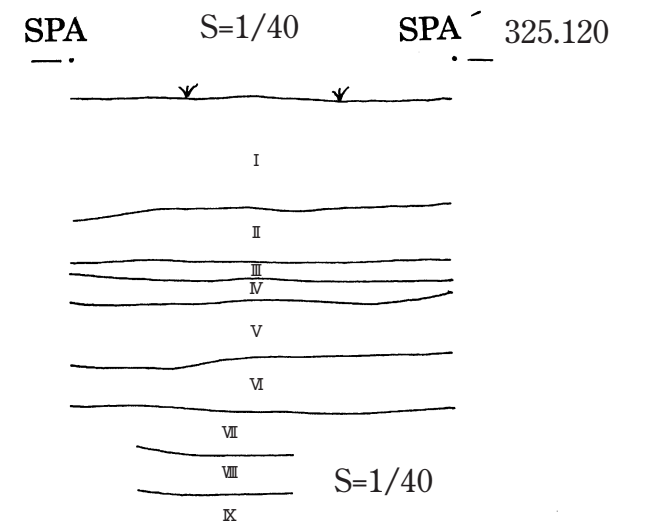
第2図 調査区全体図





旧5溝セクション (B-B')

- I 耕作土
- II 灰褐色砂質土
- III 暗黒色砂質土(有機質・遺物含む)
- IV 暗灰褐色砂質土(遺物含む)

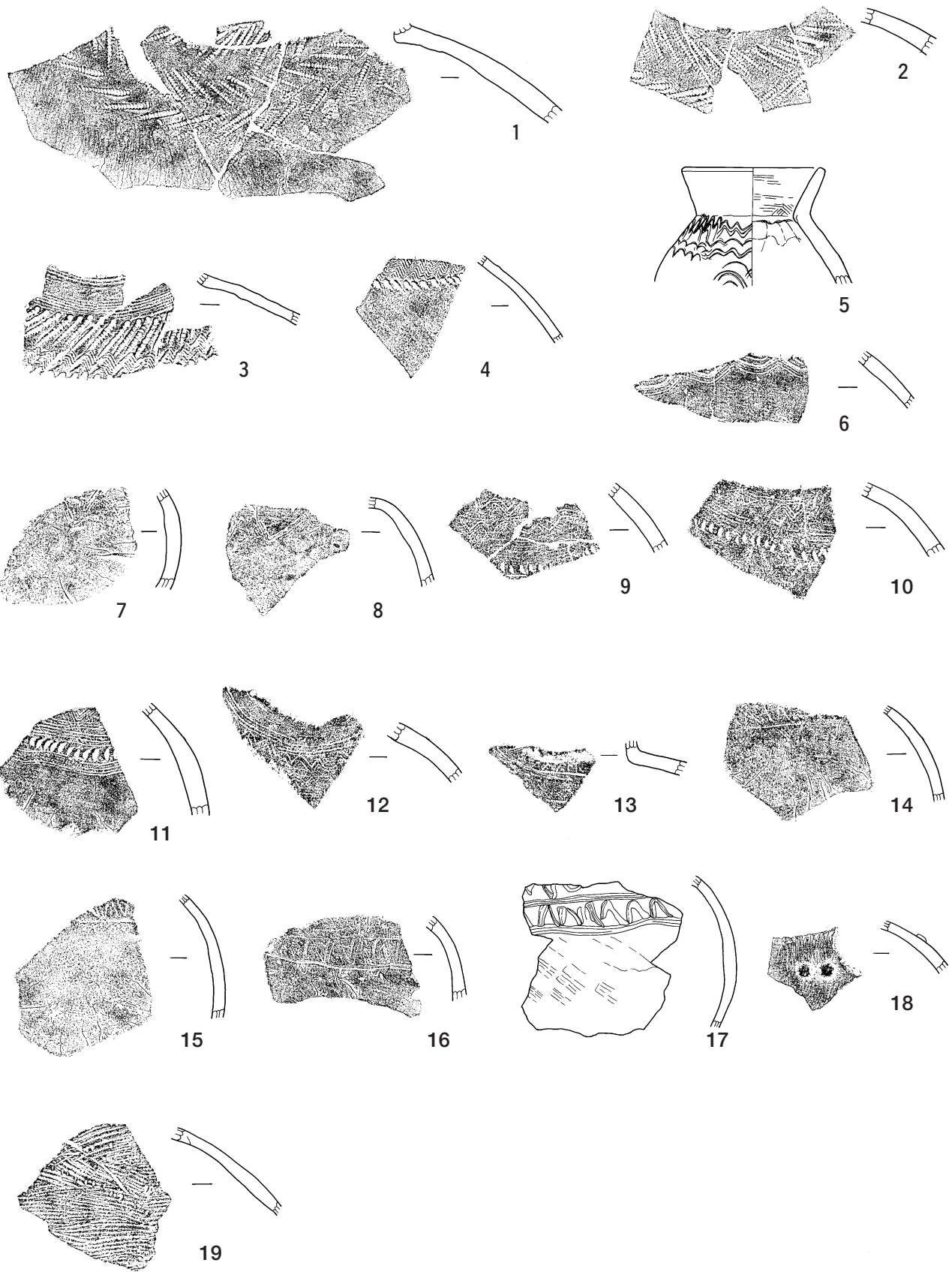


谷部東西セクション (A-A')

- I 耕作土
- II 灰色砂質土
- III 黄褐色砂質土
- IV 明灰色砂質土(粒子粗)
- V 灰色砂質土(IIIより暗く粒子細かく締まりあり)
- VI 黒色砂質土(有機質土)(遺物包含層)
- VII 灰色砂質土(Vより黄褐色)(遺物包含層)
- VIII 黒色砂質土(有機質でVIより黒い)
- IX 黄褐色砂質土

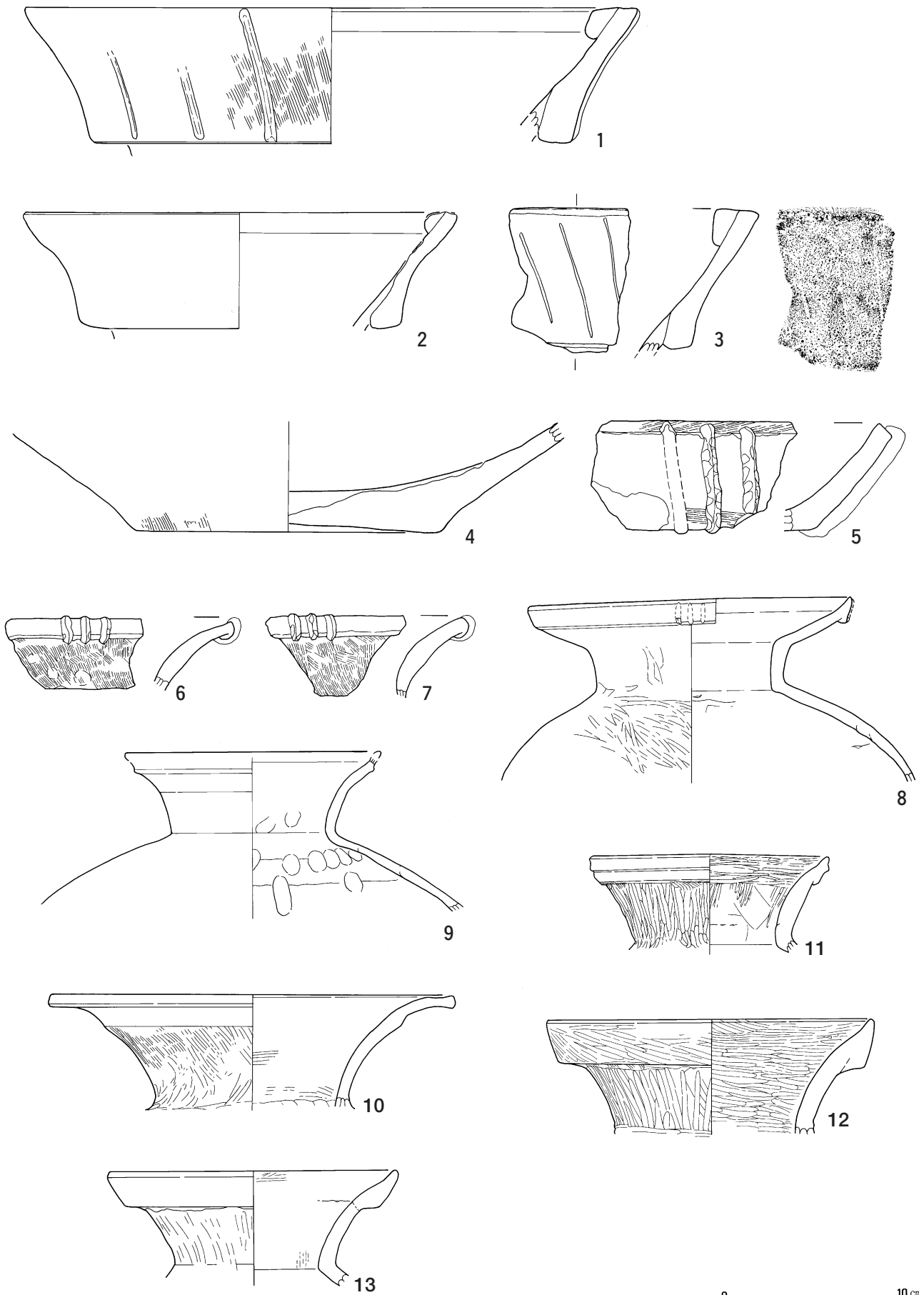
第3図 谷跡全体図・土層図 (S=1/200)



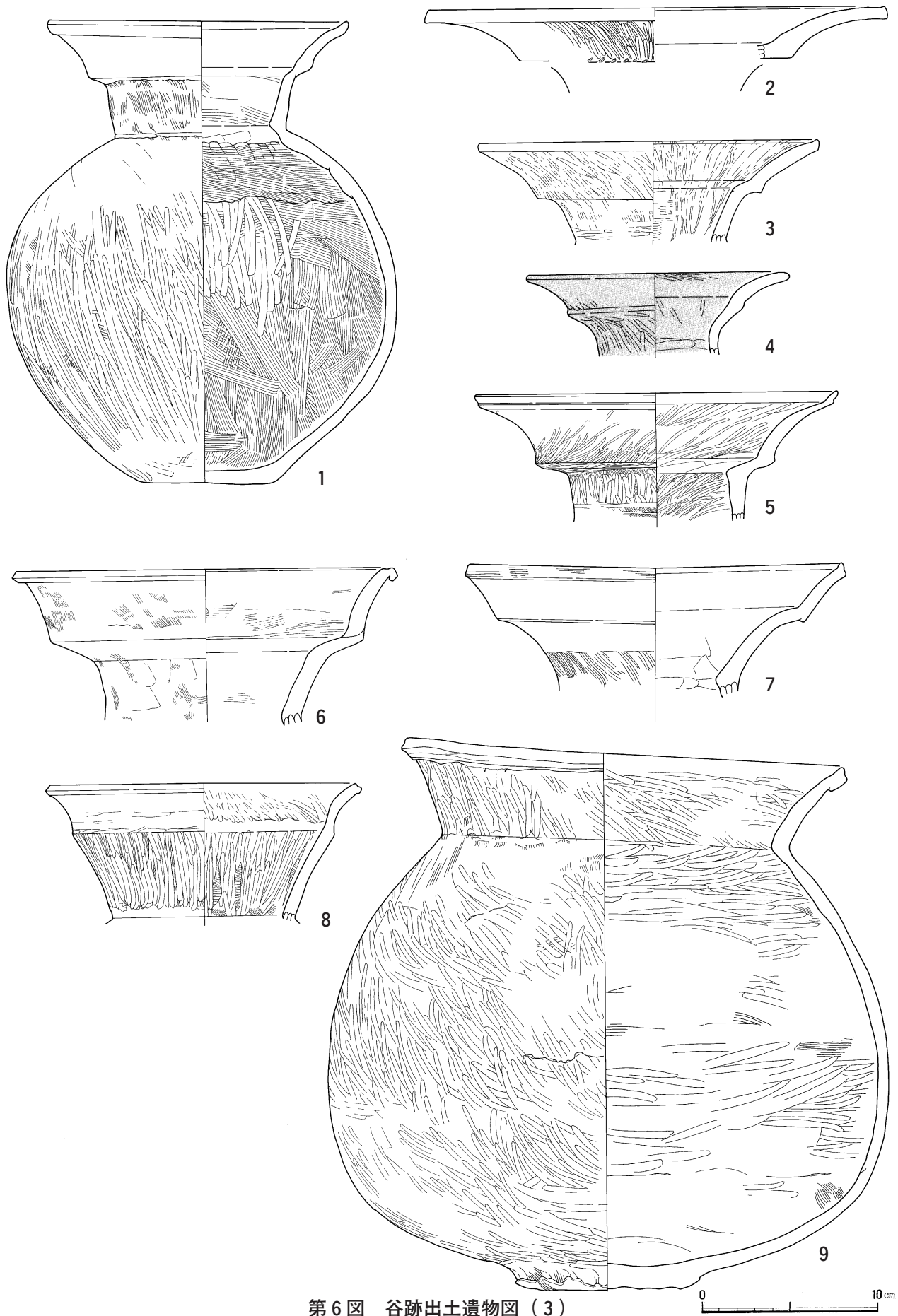


第4图 谷跡出土遺物图(1)

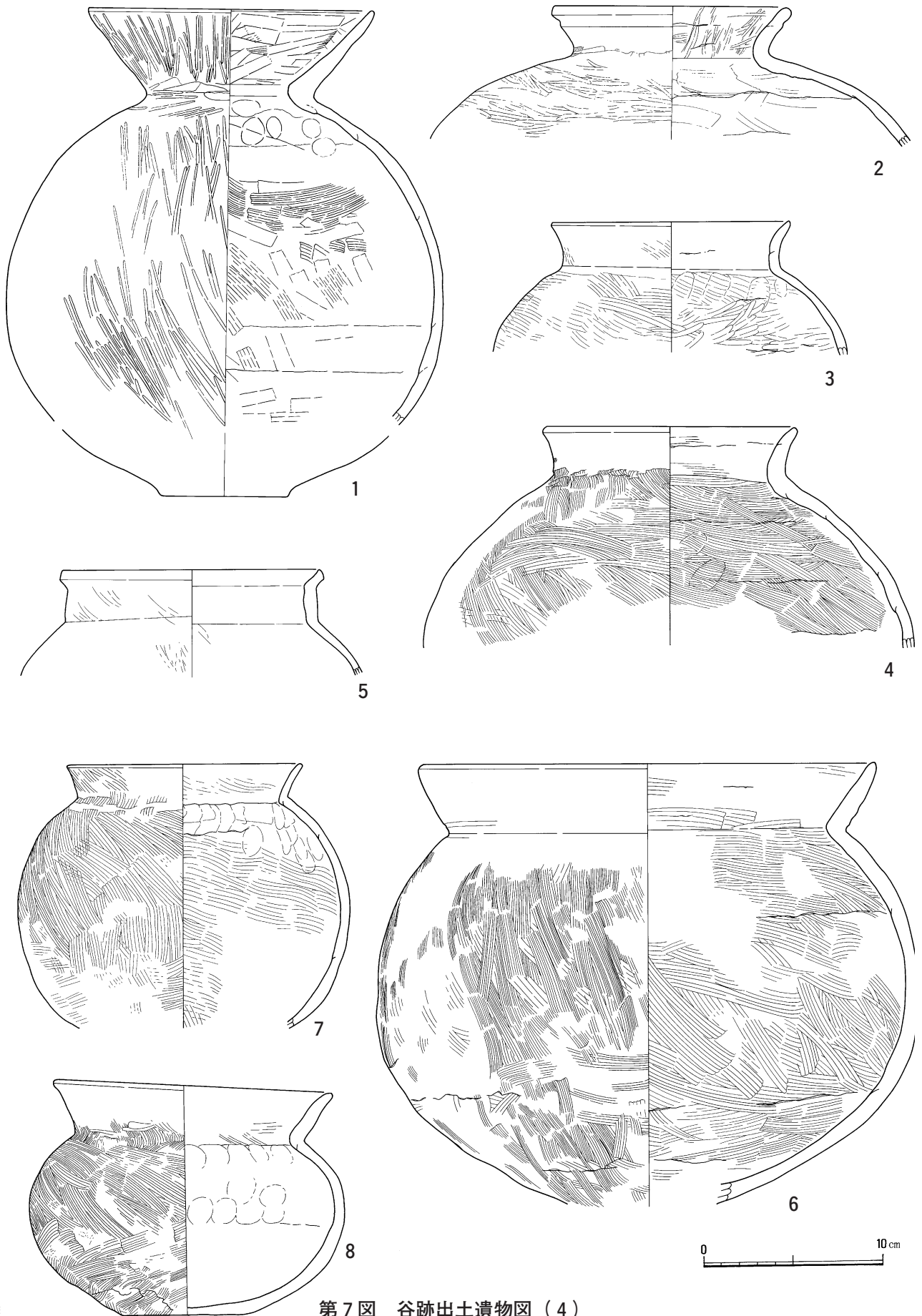




第5图 谷跡出土遺物图(2)

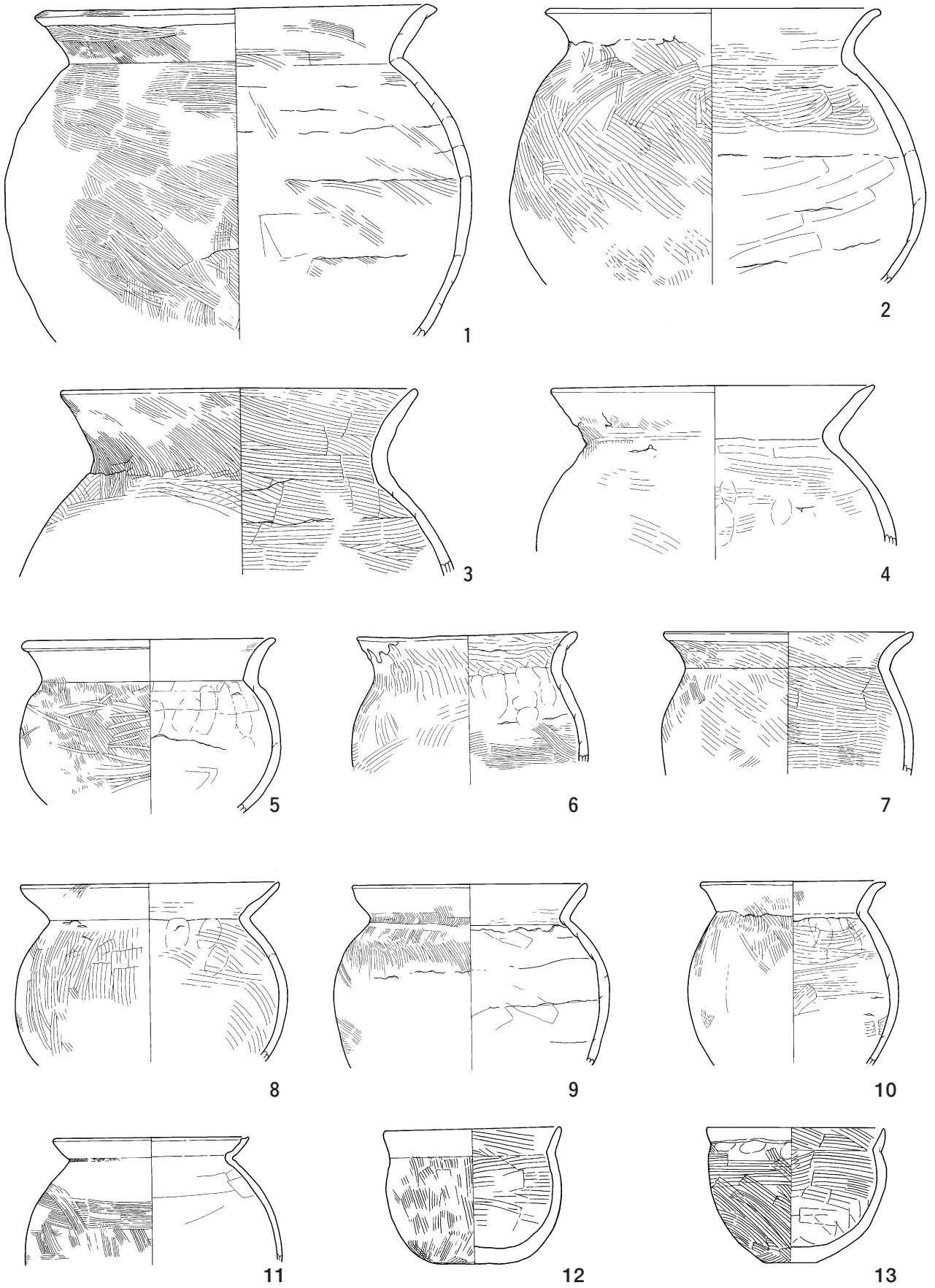


第6图 谷跡出土遺物图(3)

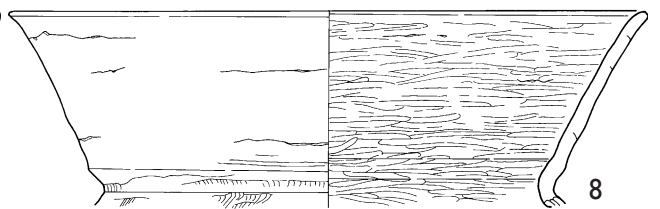
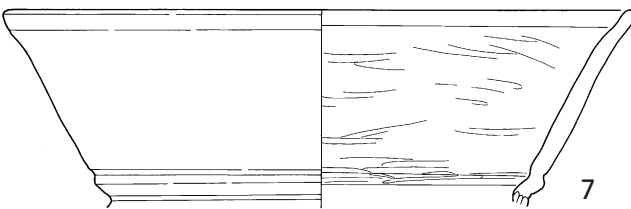
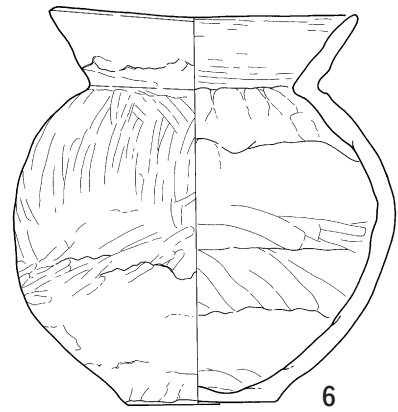
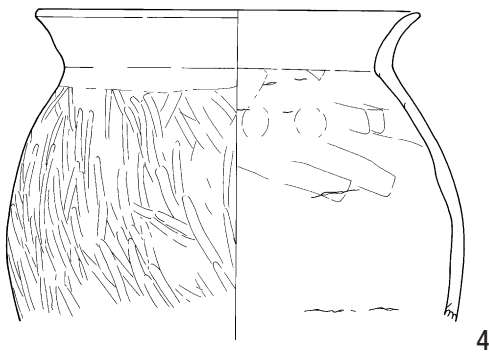
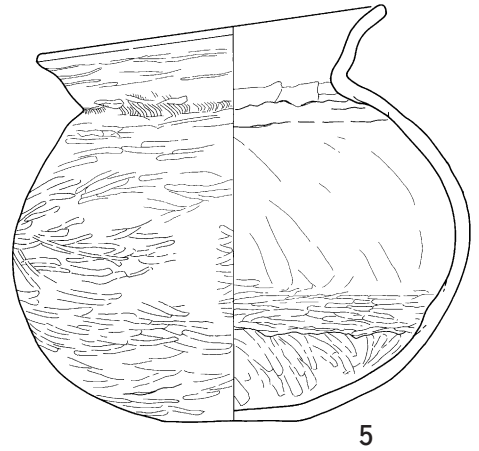
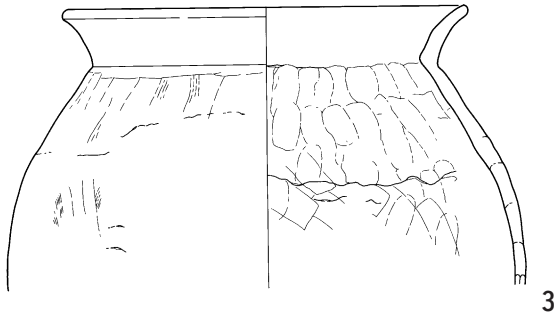
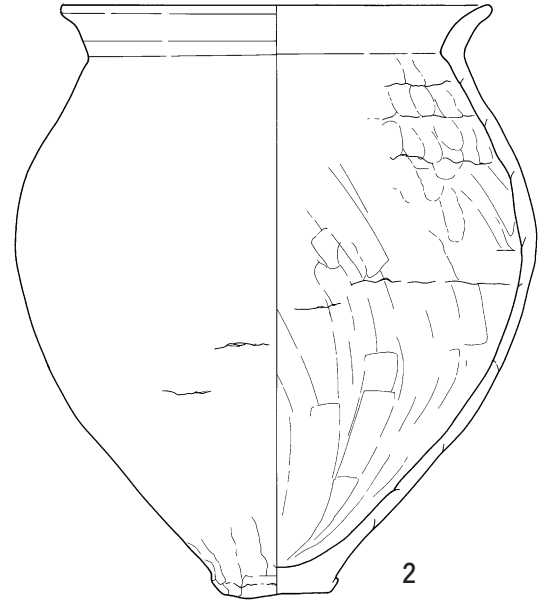
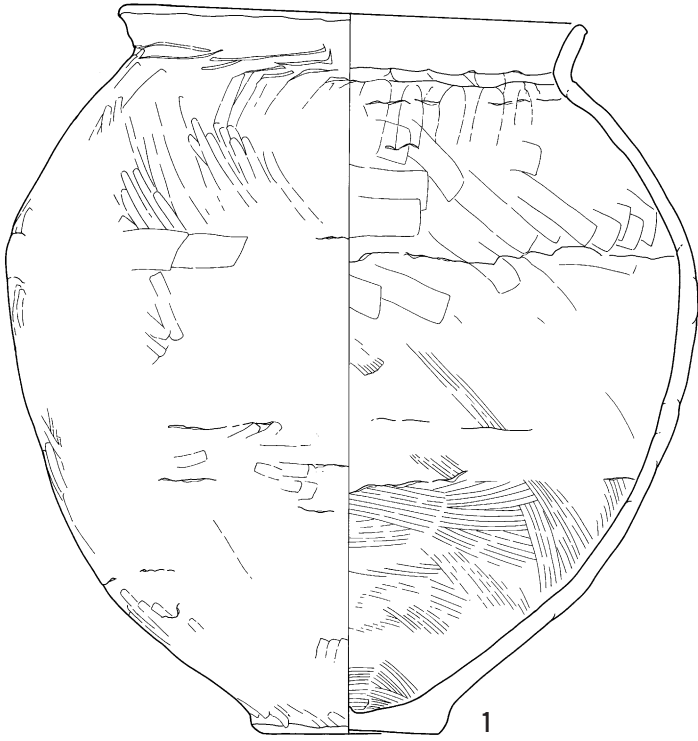


第7图 谷跡出土遺物图(4)



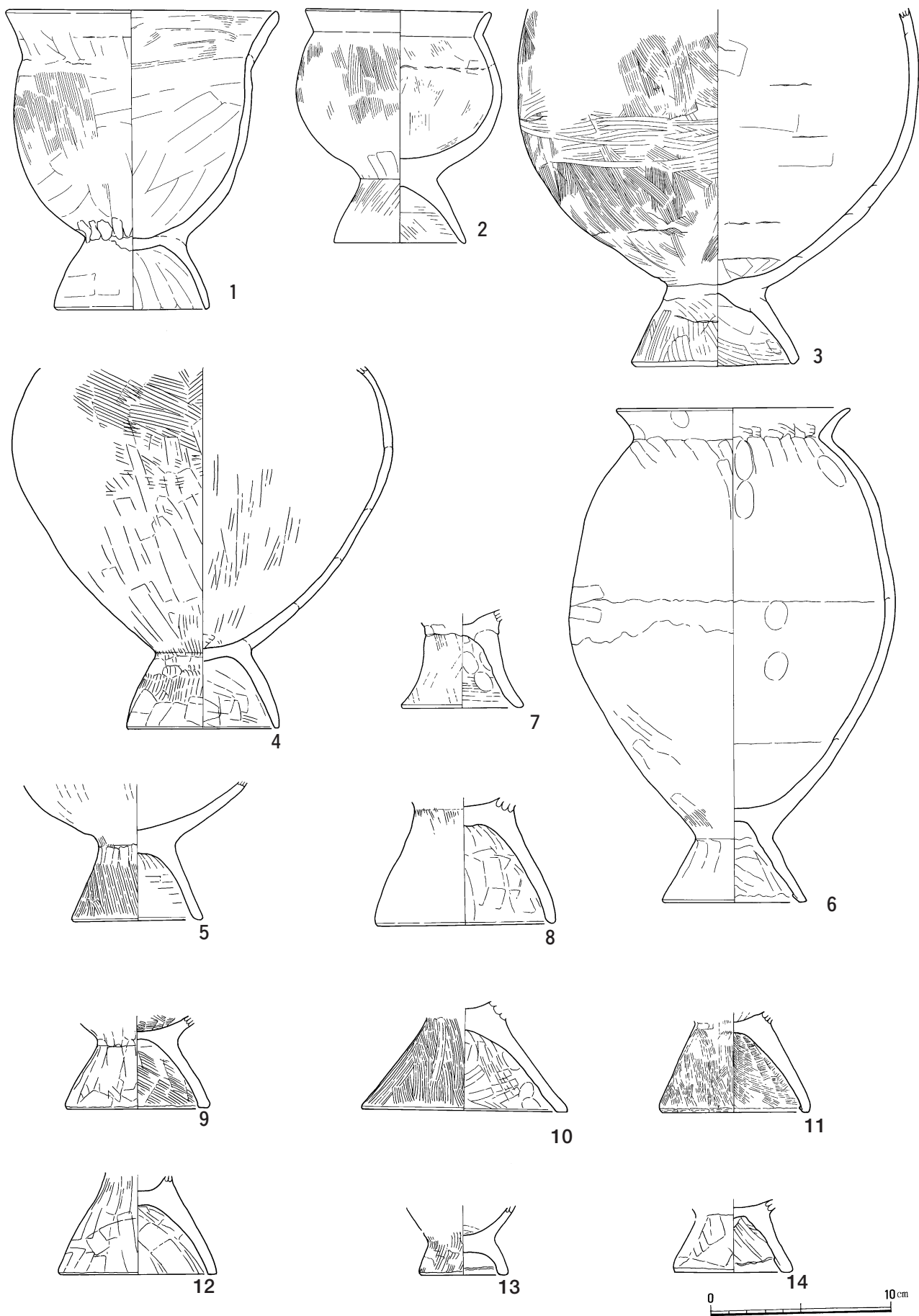


第8图 谷跡出土遺物图(5)



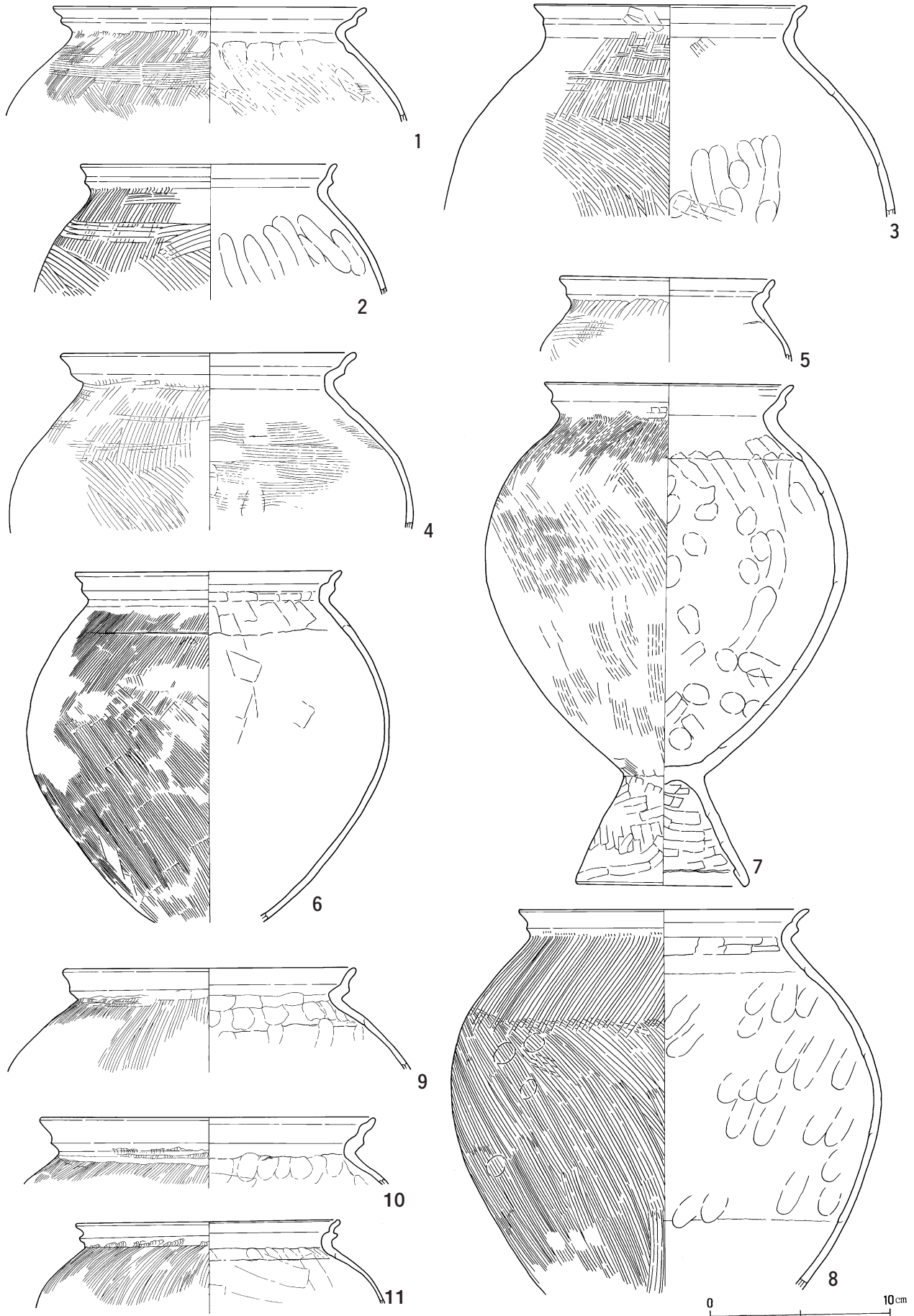
第9图 谷跡出土遺物图(6)

0 10cm

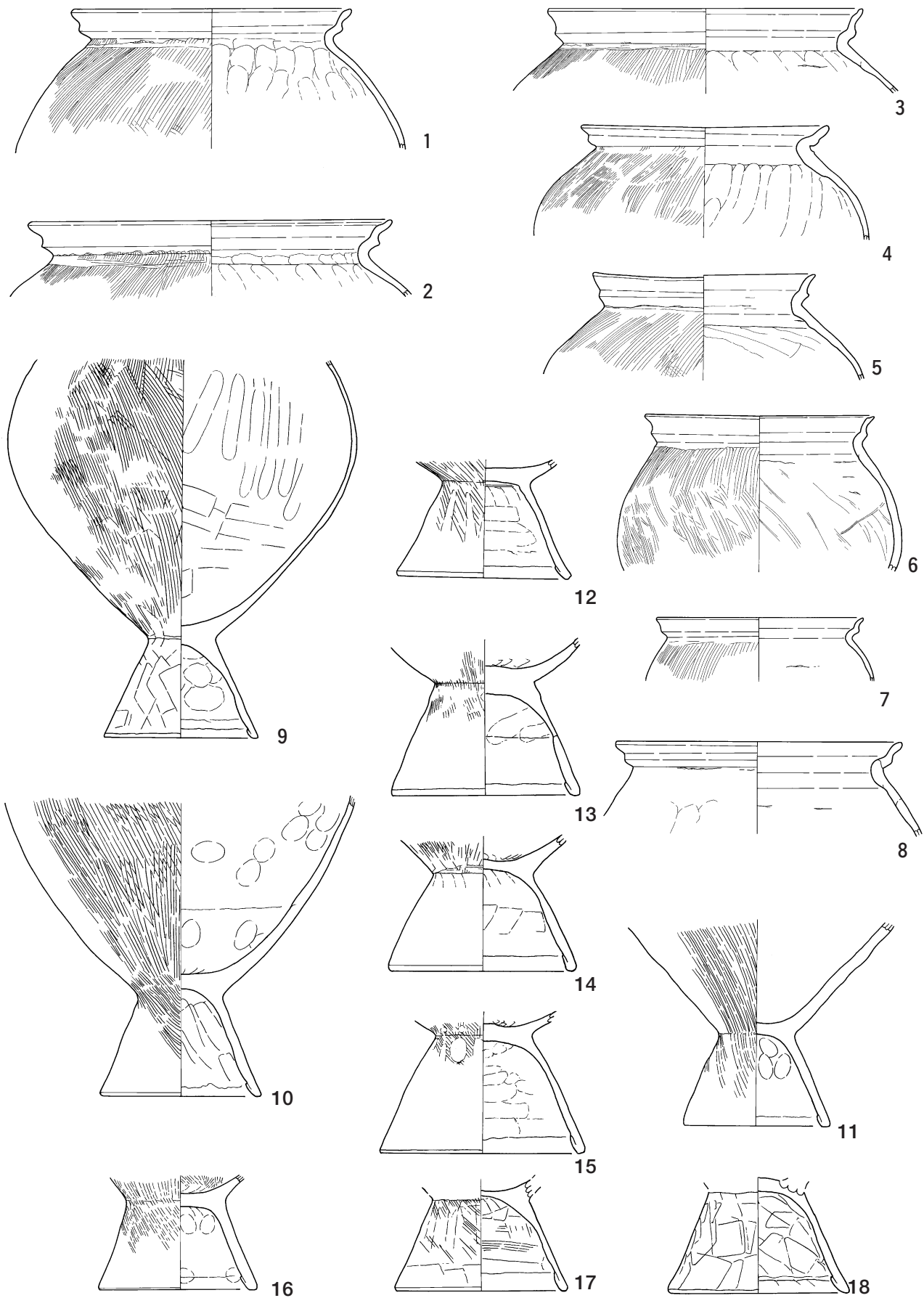


第10图 谷跡出土遺物 (7)



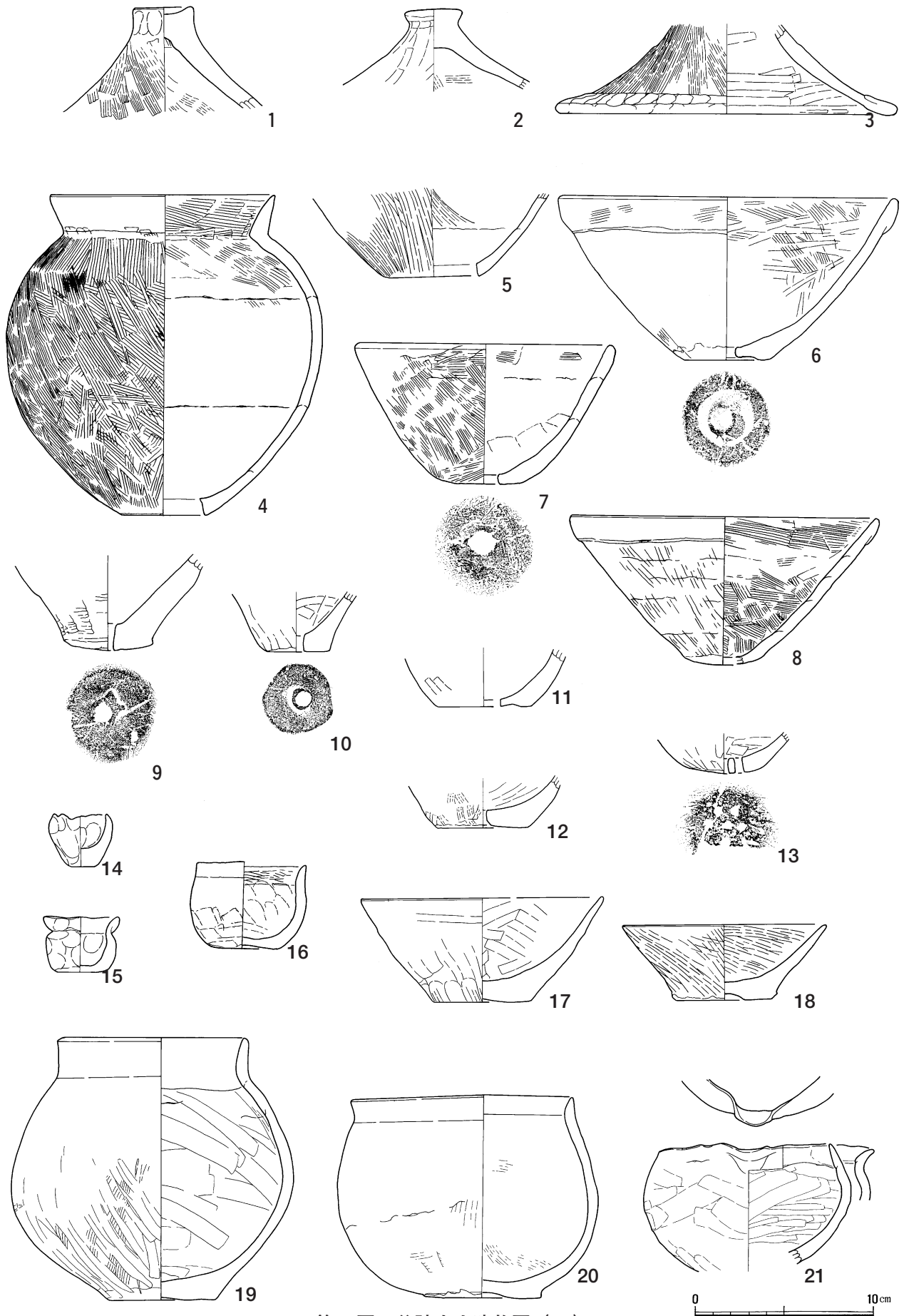


第11图 谷跡出土遺物图 (8)



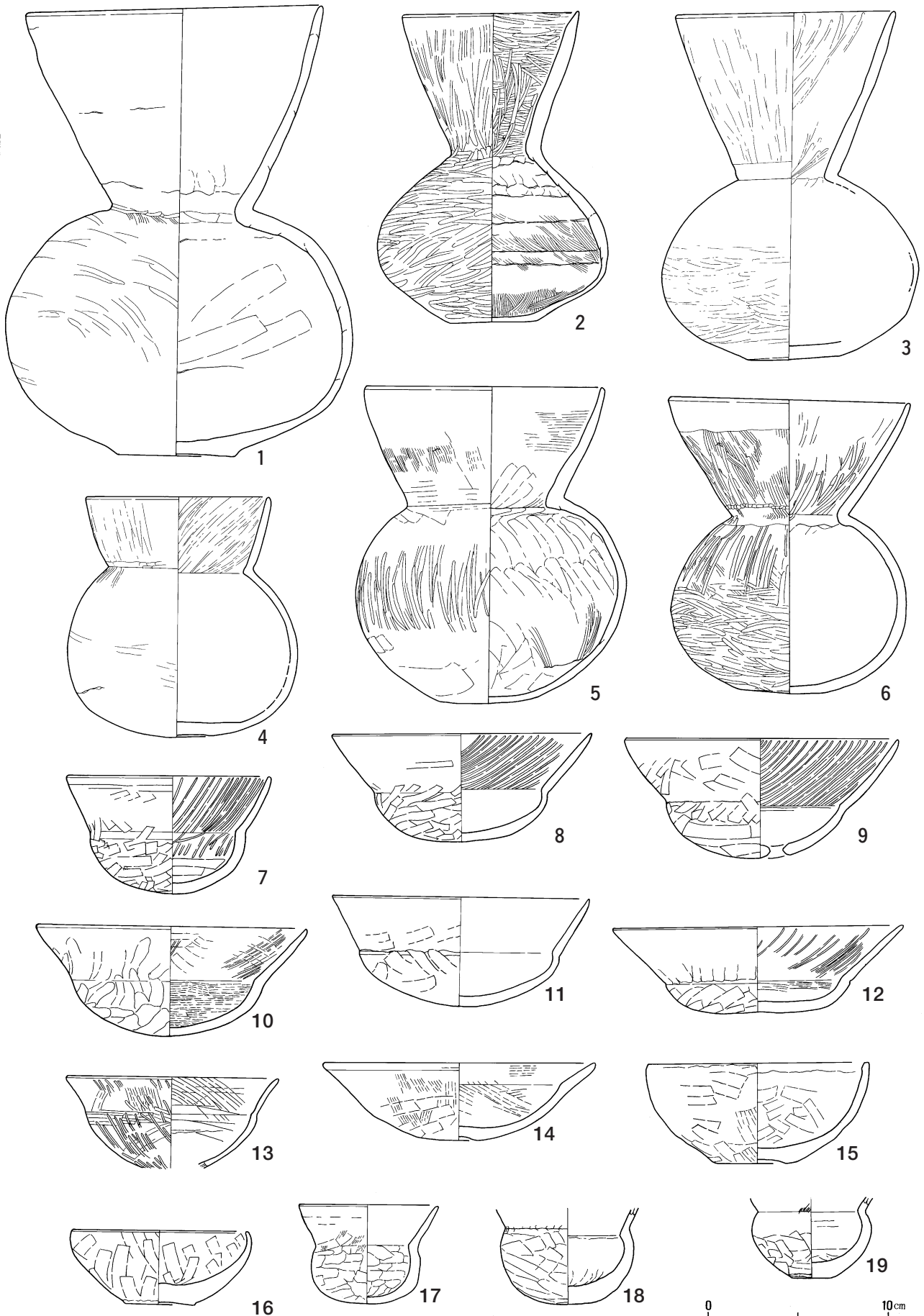
第12图 谷跡出土遺物图(9)

0 10cm

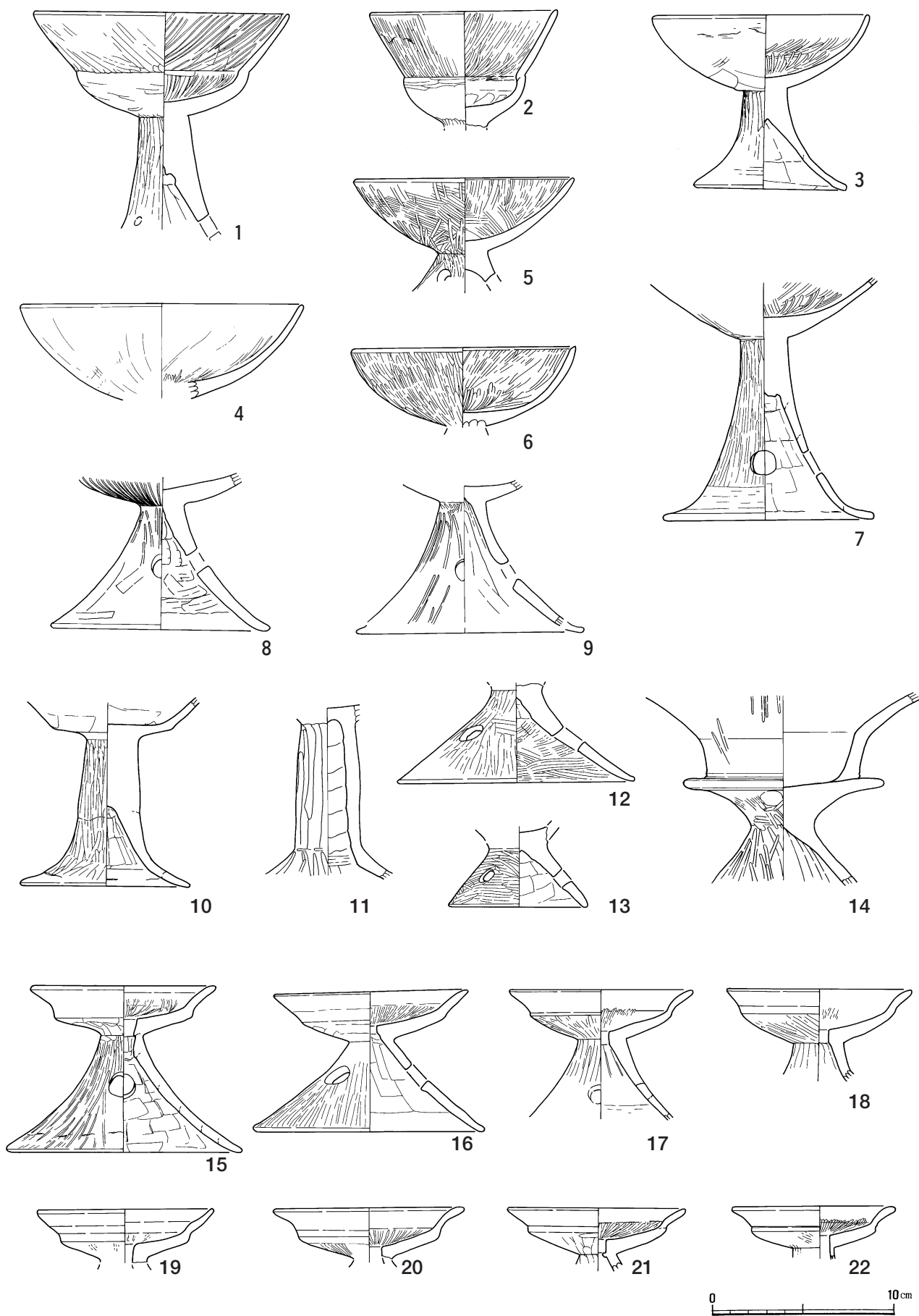


第13图 谷跡出土遺物图 (10)

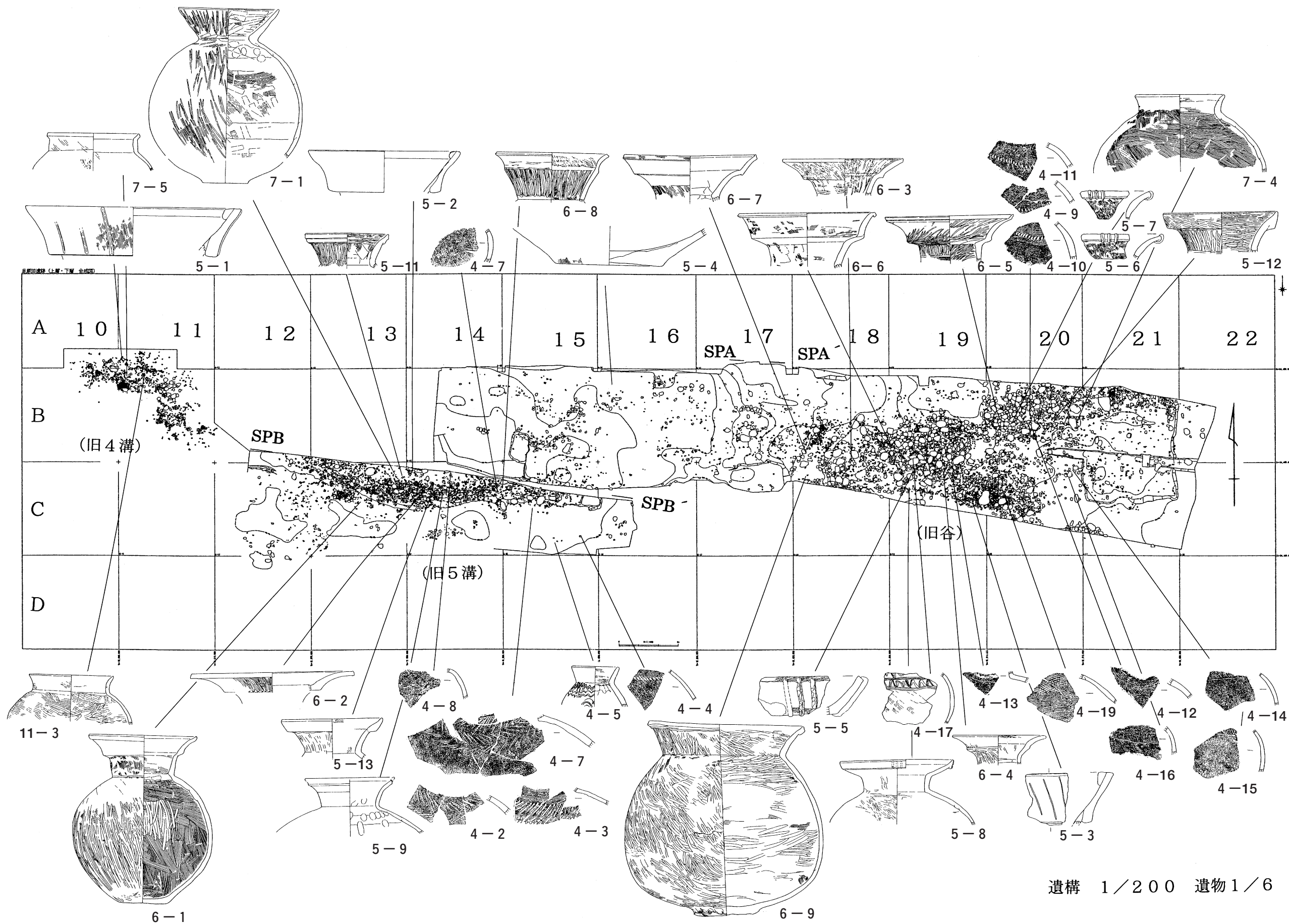




第14図 谷跡出土遺物 (11)



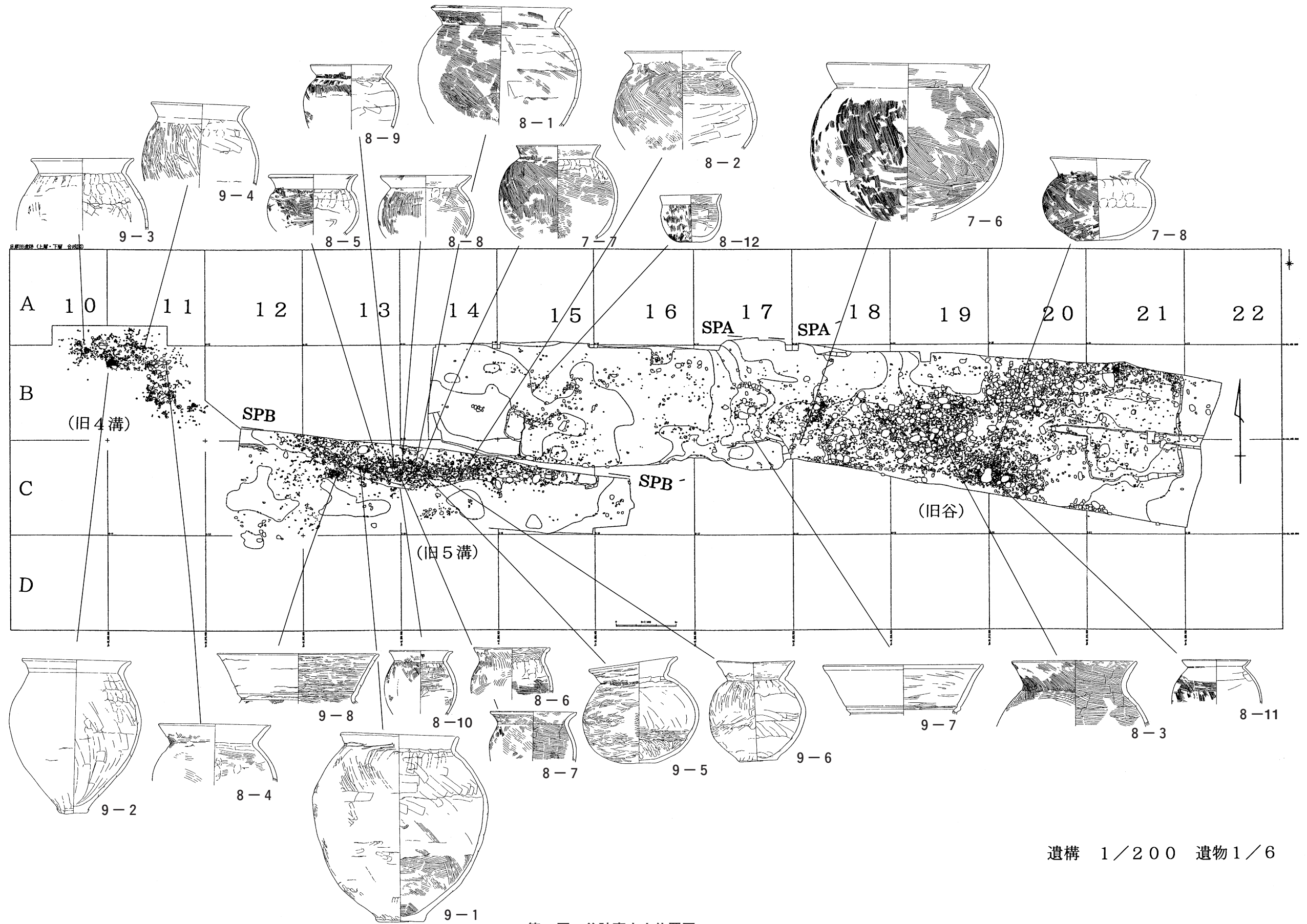
第15图 谷跡出土遺物图 (12)



遺構 1/200 遺物 1/6

第16図 谷跡壺出土位置図

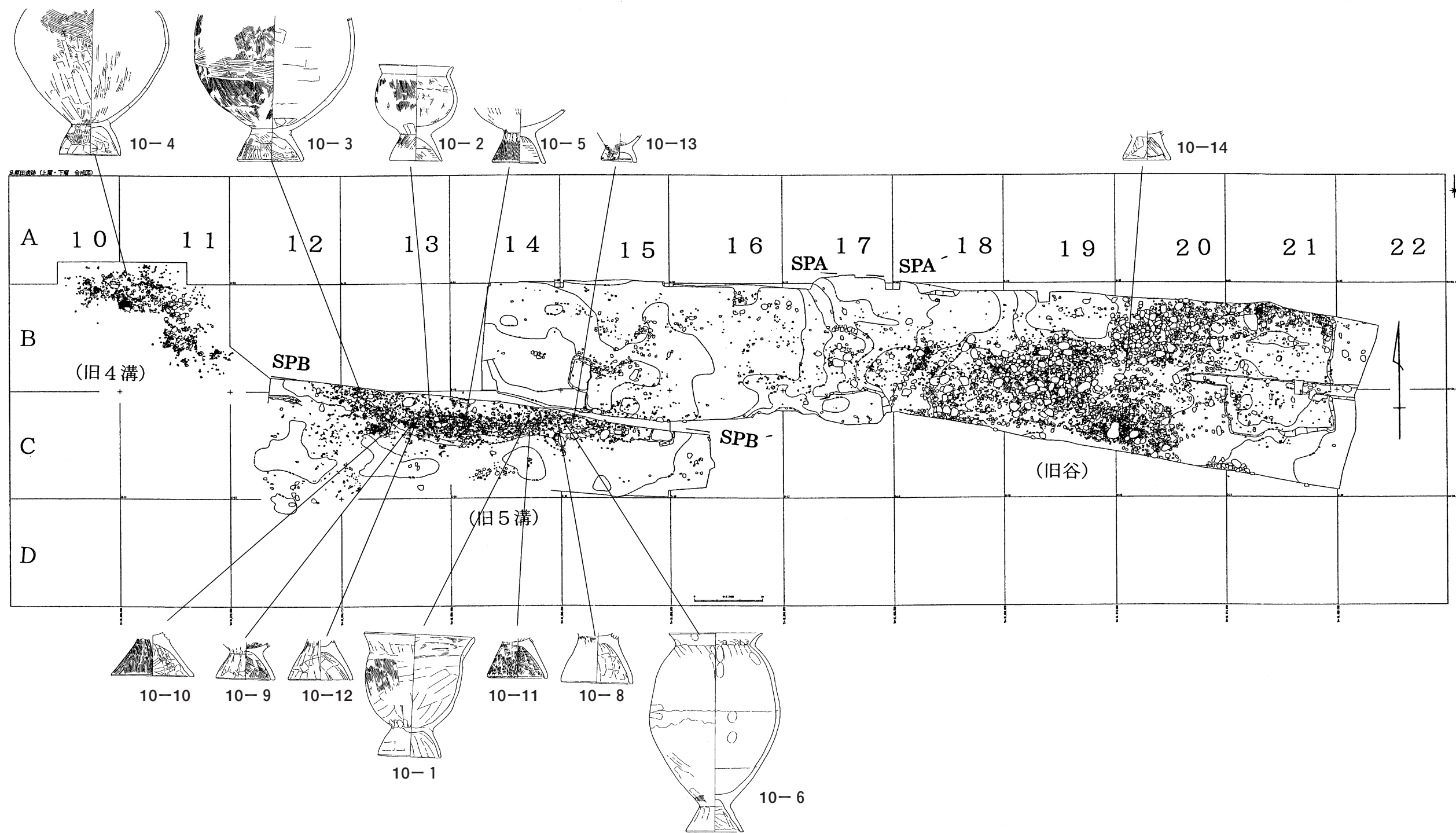




遺構 1/200 遺物 1/6

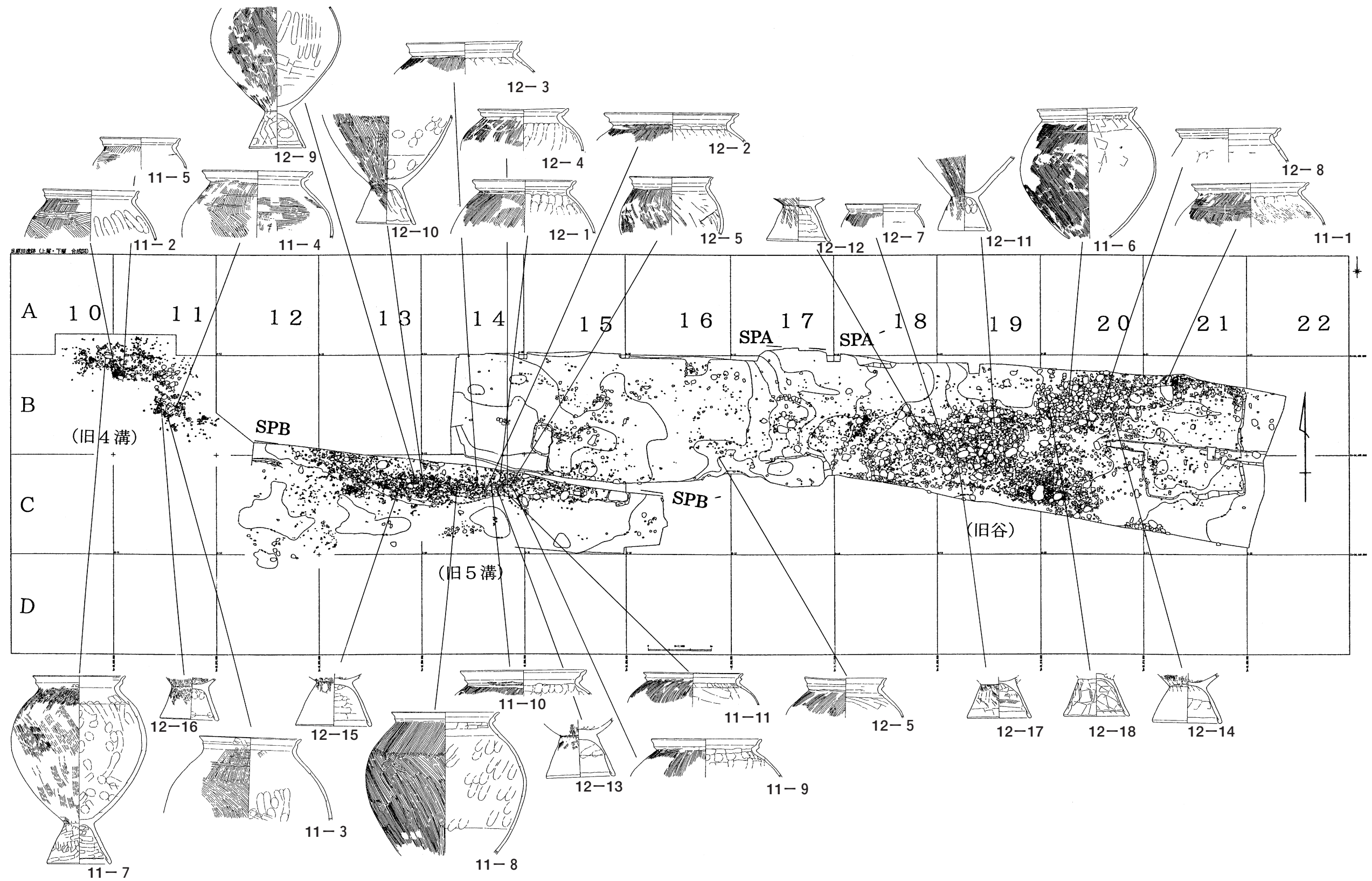
第17図 谷跡甕出土位置図





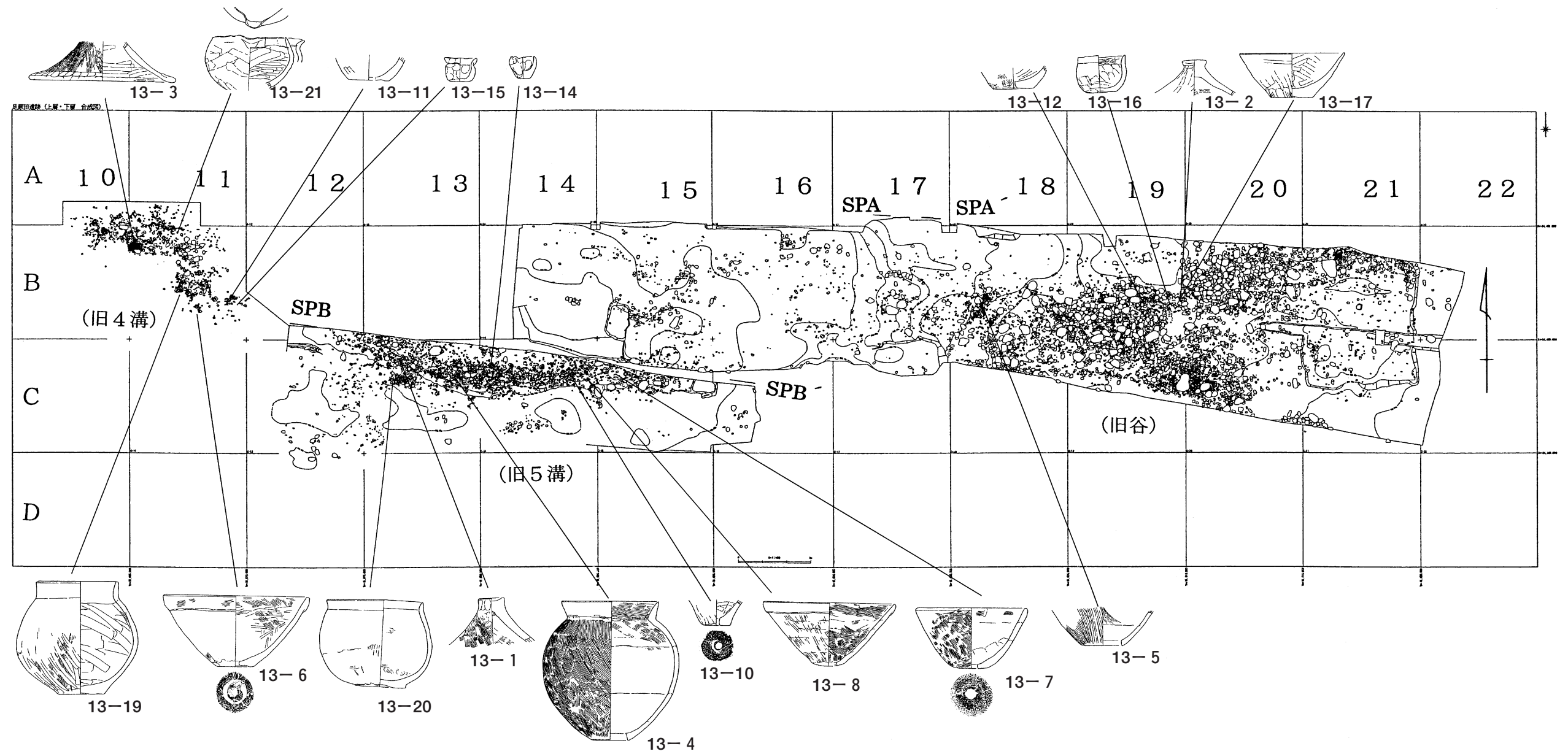
遺構 1/200 遺物 1/6

第18図 谷跡台付甕出土位置図



遺構 1/200 遺物 1/6

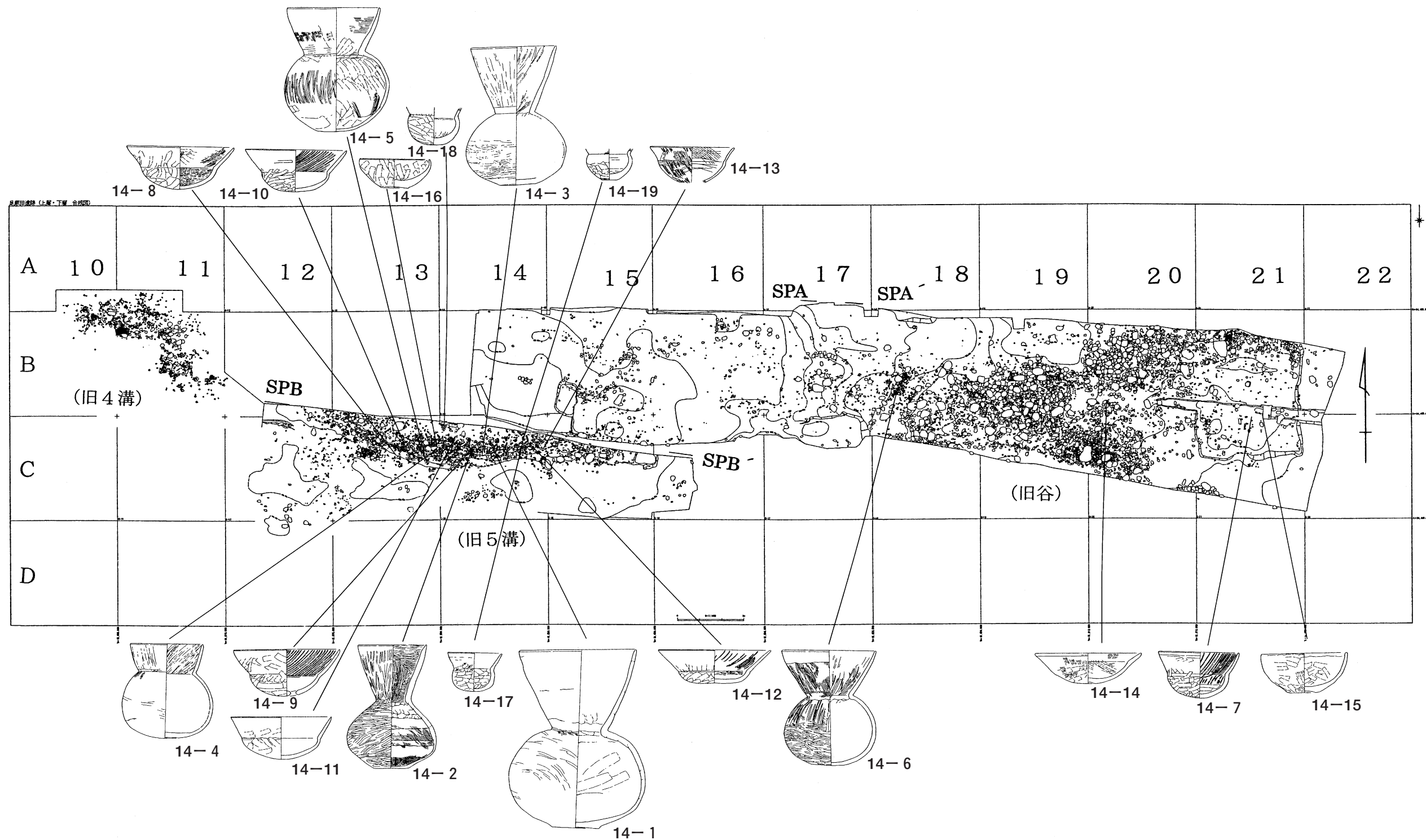
第19図 谷跡S字甕出土位置図



遺構 1/200 遺物 1/6

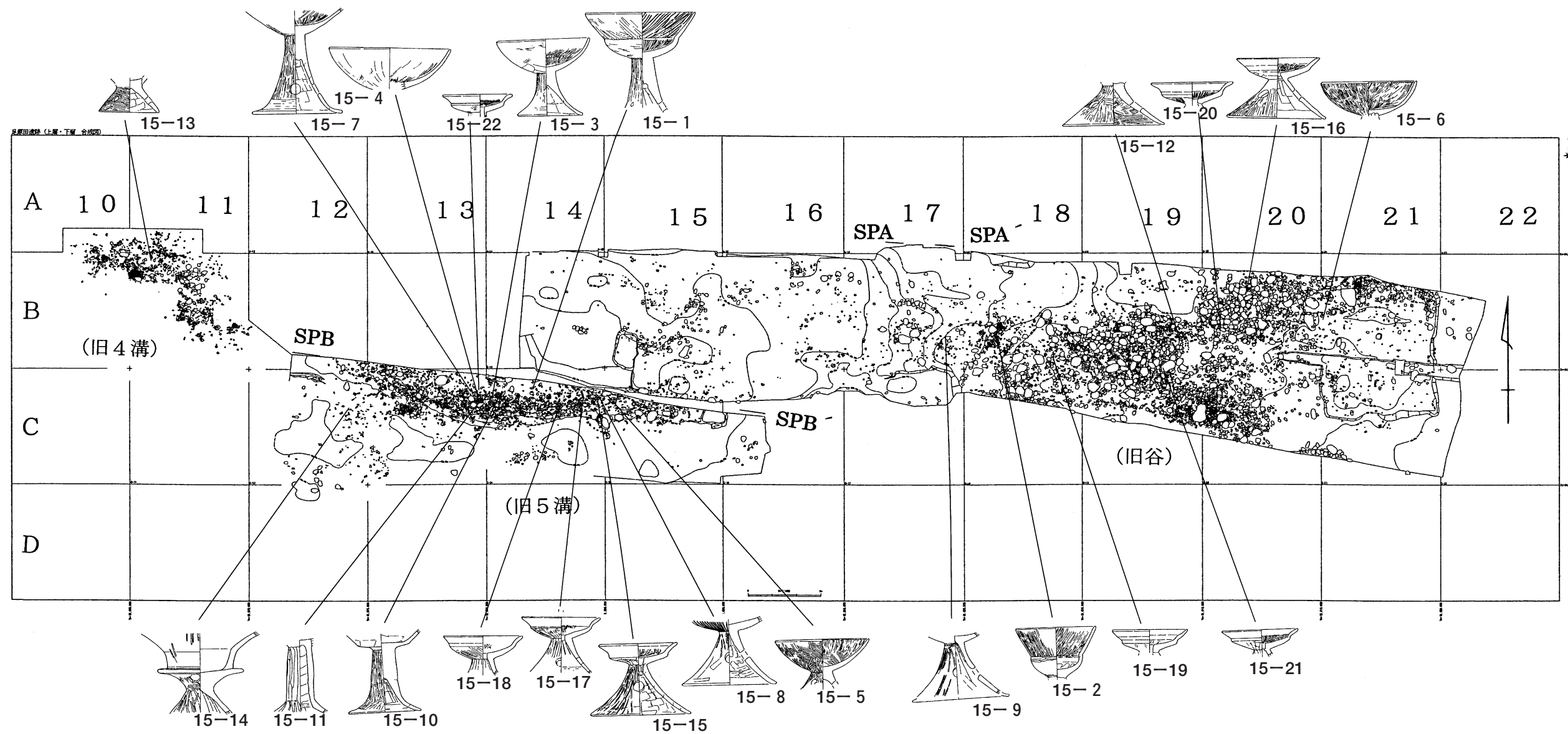
第20図 谷跡蓋・甑等出土位置図





遺構 1/200 遺物 1/6

第21図 谷跡 埴・坏等出土位置図



遺構 1/200 遺物 1/6

第22図 谷跡高坏・器台出土位置図

第1表 谷跡出土遺物観察一覽表

遺構	圖	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法		法量(cm)		残存率	注記番号	備考	
								体・外	体・内	底	口径				底径
谷	4	1	弥生土器	壺	弥生後	橙5YR6/6	白・金雲母混	ハラ・文様	ハケ				谷3078.3107.C15	羽状刺突	
谷	4	2	弥生土器	壺	弥生後	橙5YR6/6	白・金雲母混	ハラ・文様	ハケ				谷3078.3107.C15	羽状刺突	
谷	4	3	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・金雲母混	文様	ハケ				谷1742.C15	加飾壺	
谷	4	4	土師器	壺	古墳前	暗橙7.5YR5/4	白・金雲母混	ハラ・文様	ハラなどで				谷3079	加飾壺	
谷	4	5	弥生土器	壺	弥生後	暗褐7.5YR5/4	白色粒子混入	櫛描波状文	指頭・などで		(7.6)		谷3043	加飾壺	
谷	4	6	弥生土器	壺	弥生後	橙5YR6/8	白粒・金雲母混入	ハラ・文様	ハケ				D7-115.120	加飾壺	
谷	4	7	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/6	白・金雲母混	ハラ・文様	ハラなどで				谷2268	加飾壺	
谷	4	8	土師器	壺	古墳前	暗橙7.5YR5/4	白・金雲母混	などで・文様	ハケ				C14	加飾壺	
谷	4	9	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/6	白・金雲母混	ハラ・文様	ハラなどで				谷5632	加飾壺	
谷	4	10	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/8	白・金雲母混	ハラ・文様	ハラなどで				谷5632	加飾壺	
谷	4	11	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/8	白・金雲母混	ハラ・文様	ハラなどで				谷5632	加飾壺	
谷	4	12	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/8	白粒・子	ハラ・文様	ハラなどで				谷5680	加飾壺	
谷	4	13	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/6	白粒・金雲母混入	などで・文様	ハケ				谷4806		
谷	4	14	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/8	白粒・金雲母混入	磨き・文様	ハケ				谷6987		
谷	4	15	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/8	白粒・金雲母混入	磨き・文様	ハケ				谷6987	185・202同一	
谷	4	16	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/8	白粒・金雲母混入	磨き・文様	ハケ				谷6981	加飾壺	
谷	4	17	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/6	白粒・金雲母混入	磨き・文様	ハケ				谷4798.B19	横線・波状文	
谷	4	18	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・金雲母混	などで沈線	指などで				谷	貼付文	
谷	4	19	土師器	壺	古墳前	赤褐5YR4/8	白粒・金雲母混入	ハラ磨き	ハケ				谷5049		
谷	5	1	土師器	壺	古墳前	明黄褐10YR7/6	白・赤粒子・砂粒	ハケ	ハケ		(34.0)		谷9198~9200他	白色胎土	
谷	5	2	土師器	壺	古墳前	暗黄褐10YR7/4	白・赤粒子・砂粒	などで	などで		(24.0)		谷1970	白色胎土	
谷	5	3	土師器	壺	古墳前	明黄褐10YR6/6	白・赤粒子・砂粒	などで	などで				谷3962	白色胎土	
谷	5	4	土師器	壺	古墳前	明黄褐10YR6/6	白・赤粒子・砂粒	ハケ・などで	ハケ・などで		17.1		谷216.3180	白色胎土	
谷	5	5	土師器	壺	古墳前	暗橙7.5YR6/4	白粒・金雲母混入	ハケ・磨き	ハケ・磨き				谷4197	貼付3本	
谷	5	6	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/6	白・赤・金雲母混	ハケ	ハケ・磨き				谷5659		
谷	5	7	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/6	白・赤・金雲母混	ハケ	ハケ・磨き				谷5665		
谷	5	8	土師器	壺	古墳前	黄橙7.5YR7/8	白・赤・金雲母	ハラ磨き	ハラ		17.8		谷4181		
谷	5	9	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/6	白・赤・金雲母混	などで	指頭・などで		(14.3)		谷1401~1406他		
谷	5	10	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ハケ・ハラ	ハケ・ハラ		22.2		D7-106		
谷	5	11	土師器	壺	古墳前	赤褐2.5YR4/8	白・砂・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き		13.2		谷927		
谷	5	12	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き		18.0		谷5569		
谷	5	13	土師器	壺	古墳前	橙5Y6/8	白・赤色・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き		15.8		C14		
谷	6	1	土師器	壺	古墳前	橙5YR6/8	赤色・金雲母	ハケ・ハラ	ハケ		16.8	7.7	25.5	98%	外面・貼付着
谷	6	2	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/8	白・赤粒子	ハラ磨き	ハラ磨き		(26.0)		谷1284		
谷	6	3	土師器	壺	古墳前	赤褐5YR4/8	白・小石・金雲母	ハラ磨き	ハケ・ハラ		19.0		谷3696		
谷	6	4	土師器	壺	古墳前	橙5Y6/8	白・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き		14.6		谷4826	内外赤彩	
谷	6	5	土師器	壺	古墳前	橙5Y6/8	白・赤色・金雲母	ハケ・ハラ	ハケ・ハラ		20.3		谷5532		
谷	6	6	土師器	壺	古墳前	橙7.5YR6/6	白色・金雲母	ハケ・ハラ	ハラ		21.2		谷4320	外面・貼付着	



遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法			法量(cm)		残存率	注記番号	備考	
								体・外	体・内	底	口径	底径				器高
谷	6	7	土師器	壺	古墳前	橙5Y R 6/6	白色・金雲母	ハケ・ヘラ	ヘラ磨き		20.8		谷3588			
谷	6	8	土師器	壺	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ・ヘラ		17.2		谷1037			
谷	6	9	土師器	広口壺	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白・赤・砂・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ・ヘラ	ヘラ	24.4	9.0	30.0	谷3599他	外面煤付着	
谷	7	1	土師器	壺	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白色粒子混入	なで・磨き	ハケ		15.8		谷780~784他			
谷	7	2	土師器	壺	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ・ヘラ		12.8		谷2386他	外面煤付着		
谷	7	3	土師器	広口壺	古墳前	暗褐7.5Y R 5/4	白色・金雲母	ハケ	ハケ		13.2		谷9093	外面煤付着		
谷	7	4	土師器	広口壺	古墳前	明赤褐7.5Y R 5/6	白・金雲母	ハケ	ハケ		14.0		谷5735	外面煤付着		
谷	7	5	土師器	広口壺	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ハケ		14.2		谷6269			
谷	7	6	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ	ハケ		25.0		谷6046			
谷	7	7	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ	ハケ		12.8		谷2150	外面煤付着		
谷	7	8	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白・砂・金雲母	ハケ	指頭なで	なで	15.3	7.0	12.6	谷6499	外面煤付着	
谷	8	1	土師器	甕	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白・赤・金雲母	ハケ	ハケ		20.6		谷1395	外面煤付着		
谷	8	2	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白色・金雲母	ハケ	ハケ・ヘラ		17.7		谷2141	外面煤付着		
谷	8	3	土師器	甕	古墳前	赤褐2.5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ	ハケ		19.1		谷6368			
谷	8	4	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ	ハケ				谷8817			
谷	8	5	土師器	小形甕	古墳前	赤褐2.5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ	指頭なで		13.5		谷1882			
谷	8	6	土師器	小形甕	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白・砂・金雲母	ハケ	ハケ				谷1994			
谷	8	7	土師器	小形甕	古墳前	褐7.5Y R 4/4	白色・金雲母	ハケ	ハケ		13.3		谷433.434	外面煤付着		
谷	8	8	土師器	小形甕	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色・金雲母	ハケ	ハケ		13.8		谷300.325	外面煤付着		
谷	8	9	土師器	小形甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白・砂・金雲母	ハケ	ハケ				谷1736			
谷	8	10	土師器	小形甕	古墳前	明赤褐7.5Y R 5/6	金雲母	ハケ	ハケ・ヘラ		9.8		谷917.946	外面煤付着		
谷	8	11	土師器	小形甕	古墳前	橙5Y R 6/6	白色・金雲母	ハケ	ヘラ		10.6		谷6454	外面煤付着		
谷	8	12	土師器	小形土器	古墳前	明褐7.5Y R 5/6	白色・砂粒混	ハケ	ハケ	ヘラ	(9.5)	3.4	7.3	50%	谷2376	
谷	8	13	土師器	小形土器	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白粒多・金雲母	ハケ	ハケ	ヘラ	9.6	2.8	7.3	98%	谷	
谷	9	1	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ヘラ	ハケ・ヘラ	ヘラ	18.2	7.0	28.7	85%	谷906	
谷	9	2	土師器	甕	古墳前	暗赤褐5Y R 5/4	白・小石・金雲母	ヘラなで	ヘラなで		16.7	4.2	23.2	40%	谷9334	
谷	9	3	土師器	甕	古墳前	暗褐7.5Y R 5/4	白色・金雲母	ハケ・なで	指頭		15.8		谷8021			
谷	9	4	土師器	甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母						谷227			
谷	9	5	土師器	小形甕	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白・金雲母	ハケ・ヘラ	ヘラ	ヘラ	13.6	5.6	15.5	90%	谷1089	外面煤付着
谷	9	6	土師器	小形甕	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白・砂・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ	ヘラ	12.0	6.0	15.2	90%	谷1455	外面煤付着
谷	9	7	土師器	幅広口縁甕	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き		27.0			15%	谷3392	
谷	9	8	土師器	幅広口縁甕	古墳前	明赤褐5Y R 5/8	白色・金雲母	ハケ・なで	ヘラなで		25.0			30%	谷449	
谷	10	1	土師器	台付甕	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白色・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ・ヘラ		14.8	8.0	16.3	80%	谷2210	内面焦げ付着
谷	10	2	土師器	台付甕	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白色・金雲母	ハケ	ハケ		10.0	7.0	12.7	60%	谷698	外面煤付着
谷	10	3	土師器	台付甕	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白・小石・金雲母	ハケ	ヘラ			8.7		30%	谷1775	
谷	10	4	土師器	台付甕	古墳前	褐7.5Y R 4/4		ハケ・なで	ハケ・なで			8.5		谷9100他		
谷	10	5	土師器	台付甕	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白・金雲母多混	ハケ・なで	なで			7.3		谷2327		
谷	10	6	土師器	台付甕	古墳前	明赤褐5Y R 5/8	白色・金雲・砂	ヘラなで	ヘラなで	折り返し	13.0	8.0	27.3	谷1081,1088他		
谷	10	7	土師器	台付甕	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白粒多・金雲母	ヘラなで	なで			6.4		谷		

遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法		法量(cm)		残存率	注記番号	備考
								体・外	体・内	口径	底径			
谷	10	8	土師器	台付甕	古墳前	明赤褐5YR5/6	白色・砂粒混	ハラなどで	ハラなどで	ー	10.0		谷1546	
谷	10	9	土師器	台付甕	古墳前	明褐7.5YR5/6	白・赤粒子混	ハラ削り	ハラ				谷580	
谷	10	10	土師器	台付甕	古墳前	赤褐5YR4/8	白粒多・雲母少	ハラ	ハラなどで		11.5		谷436	
谷	10	11	土師器	台付甕	古墳前	橙5YR6/6	白・金雲母混	ハラ	ハラ	折り返し	8.5		谷1520	
谷	10	12	土師器	台付甕	古墳前	明褐7.5YR5/6	白・赤粒子混	ハラなどで	ハラなどで		8.6		谷529	
谷	10	13	土師器	台付甕	古墳前	暗褐10YR3/3	白・金雲母混	ハラ	ハラ	つぶれ	3.3		谷1722	
谷	10	14	土師器	台付甕	古墳前	明褐7.5YR5/6	白・赤粒子混	ハラなどで	ハラなどで	つぶれ	6.5		谷6808	
谷	11	1	土師器	S字口縁甕	古墳前	暗褐7.5YR5/4	白・砂・金雲母	ハラ	ハラ・などで	17.3		10%	谷5922	
谷	11	2	土師器	S字口縁甕	古墳前	暗褐7.5YR5/4	白・金雲母混	ハラ	指などで				谷8354他	
谷	11	3	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR7/6	金雲母多量	ハラ	ハラ・などで	15.0			谷8753他	
谷	11	4	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR7/4	白色・金雲母	ハラ	ハラ	16.3		20%	谷8762	
谷	11	5	土師器	S字口縁甕	古墳前	明褐7.5YR5/6	白色・金雲母	ハラ	ハラ	11.7		20%	谷8327	
谷	11	6	土師器	S字口縁甕	古墳前	褐10YR4/4	白粒金雲母混入	ハラ	ハラ	(16.4)			谷6886～6890他	
谷	11	7	土師器	S字口縁甕	古墳	橙5YR6/6	白色粒子混入	ハラ・煤付着	ハラ指などで	13.8	9.3	27.5	谷8070他	
谷	11	8	土師器	S字口縁甕	古墳前	明赤褐5YR5/6	金雲母・砂粒混	ハラ	指などで	16.0		60%	谷2080,2081他	
谷	11	9	土師器	S字口縁甕	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ハラ	指頭などで	16.0		15%	谷2366	
谷	11	10	土師器	S字口縁甕	古墳前	明赤褐5YR5/6	白色・金雲母	ハラ	指頭などで	18.3		15%	谷2220	
谷	11	11	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR6/8	白色・金雲母	ハラ	ハラ	14.4		10%	谷1473	
谷	12	1	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙5YR6/8	白色・金雲母	ハラ	指頭などで	15.2		15%	谷2223	
谷	12	2	土師器	S字口縁甕	古墳前	明赤褐5YR5/6	白色・金雲母	ハラ	指頭などで	10.6		10%	谷2181	
谷	12	3	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙5YR6/8	白色・金雲母	ハラ	指頭などで	17.0		10%	谷660	
谷	12	4	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR6/6	白・赤・金雲母	ハラ	指頭などで	13.5		15%	谷2151	
谷	12	5	土師器	S字口縁甕	古墳前	明赤褐5YR5/6	白色・金雲母	ハラ	ハラ	12.0		30%	谷3295	
谷	12	6	土師器	S字口縁甕	古墳前	明褐7.5YR5/6	白色・金雲母	ハラ	ハラ	12.4		15%	谷2246	
谷	12	7	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR6/8	白色・金雲母	ハラ	ハラ	11.2		5%	谷4493	
谷	12	8	土師器	S字口縁甕	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ハラ	ハラ	15.5		5%	谷5584	
谷	12	9	土師器	S字口縁甕	古墳前	褐7.5YR4/3	白・金雲母混	ハラ	ハラ・指などで		8.4		谷1903～1905他	
谷	12	10	土師器	S字口縁甕	古墳前	暗褐7.5YR6/3	白・金雲母混	ハラ	ハラ指などで		8.3		谷1966	
谷	12	11	土師器	S字口縁甕	古墳前	暗橙7.5YR6/4	白・金雲母混	ハラ	ハラ指などで		8.0		谷4587	
谷	12	12	土師器	S字口縁甕	古墳前	暗黄橙10YR6/4	白色粒子混入	ハラ	ハラ指などで		9.4		谷6173	
谷	12	13	土師器	S字口縁甕	古墳前	黄褐10YR5/6	白色・砂粒混	ハラ	ハラ指などで		10.2		谷2231	
谷	12	14	土師器	S字口縁甕	古墳前	明褐7.5YR5/6	白色・砂粒混	ハラ	ハラ指などで		9.6		谷4466	
谷	12	15	土師器	S字口縁甕	古墳前	暗黄橙10YR6/4	白色粒子混入	ハラ	ハラ指などで		11.0		谷578	
谷	12	16	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙5YR6/8	白・金雲母混	ハラ	ハラ		8.6		谷8546	
谷	12	17	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR6/6	白・金雲母混	ハラ	ハラ・ハラ				谷4600	
谷	12	18	土師器	S字口縁甕	古墳前	橙7.5YR6/6	白色粒子混入	ハラ	ハラ指などで		9.8		谷6510	
谷	13	1	土師器	蓋	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・赤・金雲母混	ハラ	ハラ	3.4		40%	谷397	
谷	13	2	土師器	蓋	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色粒子混入	ハラ	ハラ			30%	谷5509	
谷	13	3	土師器	蓋	古墳前	赤褐5YR4/6	白粒多・雲母少	ハラ	ハラ・などで		19.0		谷9301	

遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法			法量(cm)			残存率	注記番号	備考
								体・外	体・内	底	口径	底径	器高			
谷	13	4	土師器	甗	古墳前	褐7.5Y R 4/4(外)	白色粒子混入	ハケ	ハケ→などで	焼成前切取	12.5	4.6	17.7	85	谷2143	
谷	13	5	土師器	甗	古墳前	橙7.5YR6/8	白粒金雲母混入	ハケ	ハラなどで		(5.0)				谷3626,3639,4258	
谷	13	6	土師器	甗	古墳前	明褐7.5Y R 5/6	白色粒子混入	ハケ→などで	ハケ・ハラ	単孔	19.0	5.0	9.0	45	谷8836	
谷	13	7	土師器	甗	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色粒子混入	ハケ	ハケ・ハラ	単孔	14.6	4.0	7.8	75	谷2298	
谷	13	8	土師器	甗	古墳前	褐7.5Y R 4/6	白色・砂粒混	ハケ・などで	ハケ	単孔?	17.2	—	8.2	30	谷2148	
谷	13	9	土師器	甗	古墳前	明赤褐5YR5/6	白粒・砂粒混	ハケ	などで		5.0				E4-43	
谷	13	10	土師器	甗	古墳前	橙7.5YR6/8	白粒金雲母混入	ハケ	ハラなどで		5.0				谷1491	
谷	13	11	土師器	甗	古墳前	明赤褐5YR5/6	白粒金雲母混入	ハラ磨き	ハラなどで		3.6				谷9446,9517	
谷	13	12	土師器	甗	古墳前	明赤褐5YR5/6	白粒・砂粒混	ハケ	ハラなどで		5.0				谷6321,7008	
谷	13	13	土師器	甗	古墳前	暗橙7.5YR6/4	白粒金雲母混入	ハラなどで	ハラなどで		3.4				C6-164,C7-48	6孔
谷	13	14	土師器	手づくね	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色・砂粒混	手づくね	手づくね	手づくね	3.0	1.5	2.9	100%	谷1198	
谷	13	15	土師器	手づくね	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	金雲母・砂粒混	手づくね	手づくね	手づくね	4.2	2.5	3.1	80%	谷9526	
谷	13	16	土師器	小形土器	古墳前	明褐7.5Y R 5/6	白色粒子混入	などで・ハラ削	指などで	ハラなどで	6.1	3.6	4.8	100%	谷3897	
谷	13	17	土師器	小形鉢	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色・金雲母	り	ハラなどで	ハラなどで	(13.6)	5.5	5.8	50%	谷4560	
谷	13	18	土師器	小形鉢	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白色・金雲母	ハラなどで	ハラ	ハラなどで	(11.4)	5.5	4.1	85%	D7-65	
谷	13	19	土師器	碗	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白色・金雲母	ハケ	ハラ	ハラ	10.4	5.8	14.6	80%	谷8616	外面煤付着
谷	13	20	土師器	碗	古墳前	橙7.5Y R 6/8	白色多量	はけ・ハラ磨	ハラ	ハラ	12.2	6.4	11.2	50%	谷430	
谷	13	21	土師器	片口小型鉢	古墳前	暗赤褐5Y R 4/4	白色・金雲母	き	ハラ	ハラ	9.5			40%	谷9422	
谷	14	1	土師器	卍	古墳前	赤褐5Y R 4/8	白色・金雲母	ハケ・などで	ハラ磨き	ハラ	16.2	6.4	24.4	60%	谷2113	外面煤付着
谷	14	2	土師器	卍	古墳前	明赤褐5Y R 5/8	白・赤・金雲母	ハラ	ハラ磨き	ハラ	9.6	4.9	17.2	100%	谷2102	外面煤付着
谷	14	3	土師器	卍	古墳前	橙5Y R 6/8	赤色	ハラ磨き	ハラ磨き	ハラ	12.2	5.0	19.0	90%	谷2098	外面煤付着
谷	14	4	土師器	卍	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白色・赤色	ハラ磨き	ハラ磨き	ハラ	10.0	2.3	13.2	95%	谷1985	外面煤付着
谷	14	5	土師器	卍	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	赤色・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き	ハラ	10.4	5.8	14.6	100%	谷791	外面煤付着
谷	14	6	土師器	卍	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白・砂・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き	ハラ	13.0	4.6	16.1	75%	谷3569	外面煤付着
谷	14	7	土師器	環	古墳前	暗橙7.5Y R 7/3	金雲母微粒	ハケ・ハラ磨	ハラ	ハラなどで	11.3		6.5	100%	谷6930	
谷	14	8	土師器	環	古墳前	橙7.5Y R 7/6	白色・金雲母	き	ハラ磨き	ハラなどで	(14.3)		5.9	40%	谷752	
谷	14	9	土師器	環	古墳前	橙7.5Y R 7/6	白・金雲母混	ハケ・ハラ磨	ハラ磨き	ハラなどで	15.0		6.5	100%	谷1146	底部穿孔
谷	14	10	土師器	環	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白色粒子少混	き	ハラ磨き	ハラ磨き	15.0		6.0	95%	谷527	
谷	14	11	土師器	環	古墳前	橙5Y R 6/8	白色・金雲母	ハラ横などで	ハラ磨き	ハラ磨き	14.0		6.0	95%	谷1112	
谷	14	12	土師器	環	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白・赤・金雲母	ハラなどで	ハラ磨き	ハラなどで	(16.0)	(3.5)	(4.8)	60%	谷1449	
谷	14	13	土師器	環	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色・金雲母	ハラなどで	ハラ磨き		(11.8)			30%	谷2195	
谷	14	14	土師器	環	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色・金雲母	ハラなどで	ハラ磨き	ハラ磨き	(15.0)	2.0	4.3	40%	谷6157	
谷	14	15	土師器	環	古墳前	赤褐5Y R 4/6	白色・金雲母	ハラ磨き	ハラ磨き	ハラ磨き	12.2	4.0	5.5	60%	谷6932	
谷	14	16	土師器	環	古墳前	明褐7.5Y R 5/6	白色粒子多混	ハラなどで	ハラ磨き	ハラ磨き	9.8	4.0	4.1	90%	谷828	
谷	14	17	土師器	小型丸底土器	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白色粒子混入	ハケ・ハラ	ハラなどで	ハラなどで	(7.7)	2.3	5.5	30%	谷2139	
谷	14	18	土師器	小型丸底土器	古墳前	明褐7.5Y R 5/6	金雲母混入	ハケ・ハラ	ハラなどで	ハラなどで		2.3		70%	谷884	
谷	14	19	土師器	小型丸底土器	古墳前	明褐7.5Y R 5/6	白・赤色粒子	ハラなどで	ハラなどで	ハラなどで		2.0		70%	谷939	
谷	15	1	土師器	高環	古墳前	橙7.5Y R 6/6	白色・金雲母	ハラなどで	指などで		14.0			60%	谷1207	3孔か
谷	15	2	土師器	高環	古墳前	明赤褐5Y R 5/6	白・赤色・金雲母	ハラなどで	ハラなどで		10.2			50%	谷6163	



遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法		法量(cm)		残存率	注記番号	備考
								体・外	体・内	口径	底径			
谷	15	3	土師器	高坏	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	11.8	8.2	9.4	谷1137	
谷	15	4	土師器	高坏	古墳前	赤褐5YR4/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	15.2			谷871	
谷	15	5	土師器	高坏	古墳前	赤褐5YR4/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	12.0			谷1600	3孔
谷	15	6	土師器	高坏	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	12.2			谷6520	
谷	15	7	土師器	高坏	古墳前	橙7.5YR6/6	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ		11.4		谷746	3孔
谷	15	8	土師器	高坏	古墳前	明赤褐5YR5/6	白粒金雲母混入	ヘラ磨き	ヘラ横削り		12.0		谷2261他	
谷	15	9	土師器	高坏脚	古墳前	橙5YR6/6	白色粒子混入	ヘラ磨き	ヘラ削り		7.5		谷3405他	
谷	15	10	土師器	高坏脚	古墳中	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ削り		9.2		谷1012	
谷	15	11	土師器	高坏脚	古墳中	明赤褐5YR5/6	白・赤・金雲母混	ヘラ削り	輪積・などで				谷894他	
谷	15	12	土師器	高坏脚	古墳前	赤褐5YR4/8	白・黒・金雲母	ヘラ磨き	ヘケ		13.0		谷4429	3孔
谷	15	13	土師器	高坏脚	古墳前	赤褐5YR4/8	白・黒・金雲母	ヘラ磨き	ヘケ		7.4		谷9559	3孔
谷	15	14	土師器	特殊器台	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・金雲母混	ヘケ・などで	などで				谷158.E4-11.31	
谷	15	15	土師器	器台	古墳前	橙7.5YR6/6	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ削り	10.0	12.6	9.0	谷1580	2孔
谷	15	16	土師器	器台	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ削り	10.6	12.4	7.7	谷5554	3孔
谷	15	17	土師器	器台	古墳前	明赤褐5YR5/8	赤色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	10.0			谷2221	孔数不明
谷	15	18	土師器	器台	古墳前	橙5Y6/8	白・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	10.0			谷1364	
谷	15	19	土師器	器台	古墳前	明赤褐5YR5/8	白・赤・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	9.6			谷3653	
谷	15	20	土師器	器台	古墳前	橙5Y6/8	白・赤色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	10.3			谷5617	
谷	15	21	土師器	器台	古墳前	橙5Y6/8	白・赤色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	9.7			谷6419	
谷	15	22	土師器	器台	古墳前	橙7.5YR6/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ヘラ磨き	8.8			谷676	

### ① 壺 (第4～7図)

第4図に示した拓本は、すべて加飾壺である。1, 2は壺の肩部に橢圓状工具で3段連続刺突された羽状文が巡る。同図3, 4は同じく肩部に平行条線、橢圓刺突文、橢圓波状文、刺突文が段階的に施される。5は弥生時代の壺形土器の状態を色濃く残しているものであるが、ここでは古墳時代のものとした。7, 8は浅い橢圓波状文、9～11は波状文と連続刺突文が組み合わさったもの、12～17は平行沈線と波状文が組み合わさったもので、12と13は同一個体、14～17も同一個体であろう。19は条線地に刺突が施されるものである。いずれも古墳時代前期に属しているが、東海地方を出自とする加飾壺である。

第5図の1～5は白色で砂粒を多量に含む特別な土器であり、駿河東部の搬入品と思われ大廓式土器に比定される。口縁部に3本程度の単位で粘土紐貼付が施されるものと、粘土紐の代わりに沈線が施されるものがある。同図6, 7, 8は外反する口縁に粘土紐穂貼付がみられもの、11～13は口縁部が折り返され肥厚化されたもので、ヘラ磨きが丁寧に行われている。

第6図1～8は有段口縁壺で、1と同様にその他の土器も球胴を持つと思われる。4は内外面が赤彩されている。古墳時代前期後半の土器である。第6図9～第7図5までは単純口縁、あるいは先端に折返し口縁を持つ壺で、次の球胴甕と類似しているものもあり、外面がヘラ磨きとハケ整形がみられる。

### ② 甕

第7図6～第9図6は甕で、口径20cmを超えるもの、20cm前後のもの、15cm以下のものがある。また、刷毛整形が多くを占めるが、第9図1～6のようにヘラ整形もみられる。同図7, 8は山陰系大型甕の口縁部と考えられ、「拡張口縁をもつS字甕」であるかもしれない。これは、頸部に刷毛目が残ることから、坂井南遺跡28号住居出土甕と類似した、体部がハケ整形となるであろう。台が付くかは不明。

第10図は台付き甕で、単純口縁の甕に台がついたものである。台は端部の折り返しが無いものを集めたが、6は単純口縁の甕であるが台の下端は折り返されていることから、きわめて特殊な成形技法の位置にある。第11図・12図はS字口縁台付甕である。11図1～5はS字甕で、この器種の分類では赤塚分類C類に相当する。肩部の横刷毛が相当簡略化され、口縁部もS字の屈曲がのびているものがある。6以下は赤塚分類D類に相当する。4世紀後半から5世紀初頭に位置づけられる。

### ③ 蓋・甑・鉢など

第13図は蓋(1～3)、甑(4～13)、鉢(17, 18)、碗(19, 20)、片口碗(21)である。4は甕の底部をヘラで円形に切り取ったもので、同様の手法は5にも見られる。4世紀代の甑としては珍しい孔を持つ。13は多孔の甑底部で1点しか無い。21は片口の小型碗としたが、破片であるので確定はできない。

第14図1～6は埴である。口縁部が2分の1の長さを持つものと、3分の1のものがある。いずれもヘラ磨きされている。同図7～14は坏で、外傾する口縁と半球型の底部が特徴である。口縁内面に放射状のヘラ磨きが施され、外面底部なヘラなどでされ、小さな底部がつく。同図15, 16は半球状の坏である。17～19は小型丸底土器で、前期末に置かれる。

### ④ 高坏・器台

第15図は高坏(1～13)と器台(14～22)である。高坏には半球状の坏と有段に開く坏があり、10は坏底部が僅かに水平に開き、くの字に折れて外反する。10, 11の脚部は円筒状の脚で、5世紀出現の特徴を持つ。12, 13は低い脚部で透かし孔があるが、坏部の形状は不明である。14は装飾器台の模倣品で、北陸地方の弥生時代末～古墳時代初頭の月影式土器を起源とする。15～22は器台で坏から脚に垂直に単孔が貫通する。また、脚に2～3の円孔が空けられる。

#### 3) 出土状態について(第16～22図)

各器種別に出土位置を図示した。実際には凡そ1個体が分散して出土していると思われるが、主要な破片が出土している位置を選定して、各器種毎に出土位置を示してある。なお、ここでは図示できなかった破片も膨大に存在する事を断っておきたい。

また、出土状態の概略や観察についてはすでに述べたとおりであるが、若干の補足を述べておきたい。

壺は全体的に分布しており、加飾壺や駿河系とされる白色胎土の大厩系土器も分散して出土している。甕類は刷毛目整形の甕や台付甕が旧5溝に多い。S字口縁台付甕は全体にわたって出土するが、肩部に横刷毛が施されるC類は旧4溝に多く出土している。埴・坏類は旧5溝部分に集中しており、高坏・器台も旧5溝に多い傾向がある。埴・高坏・器台は祭祀に伴う廃棄の可能性もある。

## 2 平安時代住居跡と遺物

### 1) 1号住居跡 (第23～26図) (p47～p50)

本住居はC11・12グリッドに位置しており、平面形は住居中央で南北約5m、東西約5mのほぼ正方形を呈しているが、東辺は4.35m、西辺は3.8m、南辺は4.6m、北辺は4.8mの長さがあり、東辺を除いては緩やかな半円型に膨らんだ形状をしている。竪穴住居の壁の立上りは東辺中央で約10cm、西辺中央で6cm、南辺で13.5cm、北辺で7cmと浅い掘り込みである。しかし、住居の東側3分の1を除いて西側は溝や穴状の攪乱が激しく、本来の遺構が残存するところは一部にすぎない。良好に残っている住居の東辺はほぼ南北方向に向いている。柱穴や貯蔵穴は検出されていない。

住居の覆土は暗灰色砂質土であるが、床面上や一部の壁際には炭や焼土が散乱していることから、火災住居の可能性が高いと考える。そのことは、攪乱を受けていない竈周辺や住居東側で、完形の小形皿類が多量に出土していることから、失火による火事が原因ではなかろうか。

竈は南東のコーナーに設置され、石組み粘土覆いの構造をしている。南東の隅を利用して設置された竈は、正面では幅1.6mの幅がある。この中央36cmほどが焚口で、この焚口から南側に長さ40cmほどの石を寝かせて竈前面の土留めを行い、北側には2石を立てて竈前面の土留めをしている。

竈内部は、南側に4石を立て並べて袖とし、北側は3石を並べて袖としている。両袖は奥に行くに従って狭まり幅が20cmほどになる。この先は住居の隅を利用した煙道となる。竈の入口近くに羽釜の破片が出土していることから、竈に羽釜を設置したまま住居が廃棄されたものと思われ、ここが釜や甕を架けた火口の位置となるのであろう。

出土遺物は竈内部とその周辺から東壁に沿って土師器の柱状高台付小皿4点、小皿12点、坏2点、柱状高台付1点、灰釉陶器坏1点、土師器羽釜5点、甕2点、竈の周辺から青磁碗破片等が完形又は実測可能な破片で出土している。土師器はいずれもロクロの回転整形によるもので、底部は回転糸切の痕が明瞭に残る。灰釉陶器坏は灰色の胎土に岩石粒子が混じり、十分な水簸作業を経たものではない。釉薬はほとんどかかっておらず、灰釉陶器では東美濃地域の最新段階の製品と考えられる。土師器の羽釜は口径が20cm代のものと30cmを超える物があり、整形技法もヘラ磨きを行なうもとの、従来からのハケ整形の2種が見られる。土師器甕は口径約40cmの大型甕で、口唇部は緩やかに外反し、胴部はやや膨らみながら直線的に底部に達する。内外面ともにハケ目整形である。平安時代後期のこのような甕は、類例の少ないもので、古い時代の技法が残存した物か、あるいはカマドの補強材として転用されたものか、検討を要する。なお、6号住居の甕とは共通するものがあり、峡東地域のローカル色の一つかもしれない。

竈付近出土の青磁碗破片が1点ある。青緑色の釉薬がかけられ、体部外面には剣先状蓮弁文がうかがえる。龍泉窯の製品の可能性がある。

また、実測可能な鉄製品では紡錘車1点、鎌1点がある。紡錘車の軸は上下部が欠損しその全長は不明である。また車部分は3分の1程度が欠損しているが、この断面から偏平な板状の円盤が取り付けられていた様子がうかがえる。鎌は幅広の刃部を持ち、やや内湾するが、中央部が少し幅を減じているのは、使用のためであろうか。裏面の錆にはスジ状の植物繊維が付着しており、イネ藁等の上で腐食した可能性もある。

### 2) 2号住居跡 (第27図) (p51)

本住居はG31・32グリッドに位置しており、平面形は住居中央で南北約3.4m、東西約3.6mのほぼ正方形を

呈しているが、東辺は3.3m、西辺は2.9m、南辺は3.4m、北辺は3.5mの長さがある。方形の住居はグリッドの真北線より東へ約16度ほど傾いている。竪穴住居の壁の立上りは東辺中央で約11cm、西辺中央で6cm、南辺で6cm、北辺で9.1cmと浅い掘り込み状態である。柱穴や貯蔵穴は検出されていない。なお、住居の覆土は暗灰色砂質土で、炭や焼土を含まない。

竈は南東のコーナーに設置され、石組み粘土覆いの構造をしていたと思われる。南東の隅を利用して設置された竈は、正面では幅1.6mの幅がある。しかし、袖石や土留め石が原形を保っておらず、その構造や規模を把握することは困難である。なお、羽釜の大破片が竈中央部から出土しているの、この上が火口であったと思われる。羽釜を設置したまま竈を故意に破壊した可能性もあるのではなかろうか。

住居内部からの遺物は、竈周辺に集中しており、坏1点とカマド内から羽釜2点が出土しているが、いずれも完形ではない。土師器坏は内外面ロクロ整形の回転糸切底で、羽釜は内外面にハケ目が残るものである。

### 3) 3号住居跡 (第28・29図) (p 52. p 53)

本住居はJ 39、40グリッドに位置しており、4号住居に北側を切り取られている。このため正確な平面形は不明であるが、南東・南西コーナーの形状から方形の住居であったことがわかる。住居中央の南北方向で約4.3m、残存している東辺は約3.8m、西辺は2.7m、南辺は4mの長さがあり、各辺ともに直線的な形状をしている。竪穴住居の壁の立上りは東辺中央で約8.4cm、西辺中央で7.4cm、南辺で9.8cmと浅い掘り込みである。しかし、住居の北側4分の1は4号住居により切り取られている。住居の東辺は東へ約14度傾斜している。柱穴や貯蔵穴は検出されていない。

住居覆土は暗褐色砂質土に炭が多く入り、黄褐色砂質土がブロック状に混じる。この黄褐色砂質土のブロックが、焼失上屋の屋根材の可能性もあるが、炭化木材との関係では証明できない。

住居の床面上や一部の壁際には建物の木材の炭や焼土が散乱していることや、炭化木材が断片ではあるが放射状に分布する傾向も覗えることなどから、本住居は火災住居と考えられる。住居の竈西側にある石のブロックは、住居床面に投げ込まれた状態であり、住居が焼失後に石が投棄されたと考えられる。なお、小形の土器の残存状態や竈の破損状況から、この住居の火災原因を意識的な放火かあるいは失火なのかは、これだけの材料で決めることは困難である。

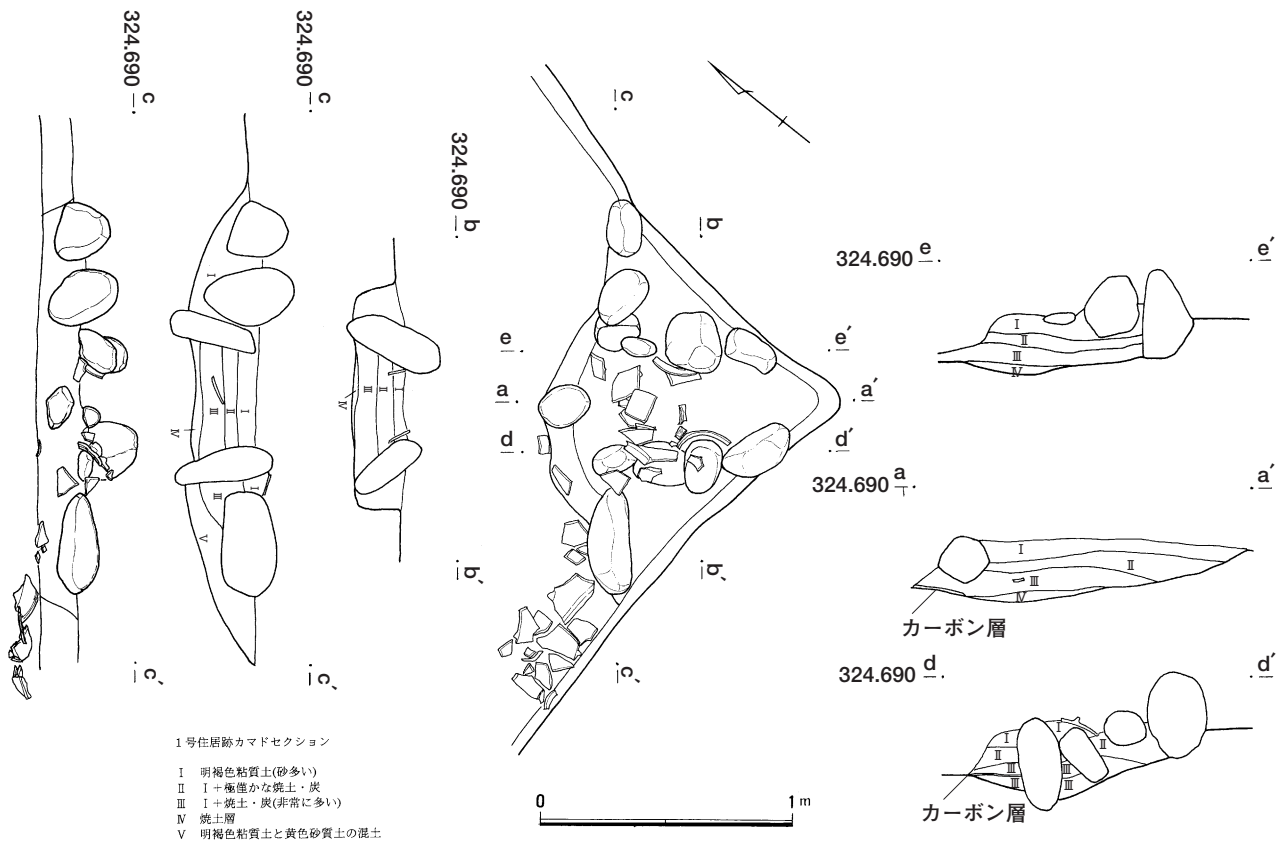
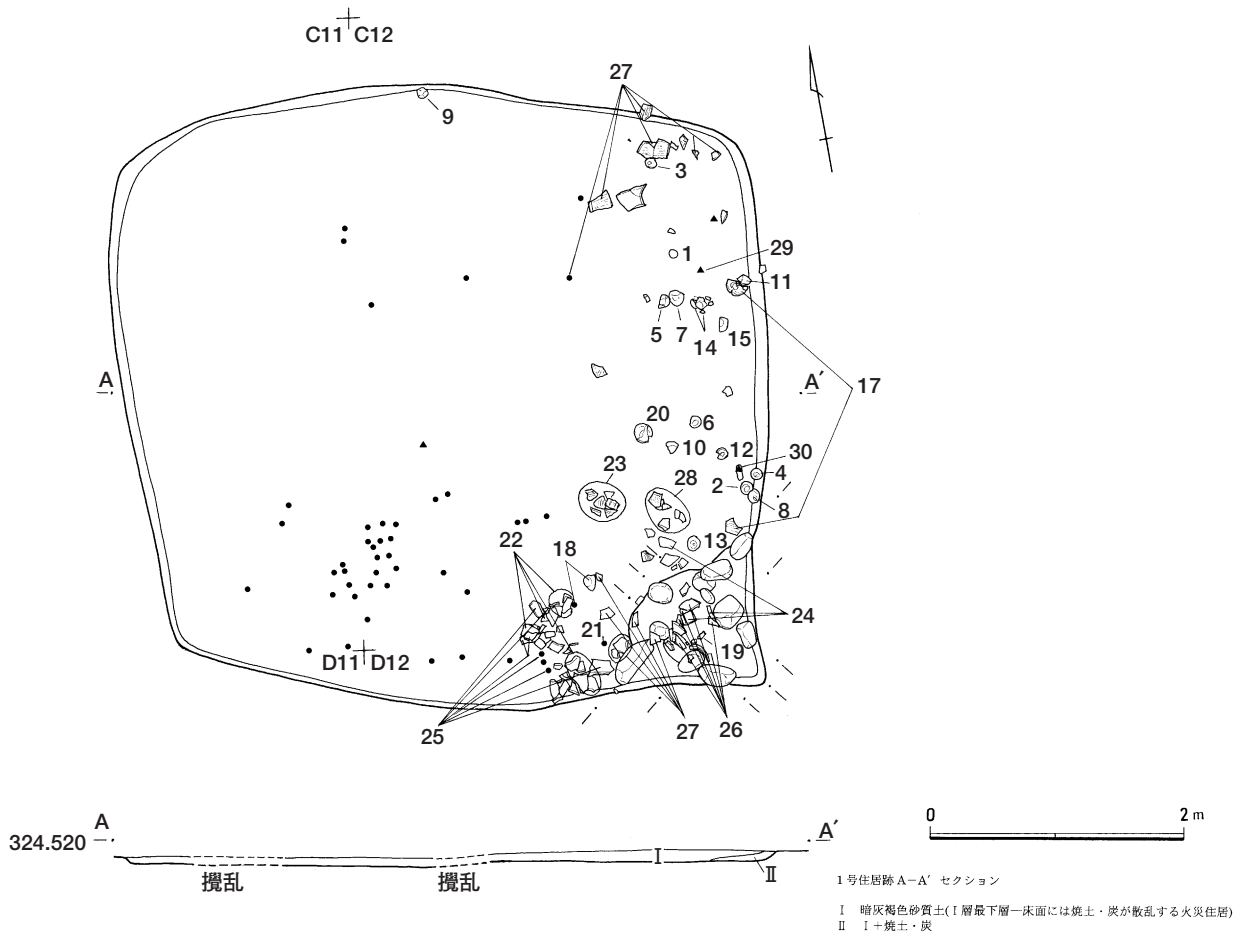
竈は南東のコーナーに設置され、石組み粘土覆いの構造をしている。南東の隅を利用して設置された竈は、正面では幅1.1mの幅がある。この中央30cmほどが焚口で、竈内部は南側に3石を立て並べて袖とし、北側は2石を並べて袖としている。両袖は奥に従って狭まり幅が18cmほどになる。この先は住居の隅に細い石を壁に傾けこれから煙道となる。焚口よりやや内側の火口直下では焼土・炭が多くレンズ状の堆積をしている。

出土遺物には土師器小皿4点、坏2点がある。土師器小皿は底部が厚くロクロ成形により口縁部を作りだす。坏も同様の技法で製作され、3-1は緩やかに内湾する体部を持ち、底部は回転糸切である。4号住居に切られているが、両住居の遺物の年代差は感じられない。

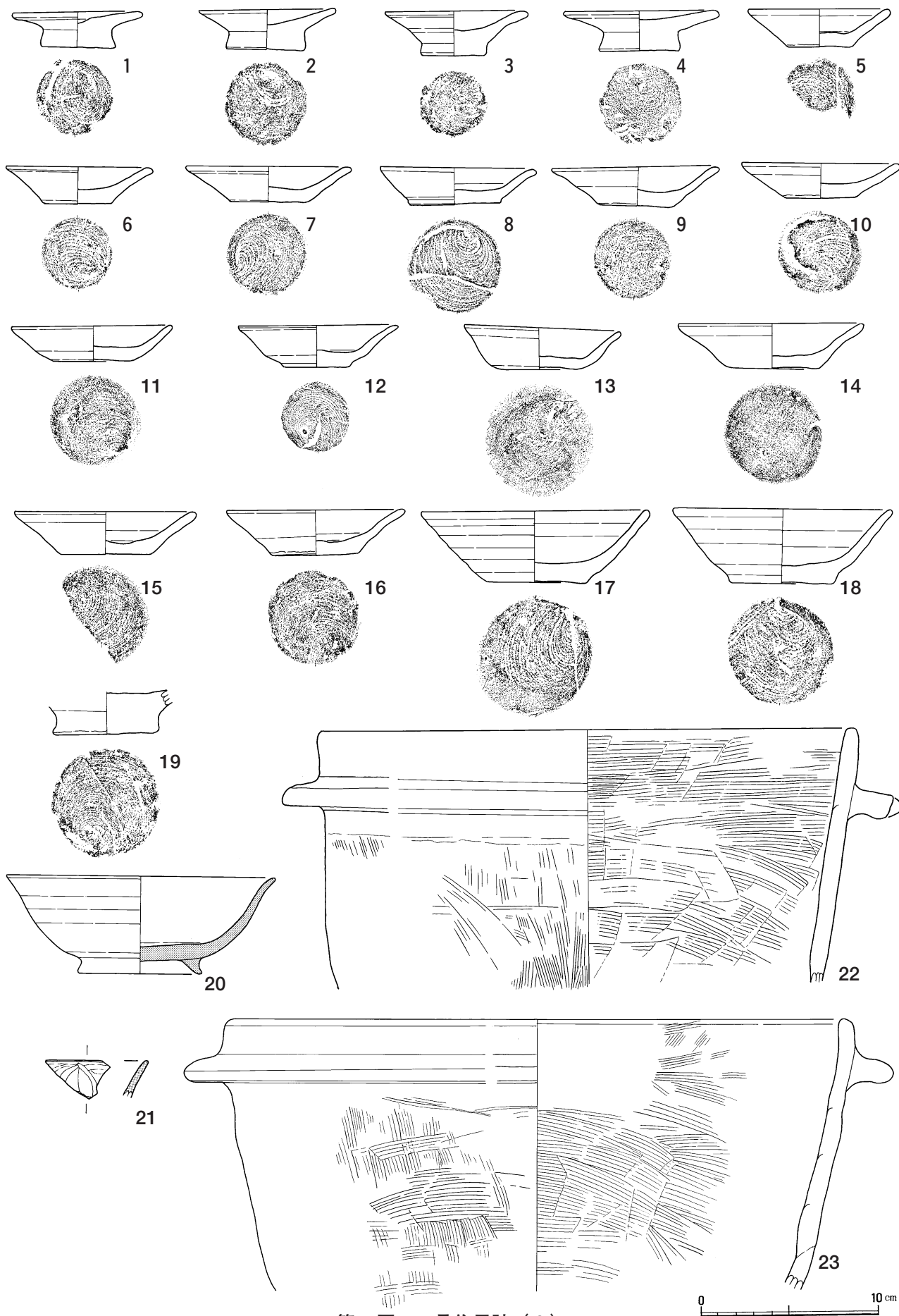
### 4) 4号住居跡 (第28・29図) (p 52. p 53)

3号住居を切って造られた本住居はI・J 39グリッドに位置しており、平面形は住居中央で南北約3.3m、東西約3.4mのほぼ正方形を呈しているが、竈と反対側の東辺は3.0m、西辺は3.1m、南辺は2.8m、北辺は2.7mの長さがあり、竈のある西辺を除いては直線的な形状をしている。東辺はグリッドの真北方向から東に53度傾斜している。竪穴住居の壁の立上りは東辺中央で約4.9cm、西辺北側で8.1cm、南辺で5.6cm、北辺で1.8cmと浅い掘り込み状態である。柱穴や貯蔵穴は検出されていない。3号住居と床面はほぼ同一レベルである。覆土は暗褐色砂質土で、炭化物を含む。

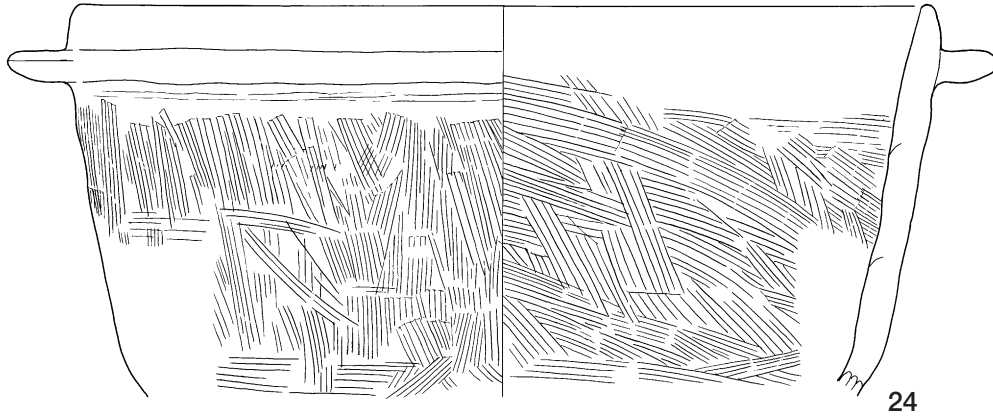




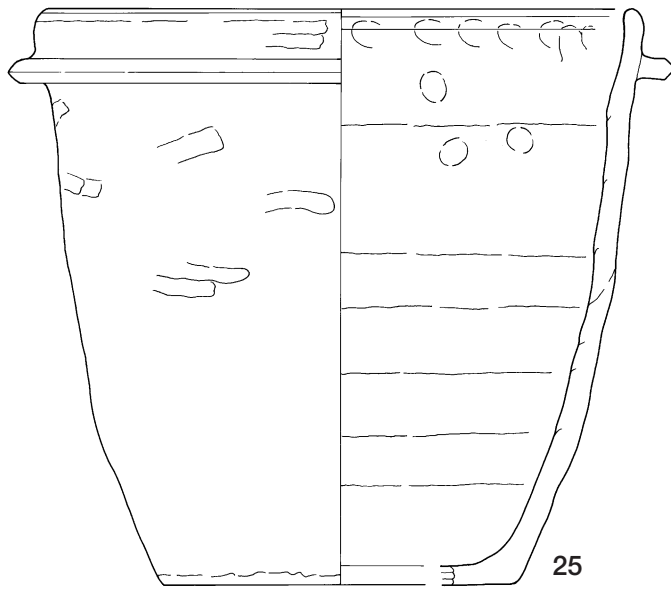
第23図 1号住居跡(1)



第24图 1号住居跡(2)



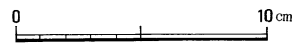
24



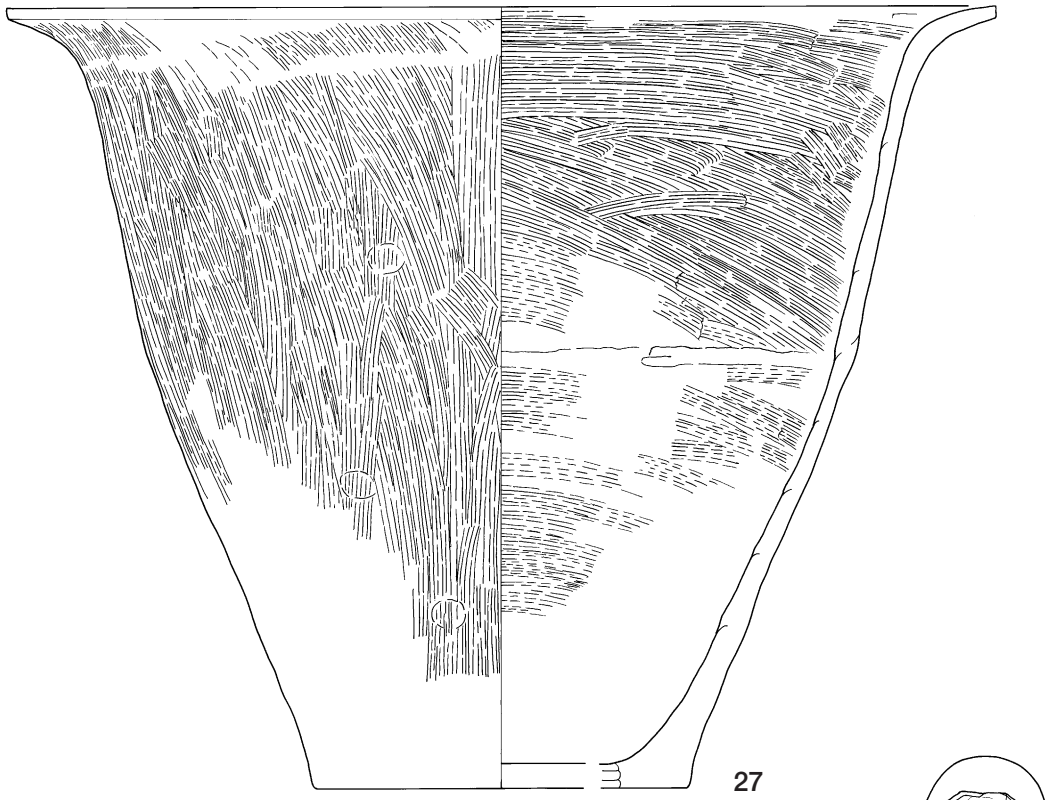
25



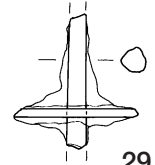
26



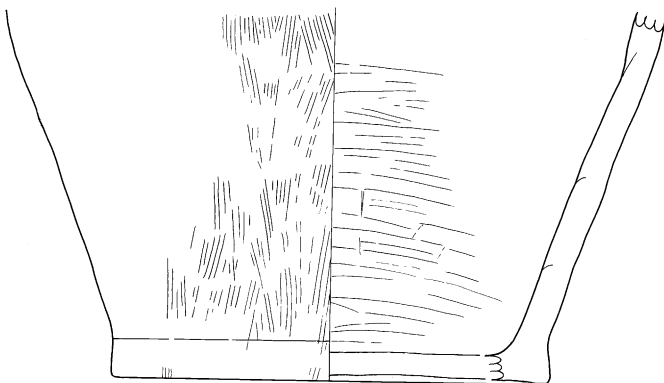
第25图 1号住居跡 (3)



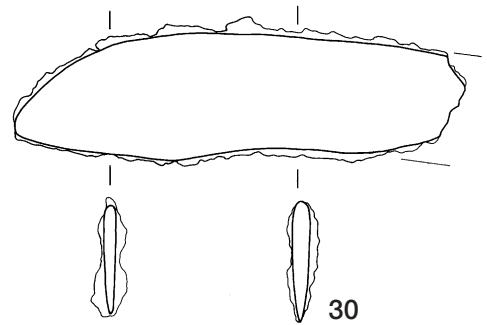
27



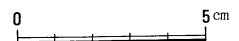
29



28



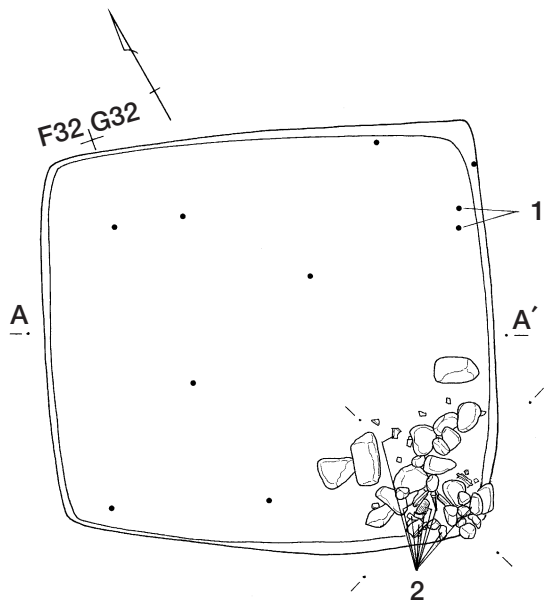
30



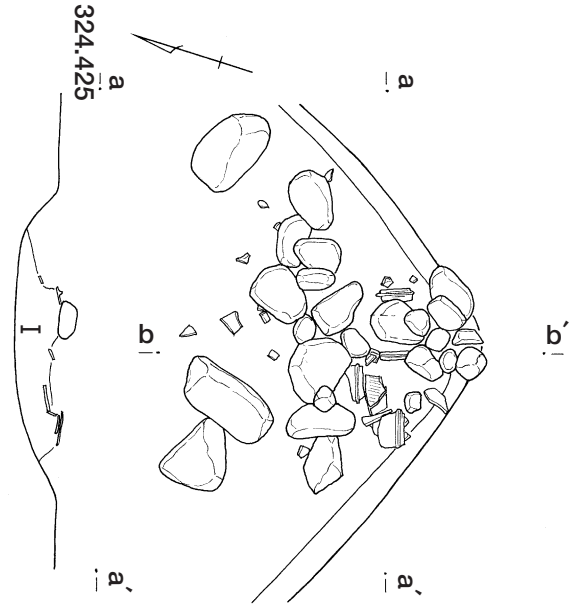
(29、30スケール)

第26図 1号住居跡(4)

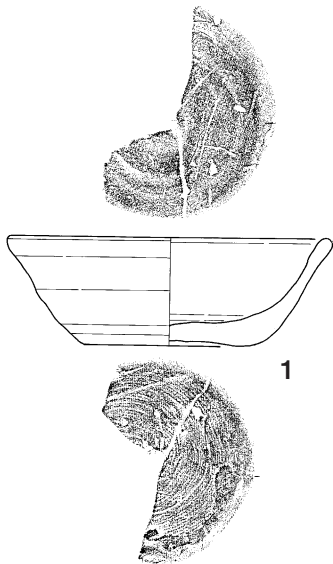




2号住居跡セクション A-A'  
I 暗灰色砂質土



2号住居跡カマドセクション  
I 褐色砂質土+焼土・炭



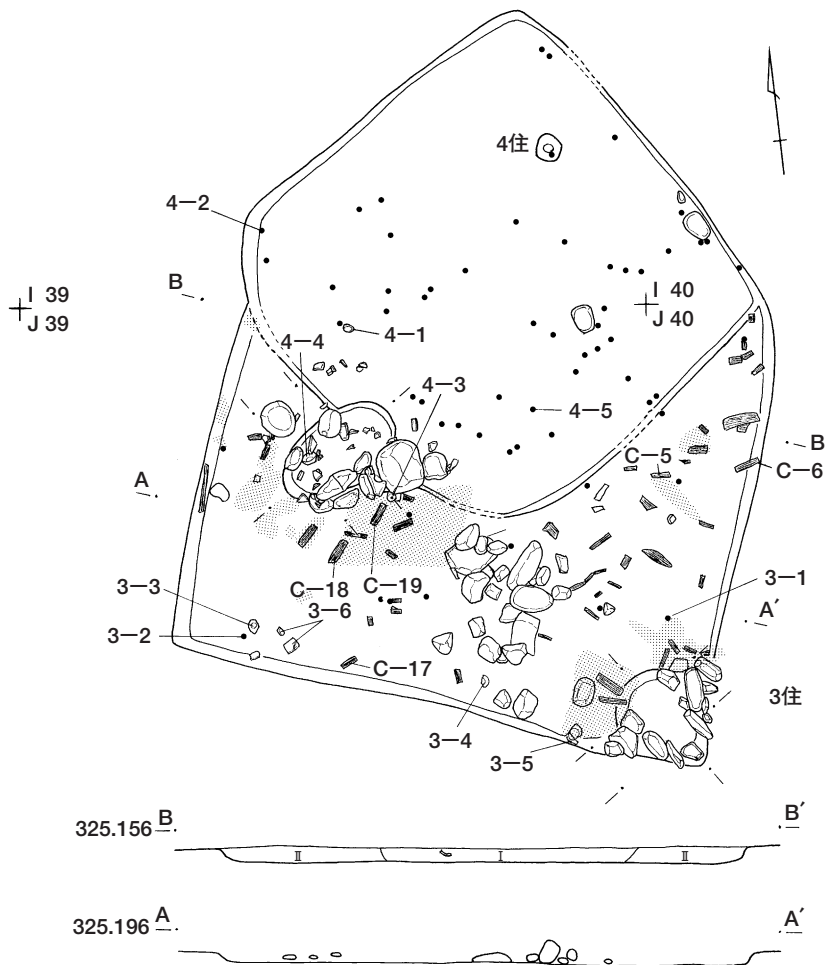
1



2

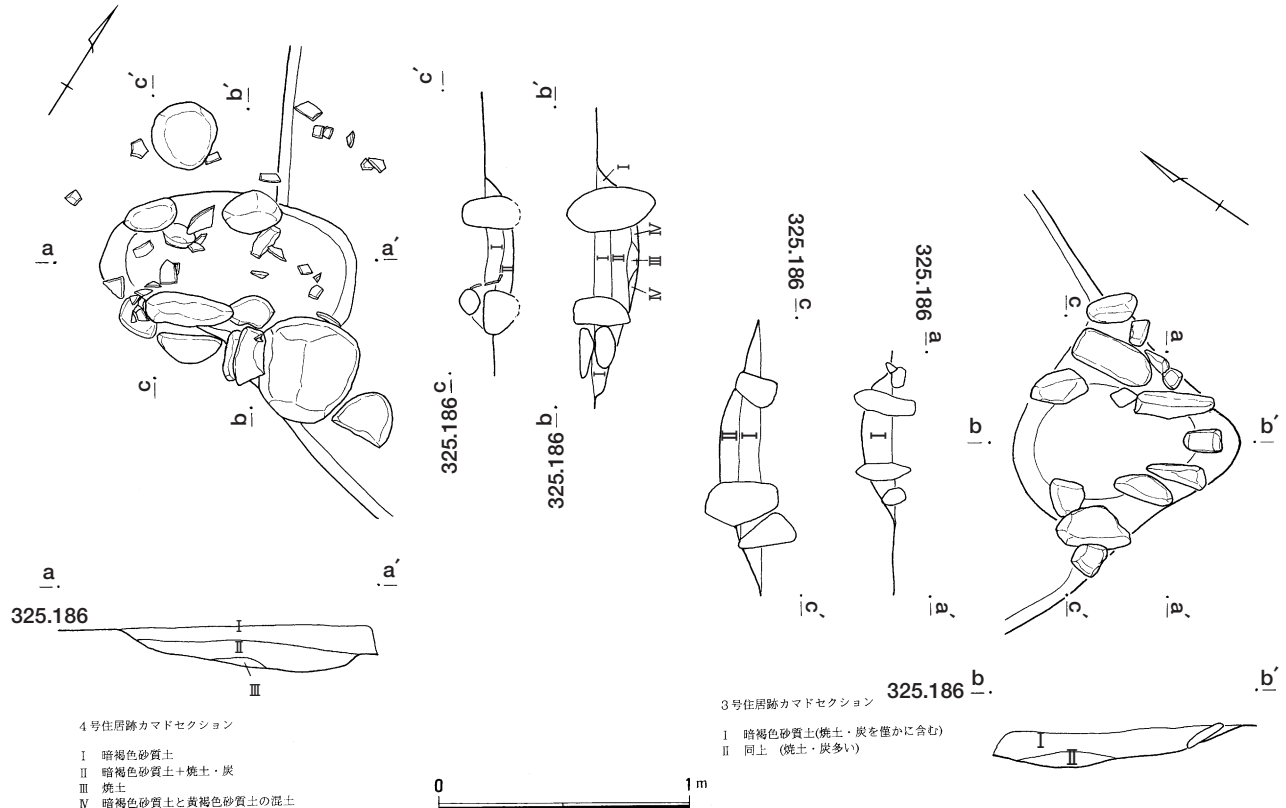


第27図 2号住居跡



0 2 m

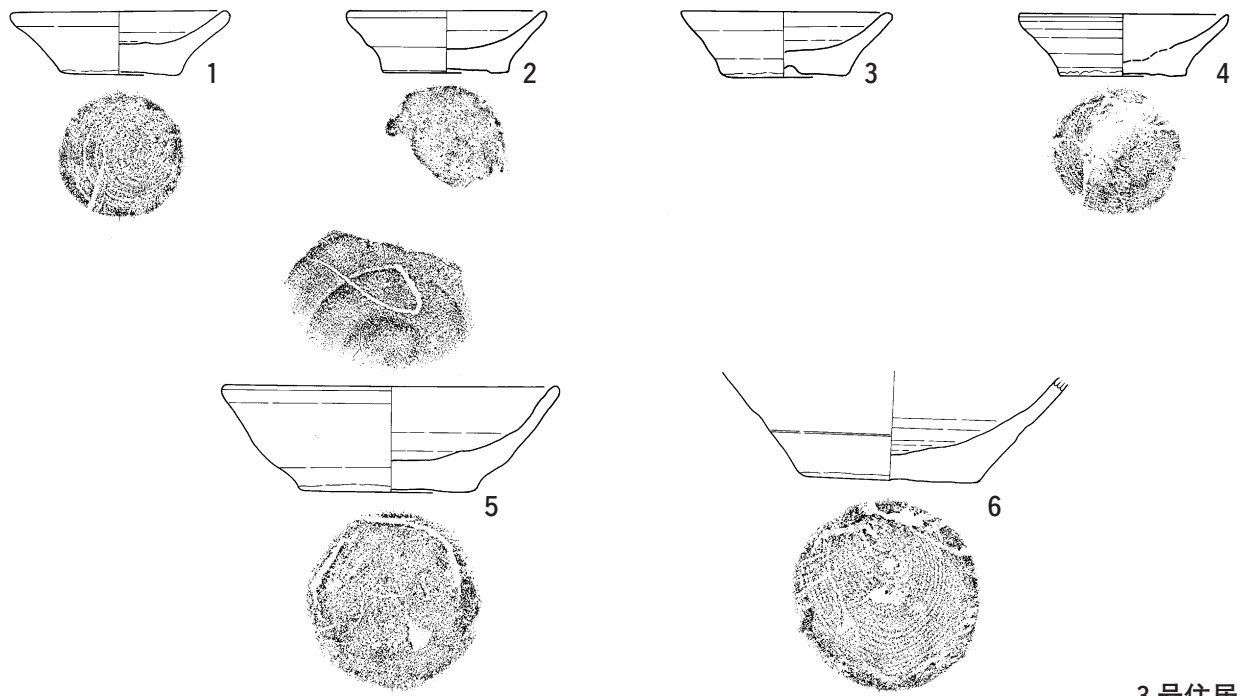
3. 4号住居跡セクションB-B'  
 I 暗褐色砂質土+炭  
 II I+黄褐色砂質土のブロック混入



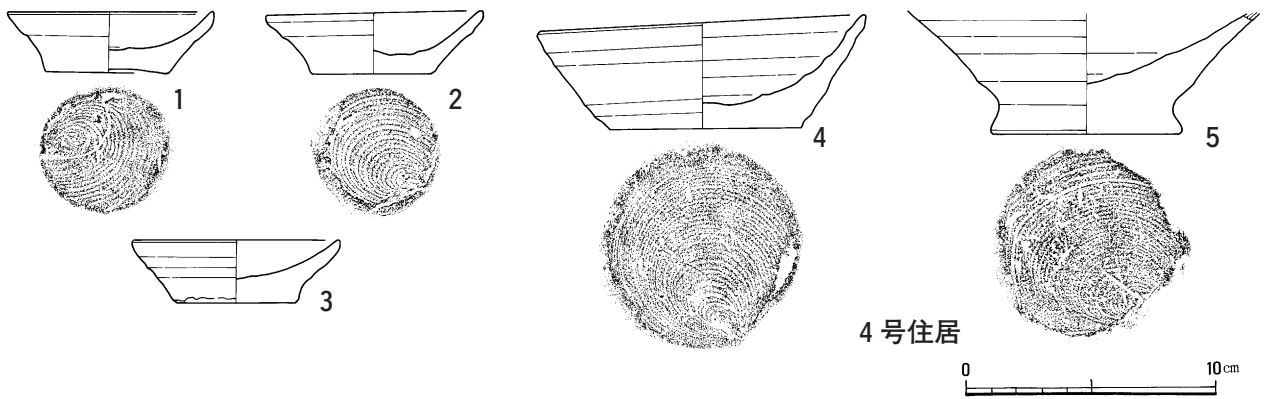
4号住居跡カマドセクション  
 I 暗褐色砂質土  
 II 暗褐色砂質土+焼土・炭  
 III 焼土  
 IV 暗褐色砂質土と黄褐色砂質土の混土

3号住居跡カマドセクション  
 I 暗褐色砂質土(焼土・炭を僅かに含む)  
 II 同上(焼土・炭多い)

第28図 3・4号住居跡(1)

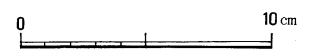
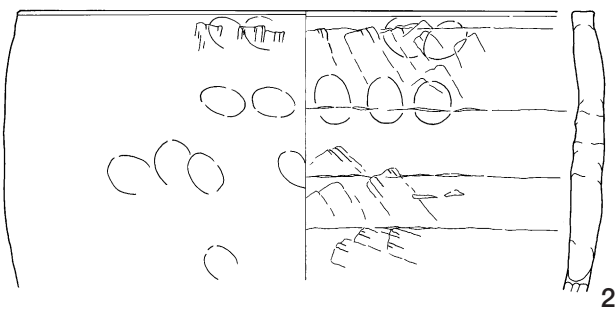
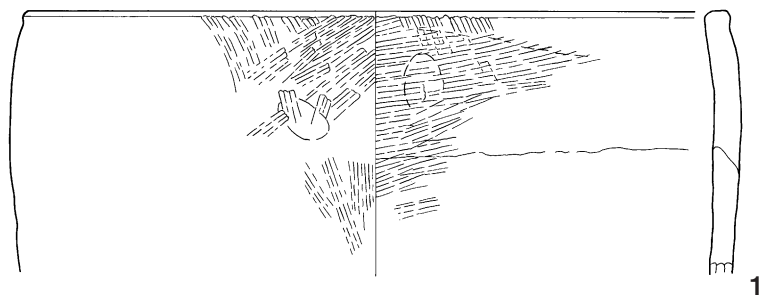
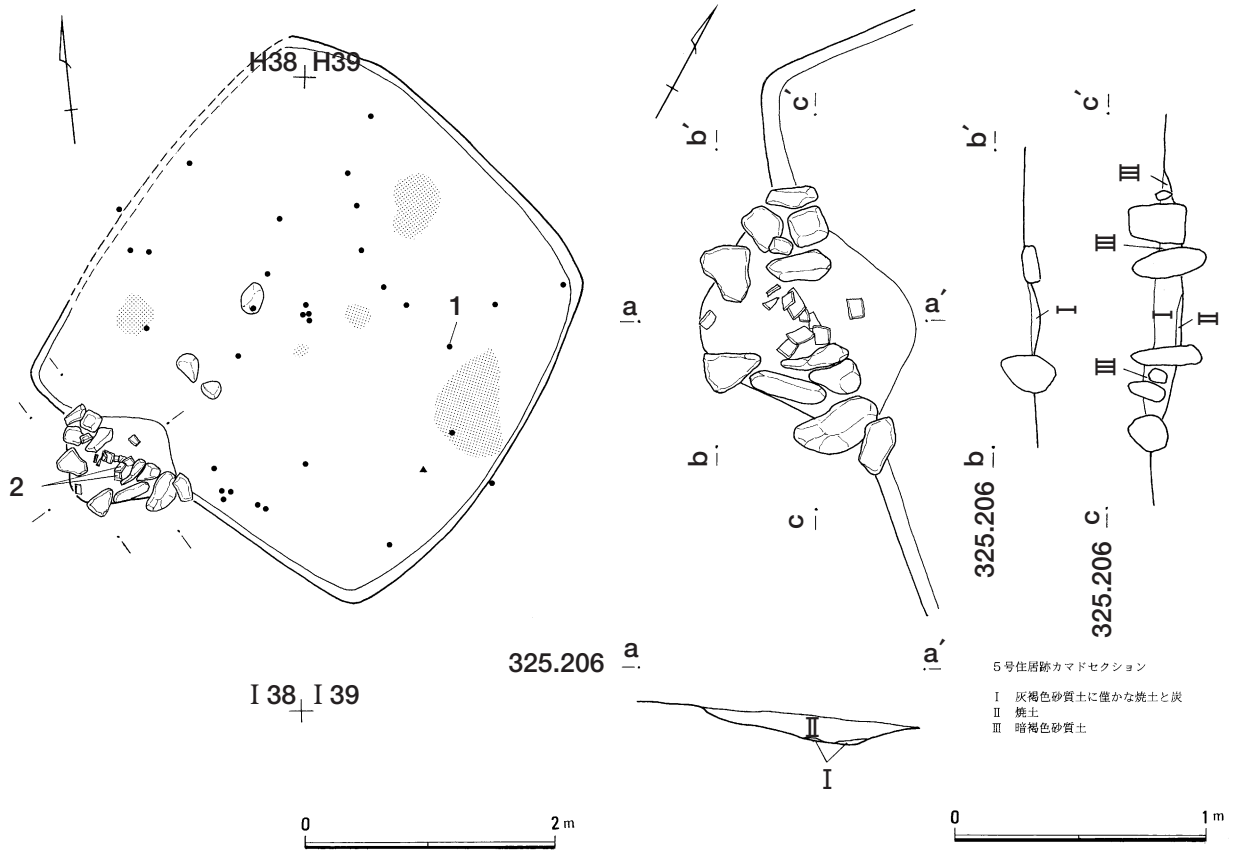


3号住居



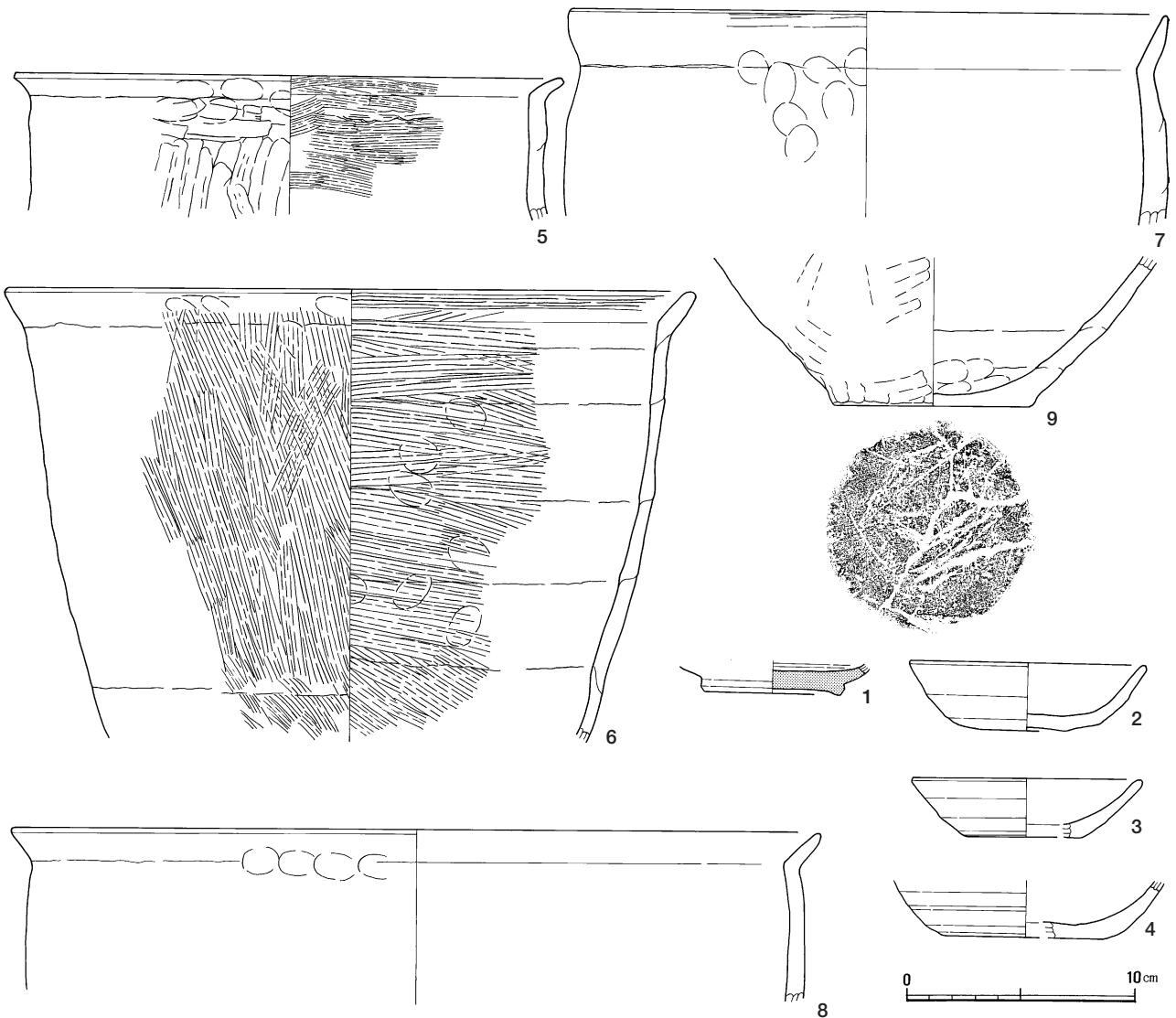
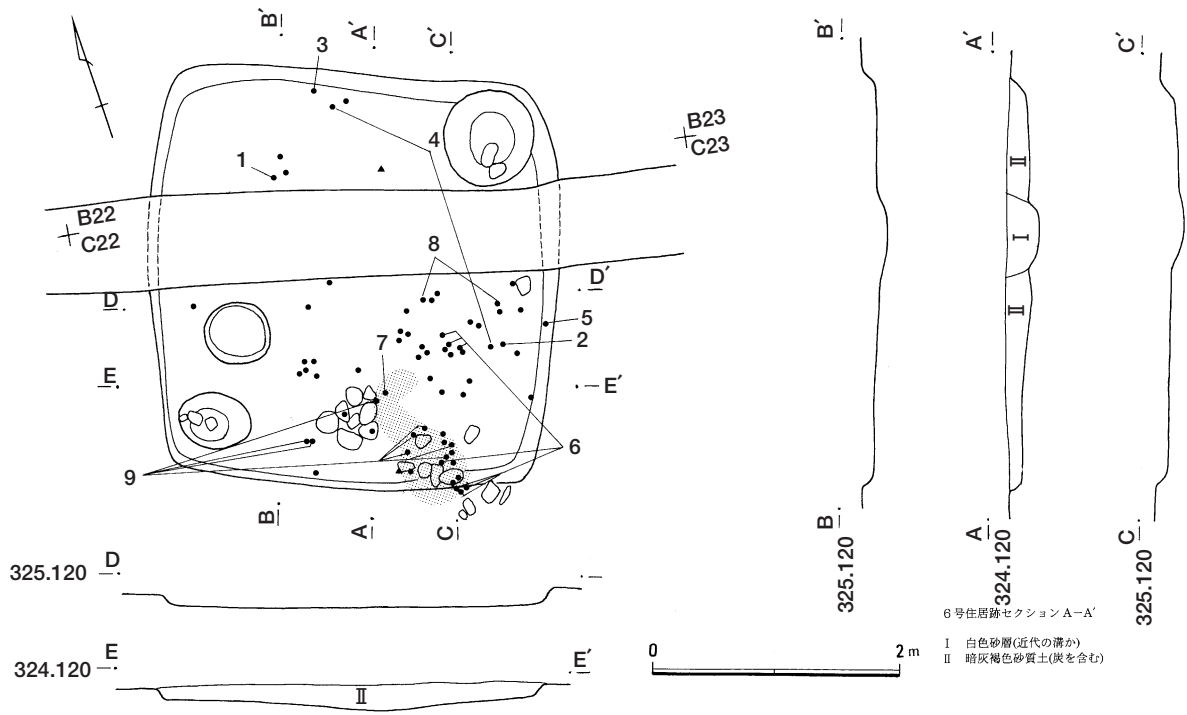
4号住居

第29图 3・4号住居跡(2)



第30図 5号住居跡





第31図 6号住居跡

第2表 平安時代住居出土遺物観察一覽表

遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法			法量(cm)		残存率	注記番号	備考	
								体・外	体・内	底	口径	底径				器高
1号住居	23	1	土師	柱状高台付皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	7.5	4.3	2.1	100	14	1-1
1号住居	23	2	土師	柱状高台付皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	7.8	4.5	2.35	100	33	1-2
1号住居	23	3	土師	柱状高台付皿	平安後	明褐7.5YR5/8	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.1	3.6	2.5	100	5	1-3
1号住居	23	4	土師	柱状高台付皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.7	4.4	2.3	100	31	1-4
1号住居	23	5	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	(7.8)	3.6	2.1	25	24	1-18
1号住居	23	6	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR4/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.3	3.8	2.1	100	28	1-5
1号住居	23	7	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	9.0	4.3	2.1	100	23	1-9
1号住居	23	8	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.8	5.1	2.2	100	32	1-6
1号住居	23	9	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	9.4	4.1	2.4	95	70	1-13
1号住居	23	10	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	(8.8)	4.2	1.9	33	29	1-17
1号住居	23	11	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR6/6	白粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	9.0	4.4	2.1	66	16	1-14
1号住居	23	12	土師	小皿	平安後	暗橙7.5YR6/4(内)	白・赤粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	9.0	3.8	2.4	90	30	1-8
1号住居	23	13	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6(外)	白粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.8	4.5	2.6	100	36	1-7
1号住居	23	14	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/4	白・赤粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	(10.4)	5.2	2.5	60	21,22	1-15
1号住居	23	15	土師	小皿	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	(10.2)	(5.2)	2.4	33	19	1-16
1号住居	23	16	土師	坏	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	9.9	4.9	2.6	75		1-12
1号住居	23	17	土師	坏	平安後	明褐7.5YR5/4	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切・ヘラ	12.6	5.6	4.0	90	17	1-10
1号住居	23	18	土師	坏	平安後	明褐7.5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	(12.0)	5.8	4.2	25	55,112	1-20
1号住居	23	19	土師	柱状高台坏	平安後	明褐7.5YR5/6	白砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	—	5.9	—	15	45	1-19
1号住居	23	20	灰釉	高台付坏	平安後	灰白5Y7/1	緻密小砂含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切→ナデ	15.7	7.0	5.5	95		1-11
1号住居	24	25	土師	羽釜	平安後	明褐5YR5/6	白砂・金雲母	横ナデ	横ナデ	木葉痕	24	14.0	22.7	70	15,102,103,109, 119,120,	1-27
1号住居	24	26	土師	羽釜	平安後	暗褐7.5YR5/4	白砂・金雲母	ヘラなどで	ヘラなどで	—	(28.8)	—	—	—	428,31~34,36	
1号住居	23	23	土師	羽釜	平安後	明褐7.5YR5/6	白砂・金雲母	ハケ	ハケ	—	(34.4)	—	—	破片	44,44ト30,35	1-22
1号住居	24	24	土師	羽釜	平安後	明褐7.5YR5/6	白砂・金雲母	ハケ	ハケ	—	34.0	—	—	破片		
1号住居	23	22	土師	羽釜	平安後	暗褐7.5YR5/4	白砂・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ・ヘラ	—	30.4	—	—	破片	58~63,110, 416,18,19,32	1-28
1号住居	25	28	土師	甕	平安後	暗褐7.5YR5/4	白砂・金雲母	ハケ	ヘラ横	木葉痕	—	(17.4)	—	破片	37,40~42	1-24
1号住居	25	27	土師	甕	平安後	明赤褐5YR5/6	白砂・金雲母	ハケ	ハケ	木葉痕	(39.5)	(15.0)	30.7	70	2,3,7,8,10,56,57,6 5,4ト4,9,11~13	1-29
1号住居	23	21	青磁	碗	中世	オリープ灰10Y5/2		釉薬	釉薬					4ト14		
2号住居	26	1	土師	坏	平安後	明赤褐5YR5/6	白・赤粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	(12.6)	(6.8)	4.3	33	6,7	2-1
2号住居	26	2	土師	羽釜	平安後	褐7.5YR4/4	白色粒・砂粒	ハケ	ハケ	—	(28.4)	—	(26.4)	75	4ト1,3~	2-3
3号住居	28	1	土師	小皿	平安後	明赤褐5YR5/6	白砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.6	4.8	2.6	95	5,7,13,22,24~26	23,3-4
3号住居	28	2	土師	小皿	平安後	橙5YR6/6	白粒・金雲母	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8	5.0	2.5	60		2,3-6
3号住居	28	3	土師	小皿	平安後	明赤褐5YR5/6	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	回糸切	8.5	5.0	2.7	95		1,3-3

遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法		法量(cm)			残存率	注記番号	備考
								体・外	体・内	口径	底径	器高			
3号住居	28	4	土師	小皿	平安後	赤褐5YR4/6	白砂含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	(8.3)	5.0	2.5	70	8	3-5
3号住居	28	5	土師	坏	平安後	明赤褐5YR5/8	白・赤砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	(13.0)	7.0	4.2	33	7	3-1
3号住居	28	6	土師	坏	平安後	明褐7.5YR5/6	白粒・金雲母	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	—	7.3	—	—	10,11	3-2
4号住居	28	1	土師	小皿	平安後	明赤褐5YR5/6	金雲母少含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	8.2	4.9	2.4	100	26	4-2
4号住居	28	2	土師	小皿	平安後	明赤褐5YR5/6	金雲母少含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	8.6	5.0	2.5	75	1	4-3
4号住居	28	3	土師	小皿	平安後	明赤褐5YR5/6	金雲母少含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	8.8	5.0	2.5	33	48	4-4
4号住居	28	4	土師	坏	平安後	暗橙5YR6/4	金雲母少含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	(13.3)	7.7	4.4	75	カト <sup>16</sup>	4-1
4号住居	28	5	土師	坏	平安後	明赤褐5YR5/6	金雲母少含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	—	7.6	(4.8)	33	50	4-6
5号住居	29	1	土師	甕(置カマドか)	平安後	赤褐5YR4/3	金雲母多含	ハケ	ハケ	(28.0)	—	—	10	I-39-17	5-1
5号住居	29	2	土師	甕(置カマドか)	平安後	暗褐7.5YR5/4	金雲母多含	ナデ	指・ハラ	(23.0)	—	—	5	カト <sup>10,11</sup>	5-2
6号住居	30	1	灰釉	段皿	平安後	灰白5Y8/1	白色砂粒含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	—	6.0	—	20	53	6-1
6号住居	30	2	土師	坏	平安後	明赤褐5YR5/6	赤色粒多含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	(10.3)	3.6	3	75	38	6-2
6号住居	30	3	土師	坏	平安後	暗橙7.5YR7/4	白・赤・金雲母	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	(10.0)	(4.6)	2.5	20	56	6-4
6号住居	30	4	土師	坏	平安後	暗橙5YR6/4	赤色粒多含	ロ・横ナデ	ロ・横ナデ	—	(6.9)	—	25	37,57	6-3
6号住居	30	5	土師	甕	平安後	赤褐5YR4/4	白砂・金雲母	ハラナデ	横・ハケ	(24.0)	—	—	5	34	6-7
6号住居	30	6	土師	甕	平安後	赤褐5YR4/6	石英・白粒多含	縦ハケ	横・ハケ	(30.0)	—	—	15	23,26, 28,50,52,69,70	6-9
6号住居	30	7	土師	甕	平安後	暗橙7.5YR5/4	白砂・金雲母	ハ・横ナデ	ハ・横ナデ	(27.0)	—	—	10	12	6-5
6号住居	30	8	土師	甕	平安後	明褐7.5YR5/6	金雲母多含	ハ・横ナデ	ハ・横ナデ	(35.0)	—	—	5	20,31	6-6
6号住居	30	9	土師	甕	平安後	赤褐5YR4/6	白砂粒含	ハラナデ	指・横ナデ	—	8.3	—	10	8,11,44,45,49,62, 64,67	6-8

竈は南辺の中央やや東よりに設置され、石組み粘土覆いの構造をしていたと思われる。竈は住居壁より70cm外側に突出して築かれており、南北1m、東西60cmの楕円形をした皿状の窪みに、左右に袖石を立てている。南側の袖石は3石を並べ外側に石を2重に重ねて補強している。北側の袖は中央が抜けた2石で袖を造っている。焚口は24cmで、奥の幅も同一である。竈の皿状の窪みは外側に向かい次第に浅くなっている。竈内からは坏が出土しており、中央底には焼け土の堆積が見られる。

出土遺物には土師器小皿3点、坏1点、柱状高台付坏1点の合計5点がある。土師器小皿は底部が厚くロクロ成形により口縁部を作る。底は回転糸切である。坏はやはりロクロ成形後、回転糸切底である。4-5は底部が柱状高台となり、ロクロ回転成形により体部を作る。3号住居の遺物と時期差が感じられない。

#### 5) 5号住居跡 (第30図) (p54)

本住居は4号住居の西側1mの場所に造られており、I38・39グリッドに位置する。竈のある辺を南辺とした場合の東辺はグリッドの真北線より東へ27度傾斜しており、4号住居とあたかも方向を並べるようである。平面形は住居中央で南北約3.55m、東西約3.6mのほぼ正方形を呈しているが、東辺は3.1m、南辺は3.2m、北辺は3.1mの長さがあり、西辺は削平されて掘り込みが無い。各辺は緩やかに外側へ膨らんだ形状をしている。竪穴住居の壁の立上りは東辺中央で約5.6cm、南辺で2.5cm、北辺で4.9cmと浅い掘り込み状態である。柱穴や貯蔵穴は検出されていない。

住居の覆土はほとんど存在しないが、床面上には焼土が散乱していることから、火災住居の可能性が高い。

竈は南辺の中央より西側に偏して造られ、竈の焚口より外側は住居外に突出して造られている。この構造も4号住居と類似する。竈は石組み粘土覆いの構造をしており、正面は1.1mの幅があり、焚口の掘り込みから煙道端まで85cmの奥行きがある。中央25cmほどが焚口で、奥の幅は20cm弱と狭まっている。この焚口から南側に長さ55cm程度が竈本体で、西側の袖は2石、東側の袖は2石を立てているが、それぞれの背面にも2重に石を埋めこんで袖石を補強している。煙道は素掘りであり、緩やかに傾斜して上がっている。これらの特徴から、本住居跡と4号住居跡は極めて類似した構造を持っている点に注目することができる。

遺物は竈内部から甕破片が2個体分出土している。2点とも口縁が直立している鍋形の器形を想定できるが、あるいは置きカマドではないかという見方もある。この内5-1は内外面刷毛整形で、口縁は水平になるようにヘラ整形が丁寧に成されている。5-2は内外面ともに指頭痕が残るとともに、外面はヘラで磨かれ、内面も縦方向のヘラ磨きが見られる。しかし、輪積跡が十分に接着されずに、接合痕が明瞭である。

#### 6) 6号住居跡 (第31図) (p55)

本住居はB・C22グリッドに位置しており、平面形は住居中央で南北約3.3m、東西約3.2mのほぼ正方形を呈しているが、東辺は3.2m、西辺は3.2m、南辺は2.95m、北辺は2.8mの長さがあり、各隅は丸みを帯び、各辺は緩やかな半円型に膨らんだ形状をしている。東辺は9度東に偏っている。竪穴住居の壁の立上りは東辺中央で約12.1cm、西辺中央で6.7cm、南辺で7.1cm、北辺で11.1cmと浅い掘り込み状態である。柱穴は無いが、北東隅と南西隅に土坑がある。北東隅の土坑は直径70cmで、床面から約5.8cmほどの深さがあり、中から2個の石が出ている。南西隅には2個の土坑があり、南側は直径60cmのやや楕円形で12・2cmの深さがあり、中から小石が3個出土している。この北側の土坑は直径50cmで深さ4cmである。

なお、住居中央を幅80cmほどの新しい溝が掘られている。また、住居の覆土は炭などを含む灰暗色砂質土である。

竈は南東のコーナーかそれに近い南辺に設置され、石組み粘土覆い構造をしていたと考えられる。しかし、石組みは破損しており構造を知ることはできない。石の下には壁に接して直径50cmの円形に焼け土が分布している。

出土遺物は土師器坏3点、灰釉陶器坏高台部1点、甕5点の合計9点である。土師器坏は回転糸切の底部径が大きく、体部は内湾するものである。灰釉陶器坏の高台部は胎土が白くきめこまかいが、見込み部にも外面にも釉薬はかけられない新しいタイプである。甕には2種類がある。ハケ目整形と指頭跡を残しヘラナ



デ整形によるものである。サイズも30cm以下と以上の径があり、整形の差はどちらのタイプにもある。

### 3 その他の遺構と遺物

#### 1) 遺物集中地区

住居跡や谷跡以外の遺構には、近世の溝跡や近代の農耕による攪乱が至るところにある。この中で後世の攪乱を免れた遺物の集中地区が1ヵ所ある。F31、G31.32グリッドから、古墳時代の土師器がまとまって出土している。このほか、A～Eで2～9のグリッドからばらばらと古墳時代の土師器が出土しているが、これが遺物集中地区なのか、あるいは谷から流れ出た遺物なのか、明らかではないところがある。

F31、G31.32グリッドの集中地区での遺構は不明である。特にG31グリッドを中心に遺物が出土している。器種はS字台付甕、台付甕、壺、甕、壺と甕底部、甌、高坏、小型土器などで、完形はなく破片で多数出ており、器形の判別できるものは37点ほどである。このうち一部を第32図（p 60）に示した。

#### 2) グリッド出土遺物（第32、33図）（p 60、61）

遺跡全体や、谷部付近、谷の下流域にあたる地域等で古墳時代から平安時代・中世の遺物が出土している。

##### ① 古墳時代出土遺物（第32図）

G31グリッドから古墳時代前期のまとまった遺物が出土している。壺（1）、甕（2～3）、甌（5）、小型土器（6）である。壺の胴部には円形の穿孔が1ヵ所あり、底部中央も破片が無い。胴部の穿孔は意識的なものであるが、底部は意識的なものか判断はつかない。このほか特筆すべき遺物は無い。この地点からは多くの破片が出土しており、何らかの遺構が存在した可能性があるが、調査の時点では検出されなかった。

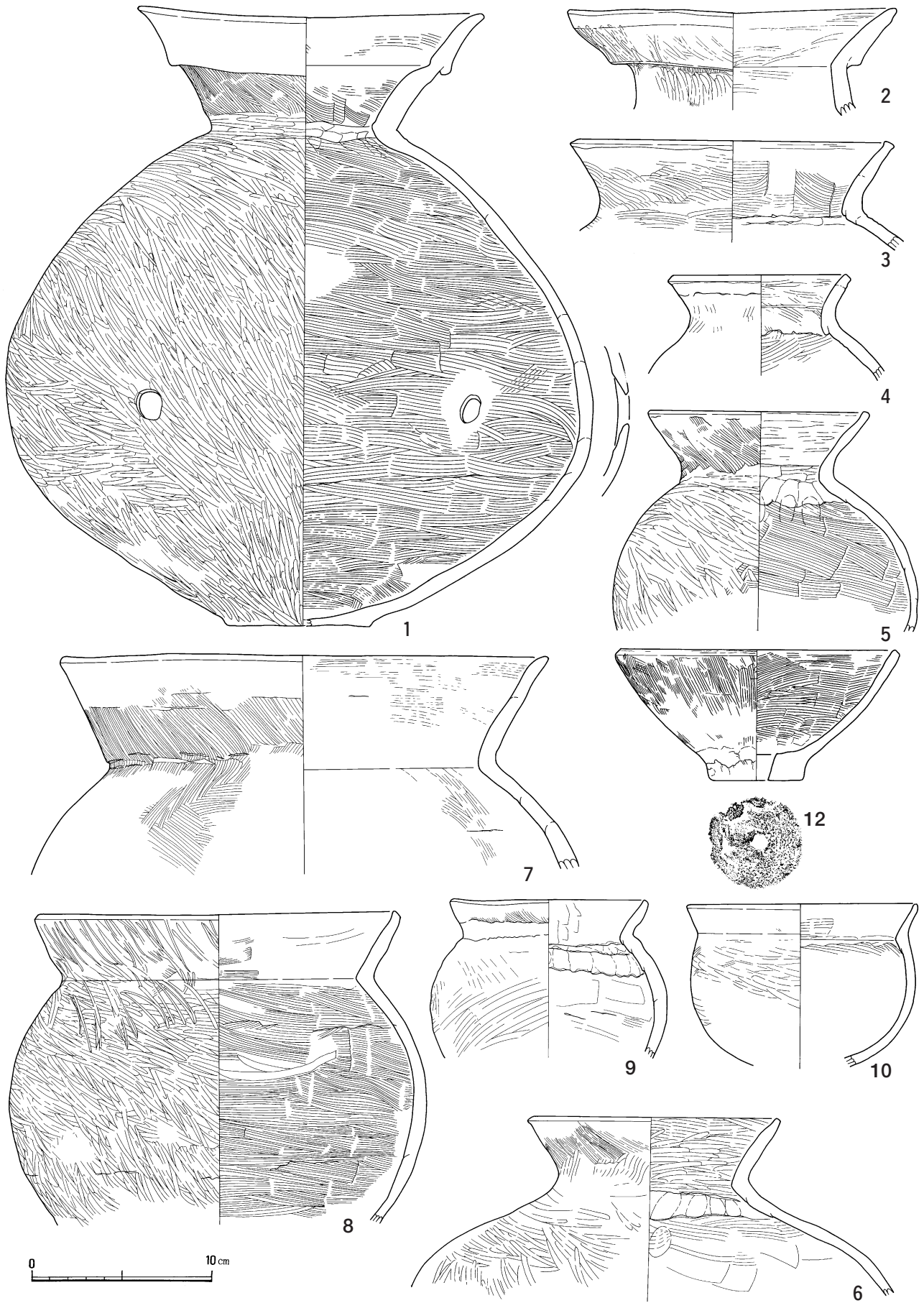
##### ② 平安時代出土遺物（第33図）

11世紀～12世紀の土師器坏、皿、甕、灰釉陶器坏などの破片がある。谷からの出土、遺跡全体からの出土があり、生活時の周辺への廃棄物の一部であろうと考える。第33図の2は、内面見込みに墨書が見られるが、判読はできない。3は高台付坏であり、4～7は本遺跡の住居群と同一時期の土師器である。8は灰釉陶器坏片で、釉薬はかかっていない。

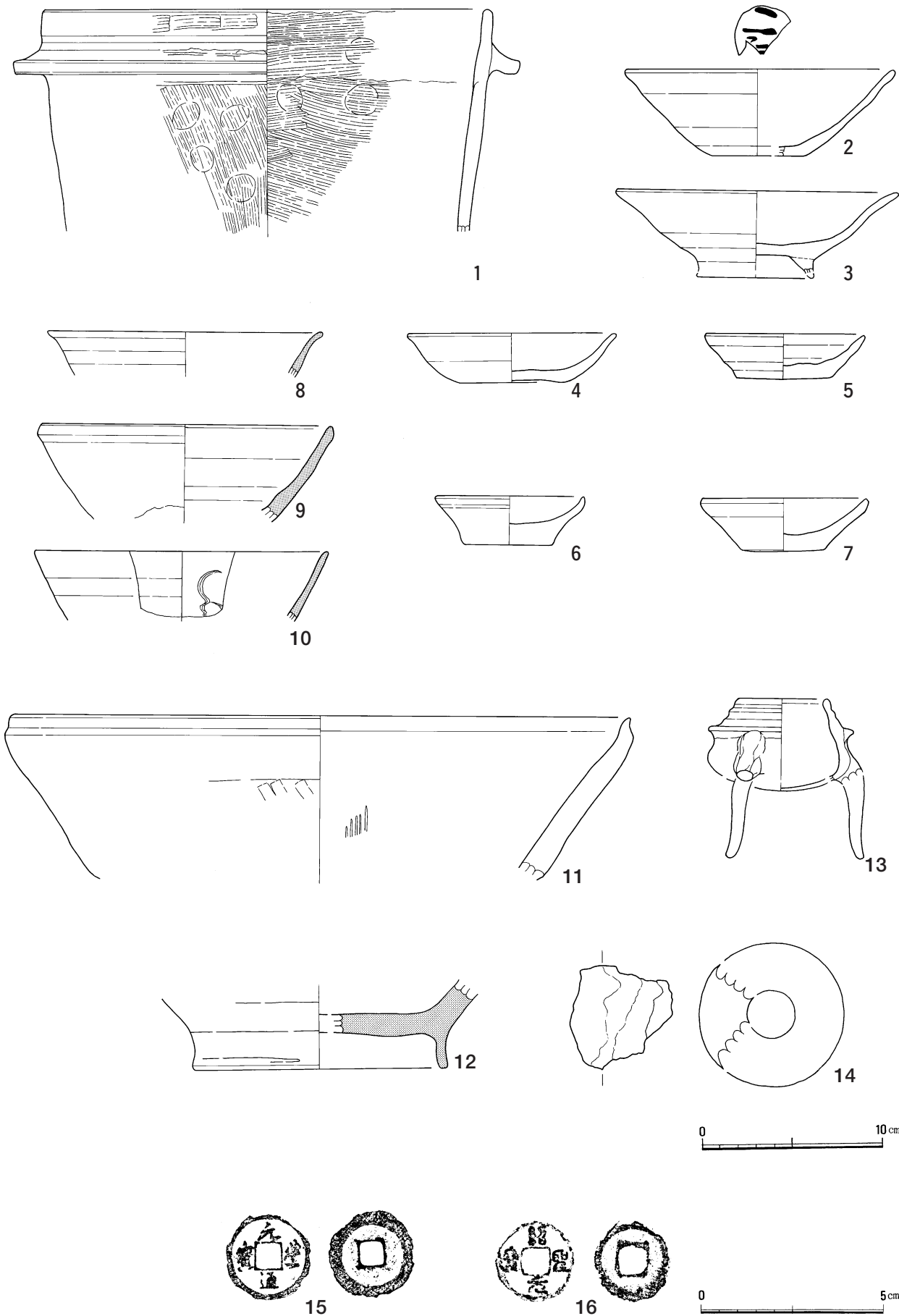
##### ③ 古代・中世以降出土遺物（第33図）

11世紀の白磁器（9）、12世紀以降の青磁器（10）や瀬戸・常滑陶器破片がある。又、瓦器製の播鉢（11）、小型脚付羽釜（13）等が見られる。瓦器製播鉢は刻線が相当磨滅してわずかに見える程度で、刻線は重複がなく疎らであるから、中世の所産と見て間違いない。瓦器製小型脚付羽釜は13世紀～14世紀に畿内を中心として生産・使用されたもので、京都府市内での出土例が多く認められる。とりわけ小型三脚付羽釜は祭祀に使用された可能性があろう。この遺物は直接畿内から搬入されたものであろう。14は羽口破片である。I—39グリッド出土であり、平安時代の5号住居近辺から出土している。なお、グリッドより古銭が2枚出土している。

古銭は元豊通宝（北宋 初鑄1078年）と紹聖元宝（北宋 初鑄1094）であり、中世一括埋蔵銭の中に多く存在する銭である。



第32图 遗物集中地区出土遗物



第33图 谷跡他出土遺物

第3表 グリッド他出土遺物観察表

遺構	図	番号	種類	器種	時期	色調	胎土	整形技法			法量(cm)		残存率	注記番号	備考
								体・外	体・内	底	口径	底径			
G31	31	1	土師器	有段口縁壺	古墳前	赤褐5YR4/8	白・砂・金雲母	ヘラ磨き	ハケ	ヘラ	19.0	7.8	33.4	45%	胴部穿孔・胴煤
G31	31	2	土師器	壺	古墳前	赤褐2.5YR4/8	白色・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ・ヘラ		18.0				
G31	31	3	土師器	甗	古墳前	明赤褐5YR5/8	白色・金雲母	ハケ	ハケ		16.8			30%	内外面煤
G31	31	4	土師器	甗	古墳前	赤褐5YR4/8	白・砂・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ		9.6			25%	
G31	31	5	土師器	壺	古墳前	明赤褐5YR5/6	白・砂・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ		11.8	7.9		50%	外面煤付着
G31	31	6	土師器	壺	古墳前	赤褐5YR4/8	白・砂・金雲母	ハケ	ハケ・ヘラ		13.5				外面煤付着
G31	31	7	土師器	甗	古墳前	赤褐5YR4/8	白色・金雲母	ハケ	ハケ・ヘラ		26.7			20%	外面煤付着
G31	31	8	土師器	甗	古墳前	赤褐5YR4/8	白色・金雲母	ヘラ磨き	ハケ		19.7			40%	外面煤付着
G31	31	9	土師器	小形甗	古墳前	赤褐5YR4/8	白色・金雲母							30%	外面煤付着
G31	31	10	土師器	小形甗	古墳前	橙7.5YR6/6	白色・金雲母	ハケ・ヘラ	ハケ		12.5			40%	外面煤付着
G31	31	11	土師器	甗	古墳前	赤褐5YR4/6	白・金雲母混	ハケ	ハケ	単孔	15.0	5.0	7.2	40%	
F31	32	1	土師器	羽釜	平安	赤褐5YR4/6	白色・金雲・砂	ハケ	ハケ		24.7			15%	
C19	32	2	土師器	坏	平安	橙5YR6/6	白色・金雲・砂	横まで	横まで		14.8	5.0	4.6	40%	墨書あり
谷	32	3	土師器	高台坏	平安	明赤褐5YR5/6	赤色・金雲・砂粒	口横まで	口横まで		15.6	(4.5)	(6.4)	45%	
F32	32	4	土師器	坏	中世	明赤褐5YR5/8	赤色・金雲・砂粒	口横まで	口横まで		11.5	6.0	2.7	60%	
J43	32	5	土師器	小皿	中世	明赤褐5YR5/6	白・金雲母混	口横まで	口横まで		8.8	5.0	2.4	75%	
I39	32	6	土師器	小皿	中世	赤褐5YR4/6	赤色・金雲・砂粒	口横まで	口横まで		8.3	5.0	2.7	90%	
I43	32	7	土師器	小皿	中世	明赤褐5YR5/6	白色・金雲・砂	口横まで	口横まで		9.2	4.7	2.8	80%	
谷	32	8	灰釉陶器	碗	平安	灰黄2.5Y7/2		無釉	無釉		(15.0)				
I37	32	9	白磁器	碗	中世	浅黄2.5Y7/3		釉薬	釉薬		(16.0)				
谷	32	10	青磁器	碗	中世	灰オリーブ5Y5/3		施釉	施釉・刻線		(16.0)				
谷	32	11	瓦器	播り鉢	中世	暗黄橙10YR7/3	白粒・金雲母混	ヘラ磨き	ヘラ磨き		(34.0)				刻線僅か
谷	32	12	陶磁器	?	中世	黄灰2.5Y6/1	白粒・砂粒混	回転・ヘラ	ヘラ磨き		(14.0)				
6溝	32	13	瓦器	有脚羽釜	中世	黄灰2.5Y6/1	灰色少粒子	横まで	横まで		(5.0)				
I39	32	14	土師器	羽口	中世	暗灰色	砂粒多い	横まで	横まで						直径8cm



## 第4章 理化学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

本報告では、足原田遺跡（山梨県山梨市）の古墳時代前期頃の溝跡や平安時代の竪穴住居跡から採取された炭化物の鑑定を行い、当該期における植物利用の検討を行う。

### 1. 試料

試料は、平安時代の竪穴住居跡（1号住）竈跡内から採取された土壌1点、同時期の竪穴住居跡（3号住）内から出土した炭化材6点、さらに、古墳時代前期と考えられる溝跡（5号溝）から出土した球根状炭化物10点である。

これらの試料について、土壌を対象に微細物分析を行い、燃料材や有用植物に由来する炭化材や炭化物の抽出、同定を行う。一方、球根状炭化物については、植物遺体同定を、炭化物については樹種同定を行い、それぞれ種類を調査する。なお、球根状炭化物について、既存の分析データとの比較資料を作成するため、計測及び遺存状況の比較的良好な試料について、炭化物断面を作成、写真撮影を行う。試料の詳細は、各分析結果とともに表に示す。

### 2. 分析方法

#### (1) 微細物分析

試料600cc（約1kg）を秤量し、水に浸して泥化を促進させる。0.5mmの篩を通して水洗したあと、残渣を双眼実体顕微鏡で観察し、種子、炭化物、土器などの微細遺物を回収した。回収した微細遺物は、低温で乾燥させた後、瓶に入れて保存する。

#### (2) 植物遺体同定

球根状炭化物10点はいずれも鱗茎状を呈する。1試料（袋）につき1～数个あり、複数ある試料に関しては、便宜上個体毎に枝番号を付している。鱗茎状を呈する炭化物は、遺跡での検出例はいくつか知られており、ユリ科やヒガンバナ科の鱗茎に比較されることが多いが、確実な同定は難しいと考えられている（山本，2002など）。このことから、今回は上記したように、他地域で出土している鱗茎との比較できるように大きさの計測（図1）や形状の記録、さらに、試料の半裁を行い断面形態の記録を行う。

#### (3) 樹種同定

3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 3. 結果

#### (1) 微細物分析

結果を表1に示す。1号住カマドからは、同定可能な種実遺体は検出されず、微量の炭化材と土器片1点が検出されたのみである。検出された炭化材は、いずれも微細で脆弱であったため、同定は不可能であった。なお、表に示した炭化材の重量は、付着した土壌を含んでいる。

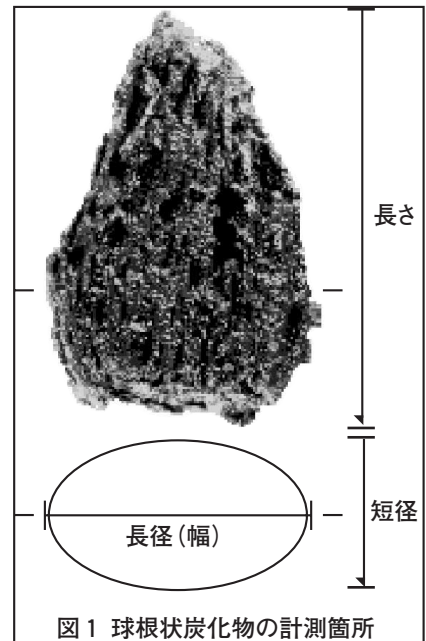


図1 球根状炭化物の計測箇所

## (2) 植物遺体同定

結果を表1に示す。

### ・測定

鱗茎は完形のもの少なく、先端部や基部などの欠損するものがほとんどであった。本報告では、肉眼観察で個体の1/4以上が残存していると考えられる試料を対象に計測を行い、それより小さい破片試料については、細片として一括して扱っている。また、1個体が細かく割れ破片となったと考えられる試料や、個体の一部が断片化したと考えられる試料があることから、これらは備考に明記した。計測にあたり、試料表面の土壌の除去は可能な限り行った。ただし、大部分の試料は脆弱であり破損の恐れがあることから、ほとんどは土壌の付着した状態で計測を行っている。

1749は、土壌塊に鱗茎組織が一部観察されたことから、土壌の除去を行ったところ、3個体の根茎が確認された。なお、本試料には土壌塊とともに鱗茎細片が多数含まれていたが、これは3個体とは別の個体の一部と推測される。

計測値は、上記したように先端部や基部が欠損した試料が多いことから、ばらつきが大きい。完形に近い試料を参考にすると、長さ2-3cm、幅1-1.5cm程度である。外形は尖端がややとがった三角錐状で、長さとの比は2:1程度である。1749については、接合しているため接合面が平面となり、ややいびつな形を呈する。

### ・断面

断面(縦断面、横断面)観察は、形状が明瞭で破損のない試料、あるいは断面観察に影響のない箇所が破損している試料3点(1235-2, 1744-1, 1751)を選択・抽出した。なお、保存状態が良好な試料のうち、1235-3は切断せず現状保存することとし、1749は完形に近いが、形状にひずみがあることから対象外とした。

断面観察の結果、最大で10枚以上の膜構造が認められた。ただし、炭化の際に、葉肉内の水分が失われたことにより鱗片表面や裏面間に空隙が生じ、膜構造は本来の鱗片数の倍になると推測される。このことから、実際には数枚程度の鱗片で覆われているものと推定される。

## (3) 樹種同定

結果を表2に示す。炭化材は、針葉樹1種類(モミ属)、広葉樹1種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節)とイネ科タケ亜科に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

表1. 微細物・植物遺体同定結果

種別	試料名	分析量	種類	性状	大きさ等	備考
土壌	1号住 カマド	600cc	土器		1個	
			炭化材		0.45g	
球根状炭化物	5号溝	1235-1	鱗茎	細片(100+)		
		1235-2	鱗茎	破片(2/3)	19.5x11.6x10.5	撮影のため切断
		1235-3	鱗茎	ほぼ完形	21.6x9.3x8.6	
		1235-4	鱗茎	破片(1/4)	15.5x12.4x4.7	
		1235-5	鱗茎	破片(1/3)	12.8x11.6x9.2	
		1743	鱗茎	細片(15+)		同一個体か?
		1744-1	鱗茎	破片(1/2)	18.5x14.1x6.8	撮影のため切断
		1744-2	鱗茎	細片(30+)		-1の破片か?
		1745	鱗茎	細片(5+)		同一個体か?
		1746-1	鱗茎	破片(1/3)	12.0x8.4x4.6	
		1746-2	鱗茎	細片(20+)		-1の破片か?
		1747	鱗茎	細片(100+)		
		1748	鱗茎	破片(1/3)	13.2x9.1x5.8	
		1749-1	鱗茎	ほぼ完形	32.4x18.3x8.5	接合
		1749-2	鱗茎	ほぼ完形	29.7x8.6x16.9	接合
		1749-3	鱗茎	細片(100+)		同一個体か?
		1749-4	鱗茎	ほぼ完形	25.1x11.2x5.0	接合
1750-1	鱗茎	破片(1/2)	31.1x11.8x11.3			
1750-2	鱗茎	細片(100+)		同一個体か?		
1751	鱗茎	破片(2/3)	22.6x18.4x15.8	土壌付着	撮影のため切断	

破片の場合は残存割合を分数で、破片の場合はおおよその破片数を数値であらわしている  
鱗茎の大きさは、長さx長径x短径で表す

表2. 樹種同定結果

グリッド	遺構	試料名	樹種
J-39	3住	No.4	イネ科タケ亜科
		No.17	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		No.18	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
J-40	3住	No.19	モミ属
		No.5	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		No.6	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅうず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・イネ科タケ亜科 (*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*)

横断面では、維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。

## 4. 考察

### (1) 球根状炭化物

いわゆる球根は、サツマイモやキク科にみられる根の一部が変化したもの、ジャガイモ、ワサビ、サトイモ、レンコンなど茎や地下茎が変化したもの、ユリやタマネギなど葉が変化したものがある。今回検出されたものは、数片の鱗片が重なり球状を呈することから、葉が変化した球根(鱗茎)と判断される。ユリ属の鱗茎のように小さな鱗茎が螺旋状につくのではなく、包み込むようにして球状を呈することから、ユリ科のネギ属やルツボ属、ヒガンバナ科、アヤメ科等にみられる鱗茎に近い。球根には、親球が毎年消耗して更新されるものや、親球は毎年肥大し、脇に子球が作られるものがある。今回の試料は、横断面が円形ではなく、ややいびつなものが多い点(横断面の写真図版参照)や、接合した状態で検出された1794は親球と子球の判別が困難である点を考慮すると、親球が毎年消耗して更新される種類に属すると考えられる。このような形状を持つ種類としては、ユリ科ネギ属(アサツキ、ノビルなど)などがあげられる。

本分析試料と同様な球根等の分析調査事例では、山梨県中溝遺跡でノビル?とされたものは、長さが10-15mm、直径が10mm程度(松谷, 1996)で、本試料よりも小形である。また、長塚下り畑遺跡から出土したものは、ルツボに似るものの横断面がいびつなことから、詳細は不明とされている(長沢2000, 松谷2000)が、本試料と形態的にも類似している。

以上の結果から、今回検出された鱗茎は、長塚下り畑遺跡から出土した資料に近い形状を持つと言える。現存する種類にあてはめると、ネギ科ネギ属もしくはルツボ属に類似すると思われるが、決め手に乏しく具体的な種類名を特定するには至らない。鱗茎が特定の種類に同定できない要因として、生育状況による変異が大きいことや、種類による差異が少ないことがあげられる。根茎の同定には外形や大きさを重視した方がよい(松谷, 2000)との見解もあることから、今後は現生試料の形態記載や出土試料の形態に関する情報を蓄積し、種類の特定を行うための基礎資料整備が必要と考えられる。

### (2) 炭化材

平安時代の竪穴住居跡から出土した炭化材にはクヌギ節、モミ属、タケ亜科が認められ、大部分はクヌギ節であった。これらの炭化材は、いずれも焼失住居と考えられる遺構内から出土していることから、住居構築材の一部が、炭化し残存したのと考えられる。

本分析で確認されたクヌギ節の木材は、重硬で強度の高い材質を有し(平井, 1979)、構築材としては適材と考えられる種類である。一方、モミ属は、比較的大径木になる種類で、クヌギ節に比較して強度は低いが割裂性が高く、加工が比較的容易な種類である。この材質から、板材などに利用された可能性もある。タケ亜科は、破片から推定される径は4-5cm以上と予想され、マダケやハチクなどの可能性がある。

また、クヌギ節は、二次林（雑木林）の構成種として人里近くに広く見られる種類であることから、現在の甲府盆地やその周辺地域でも普通にみられる樹種である。山梨県内の調査事例では、韮崎市堂の前遺跡（高橋，1987）や、長坂町健康村遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994）の古代～中世の住居跡でクヌギ節が多く認められている。また、百々遺跡、原町農業高校前遺跡でもクヌギ節の利用が認められており、本分析結果はこれらの調査事例と調和する傾向と言える。

## 引用文献

平井信二，1979，木の事典 第2巻.かなえ書房.

松谷暁子，1996，中溝遺跡から出土した炭化植物について.山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第115集，中溝遺跡・揚久保遺跡—山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書，山梨県教育委員会・日本鉄道建設公団，49—53.

松谷暁子，2000，永塚下り畑遺跡から出土した炭化球根の実体験尾錠およびSEM観察.神奈川県小田原市下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点，鎌倉遺跡調査会・下曾我遺跡発掘調査団，327—332.

長沢宏昌，2000，永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点K3号住居跡出土の炭化球根について.神奈川県小田原市下曾我遺跡・永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点，鎌倉遺跡調査会・下曾我遺跡発掘調査団，321—326.

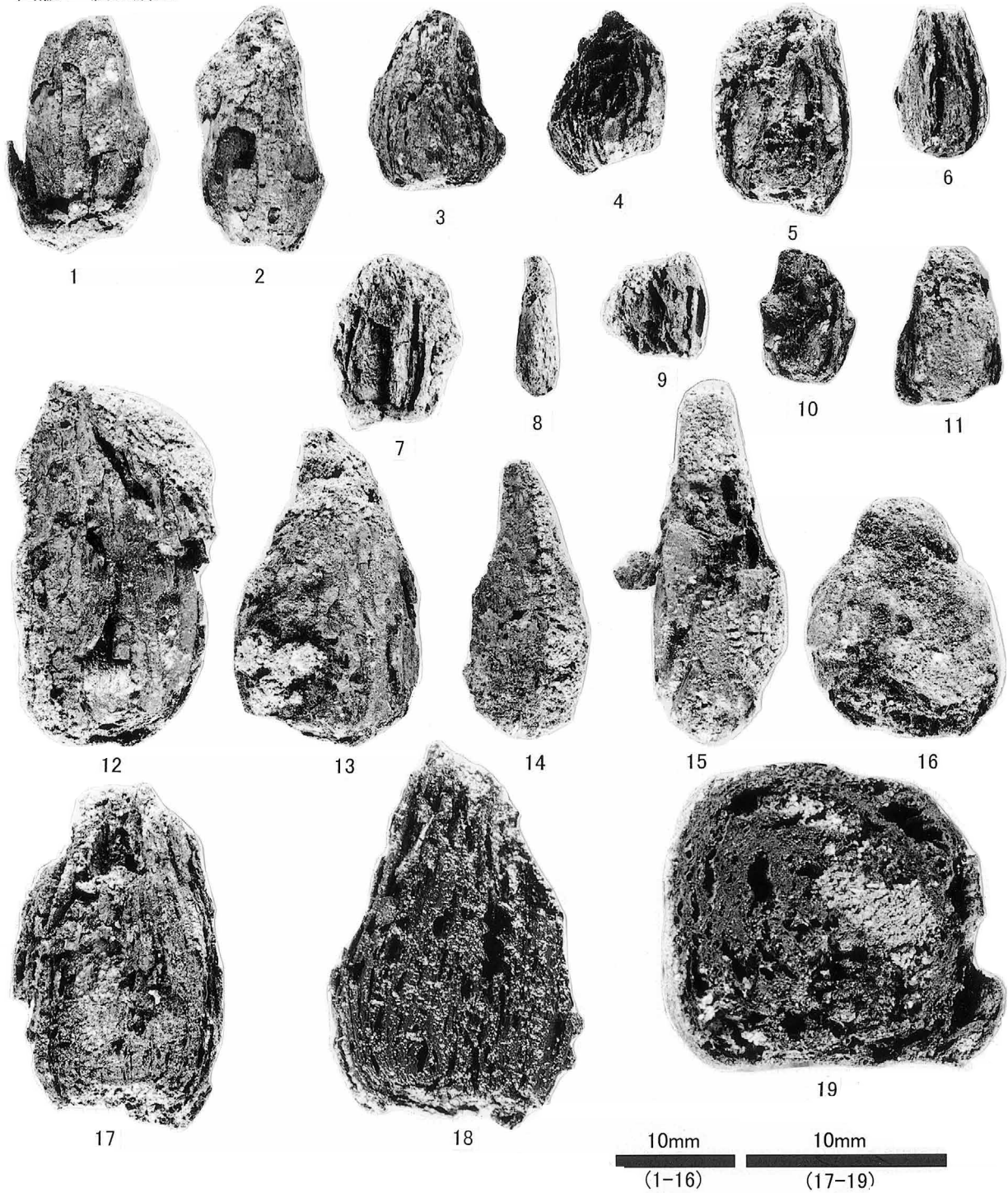
パリノ・サーヴェイ株式会社，1994，健康村遺跡自然科学分析調査報告.「山梨県北巨摩郡長坂町 健康村遺跡—（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書—」，新宿区区民健康村遺跡調査団，116—128.

高橋利彦，1987，炭化材について.山梨県韮崎市 中本田遺跡・堂の前遺跡 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，韮崎市教育委員会・狭北土地改良事務所，56—60.

山本直人，2002，縄文時代の植物採取活動—野生根茎類食料化の民族考古学的研究—.溪水社，250p.

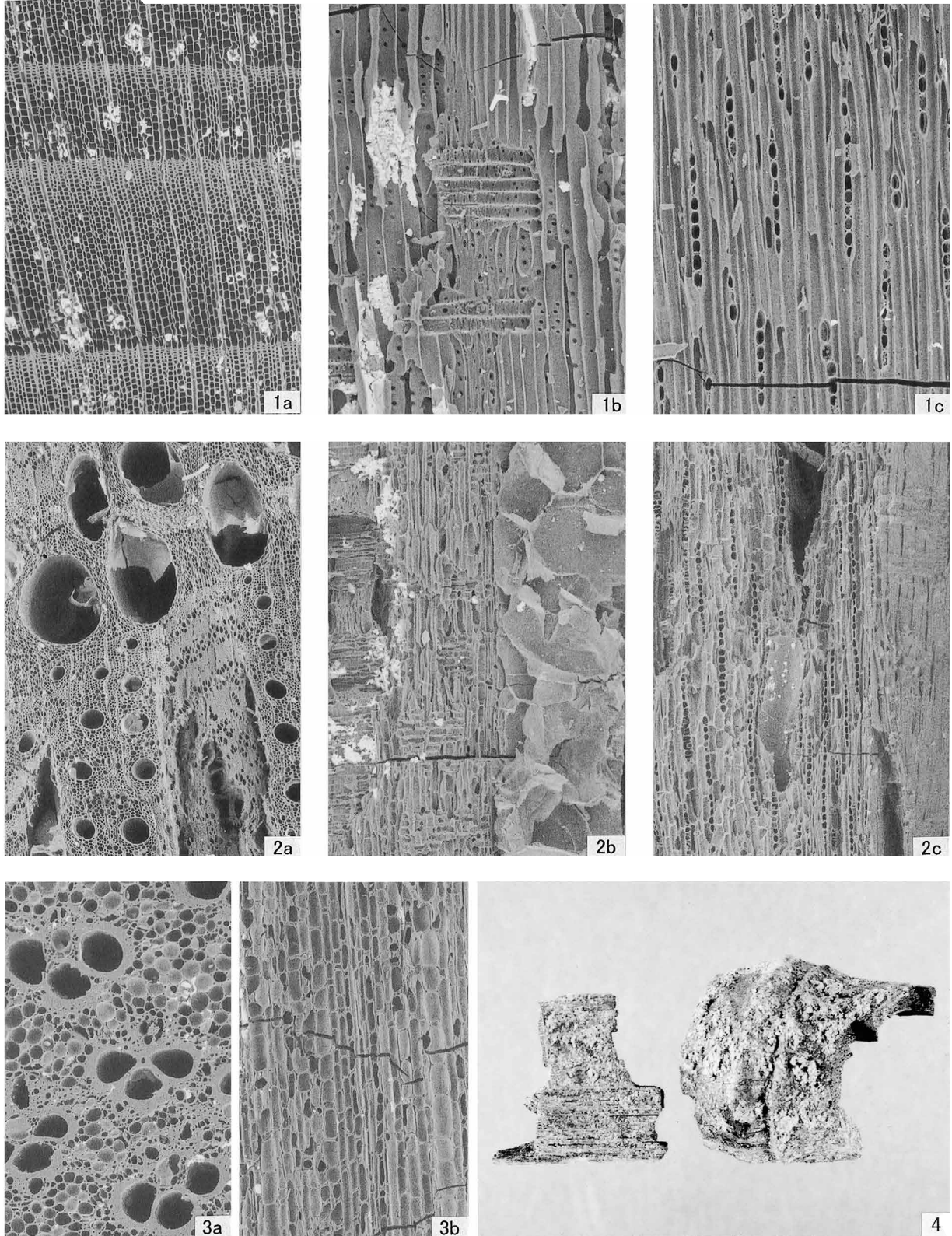


図版1 炭化鱗茎



- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1. 鱗茎(5号溝 1235-2)      | 2. 鱗茎(5号溝 1235-3)      |
| 3. 鱗茎(5号溝 1235-4)      | 4. 鱗茎(5号溝 1235-5)      |
| 5. 鱗茎(5号溝 1744-1)      | 6. 鱗茎(5号溝 1743)        |
| 7. 鱗茎(5号溝 1743)        | 8. 鱗茎(5号溝 1743)        |
| 9. 鱗茎(5号溝 1743)        | 10. 鱗茎(5号溝 1746-1)     |
| 11. 鱗茎(5号溝 1748)       | 12. 鱗茎(5号溝 1749-1)     |
| 13. 鱗茎(5号溝 1749-2)     | 14. 鱗茎(5号溝 1749-4)     |
| 15. 鱗茎(5号溝 1750-1)     | 16. 鱗茎(5号溝 1751)       |
| 17. 鱗茎 縦断面(5号溝 1744-1) | 18. 鱗茎 縦断面(5号溝 1235-2) |
| 19. 鱗茎 横断面(5号溝 1751)   |                        |

図版2 炭化材



1. モミ属(3住No.19) a:木口, b:柁目, c:板目  
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(3住No.5) a:木口, b:柁目, c:板目  
 3. イネ科タケ亜科(3住No.4) a:横断面, b:縦断面  
 4. 炭化物の外観(3住No.4)

100 μm: 1a3a,b  
 100 μm: 1b,c  
 200 μm: 2a  
 200 μm: 2b,c  
 1cm: 4

## 第5章 総括

### 第1節 古墳時代

#### 1 土師器の出土状態

古墳時代の出土土師器の破片数は1万点に近い。しかし、その大部分は谷と呼んでいる東西方向の窪地とその周辺から出土しているものである。このうち実測図を作成したものと、遺物の観察から器形が判明したものを選別しカウントしたところ全体で835点を数える。これらの遺物を第4表の様に器種別に分類し、出土グリッドや遺構別にその出土地点の一覧表を作成した。

遺跡全体で出土数の多い器種は壺で、単純口縁・折り返し口縁・有段口縁・複合口縁の壺がある。底部破片も多いが、壺の底か甕の底か判別不明なものを合せると364点となる。次いで甕が多いが、甕には3種類がある。台を持たない甕と台付甕があり、台付甕には単純口縁とS字口縁がある。この3種類の甕を合わせると254点であり、壺の点数に近くなる。壺と甕の合計は618点で全体の74%に達する。

壺・甕に次いで多いのが高坏で119点ある。坏埴類は高坏に較べ遥かに少なく、器台は高坏の20%、坏埴類の58%である。これらの高坏、器台、坏埴類は出土場所がほとんど谷部からであり、壺、甕も同様に谷であることから、食事に使われる煮炊きの道具と、食膳の食器が同一箇所から出土していることになる。このことは第16～22図（p25～38）を見れば一目瞭然となる。

谷以外の出土地では谷の西側部分に分散して様々な器種が分布する。これは谷からの流出の可能性があり、遺物集中地区とは考えられない。一方、G31グリッド周辺では、様々な器種が集中しており、遺物集中地区として発掘中も観察されていた。ここからは手づくね土器が出土していることから祭祀場の可能性があるが、出土数も少なく、より祭祀にかかわる遺物、たとえば勾玉や白玉などの玉類等の祭祀遺物が出土していないので、確定根拠に欠ける。

古墳時代における本遺跡の出土遺物の、約90%が谷からの出土遺物である。このため、これらの大量の土師器がどこから、どの程度の期間、どのようにしてこの場所にもたらされたのかが明らかになれば、この地域の古墳時代前期（4世紀後半）の人々の生活の姿を描くことができるのであるが、残念ながら、次に述べるような土器の観察から、今は凡その廃棄期間を知りうるだけである。

また、谷部の古墳時代前期土師器には、特殊器台や口縁部が大きな甕など、山陰・北陸系統の土器もあり、県内各地と同様の傾向も見られる。なお、甕には刷毛整形とへら整形の2種類があり、台付甕やS字口縁台付甕にも僅かながらへら整形の甕がある。これらは小林健二（1999 小林健二）が指摘しているように在地系の甕であろう。なお、平成15年度調査の遺跡全体における器種別の分布は第4表（p70）と第34～36図（p71～73）に現す事ができる。

#### 2 土師器の年代

本遺跡から出土する古墳時代の土器は、凡そ4世紀後半から5世紀初頭にかけての遺物である。なお、これらの器種分類や編年的な研究については、別の機会を持ちたい。

### 第2節 平安時代

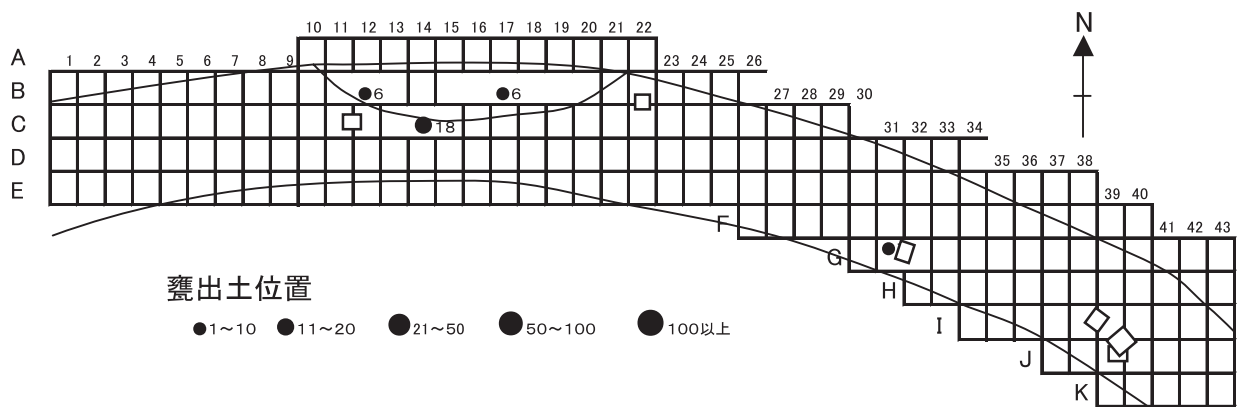
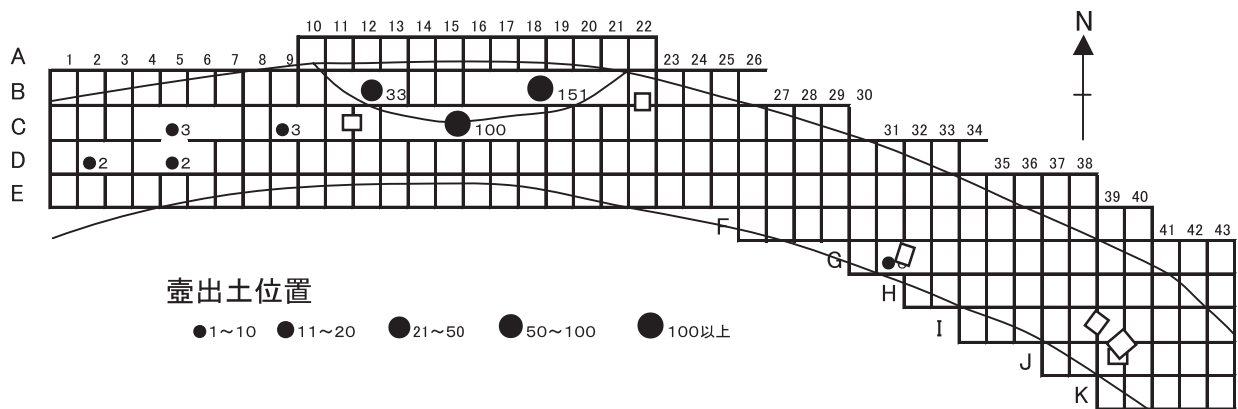
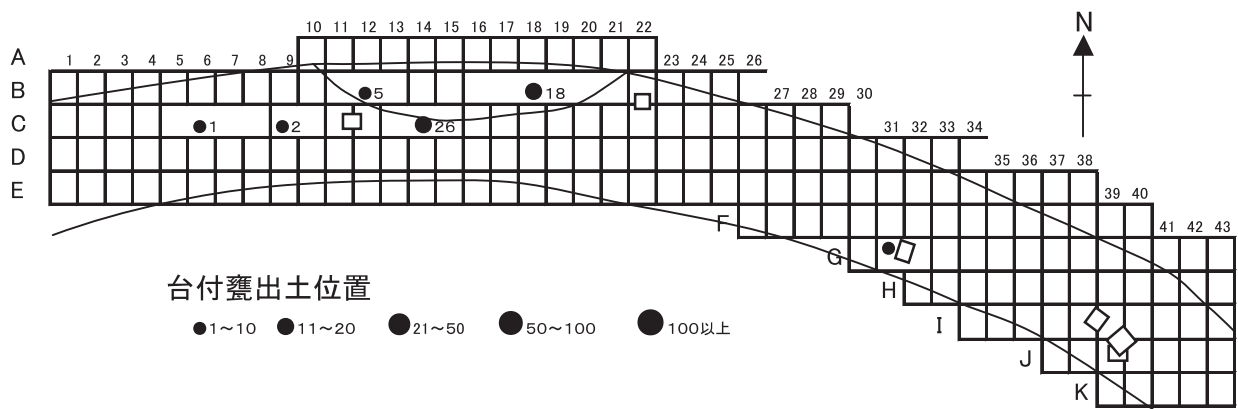
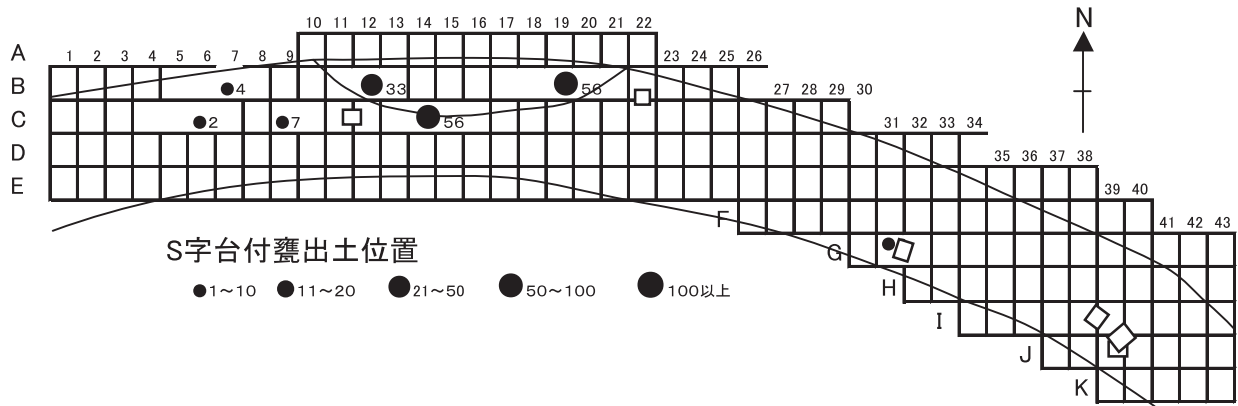
#### 1 住居とカマド

本遺跡からは6軒の竪穴住居跡が検出されている。3号住居と4号住居が切合っている以外は、単独で存在しているので、集落の時期は少なくとも2時期に分けられるのではないかと思う。又、住居のカマドの位置によって2種類に分けることができる。1つは方形の竪穴住居の南辺壁に取付くもので、2つ目のタイプは南東コーナーに設置されるものである。3号住居は火災住居であるが、これを切って4号住居が造られていることは、すでに述べた。3号住居のカマドは南東コーナーにあり、4号住居は南壁中央にあることから、カマド位置の新旧は「南東コーナー」→「南壁中央」ということになる。カマド位置だけか

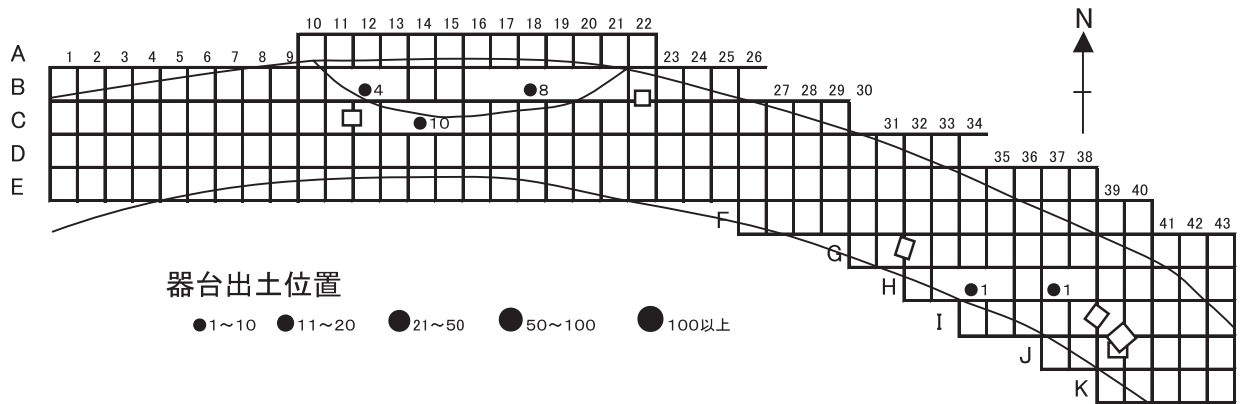
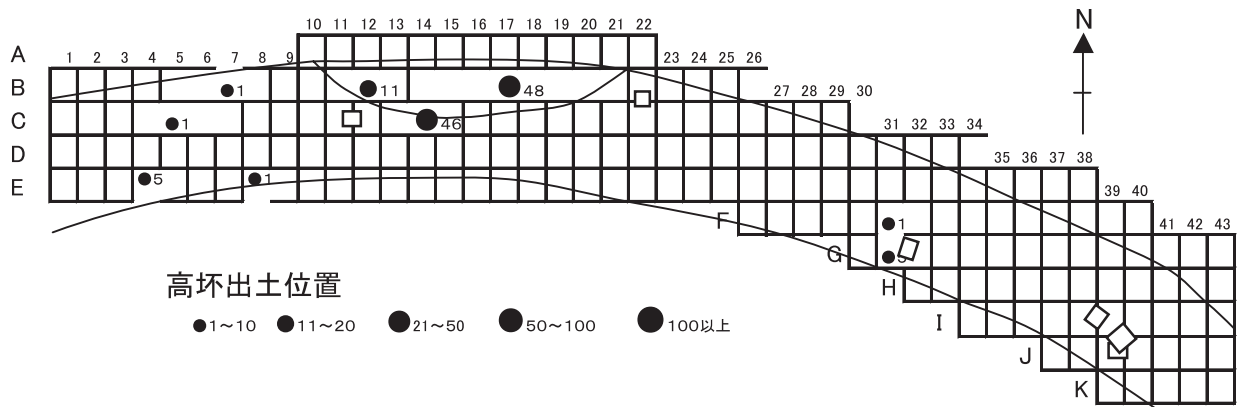
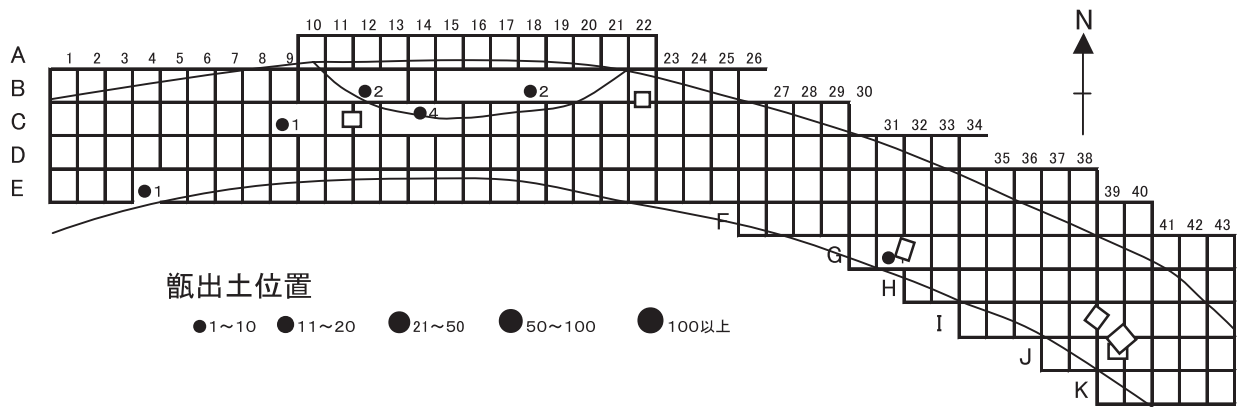
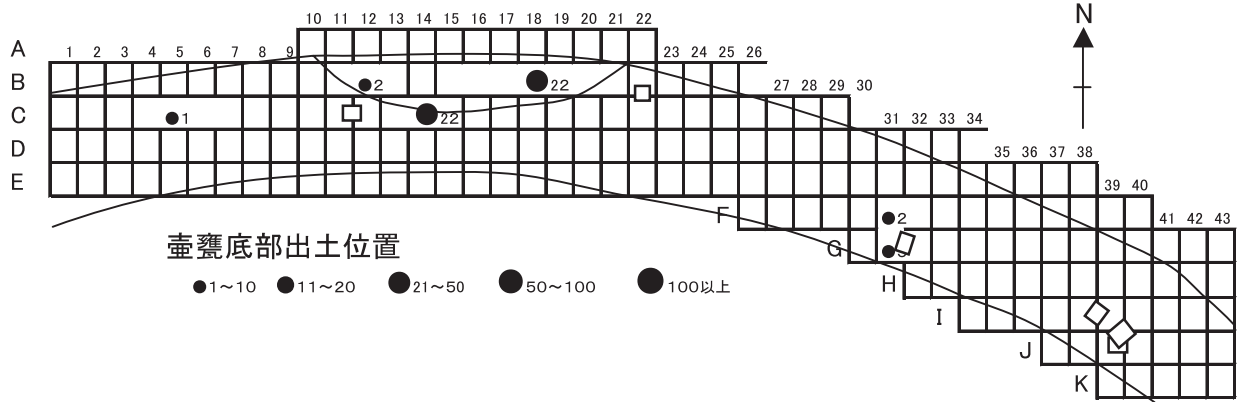
第4表 足原田遺跡古墳時代土師器出土位置一覽表

出土場所	器種												合計
	S字台付甕	台付甕	壺	甕	壺・甕底部	甗	高坏	器台	坏・卍	小形土器	蓋		
B-5.6.7.8	4	1					1			1			7
C-4.5.6.7	2		3		1		1			1			8
C-9	7	2	3										13
D-2			2										2
D-4.5.6.7			2									1	3
E-4							1						6
E-8							1						1
F-31					2		1					2	5
G-31.32	3	4	6	7	5	1	5				1		32
H-34									1				1
H-37									1				1
I-40												2	2
谷1~2千(旧5溝)	56	26	100	18	22	4	46	10	25	8	1		316
谷3~7千(谷)	56	18	151	6	32	2	48	8	12	3	1		337
谷8~9千(旧4溝)	33	5	33	6	2	2	11	4	2	2	1		101
	161	56	300	37	64	11	119	24	41	17	5		835

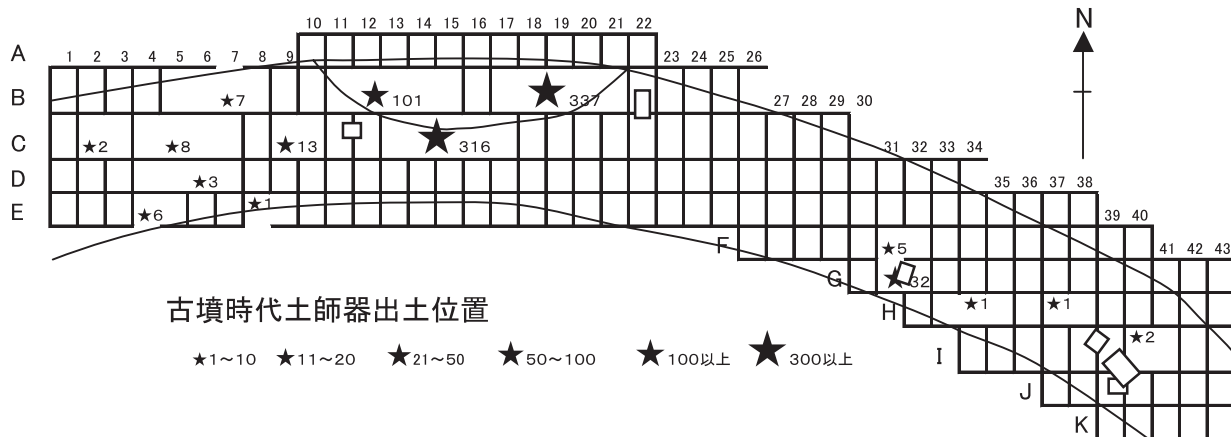
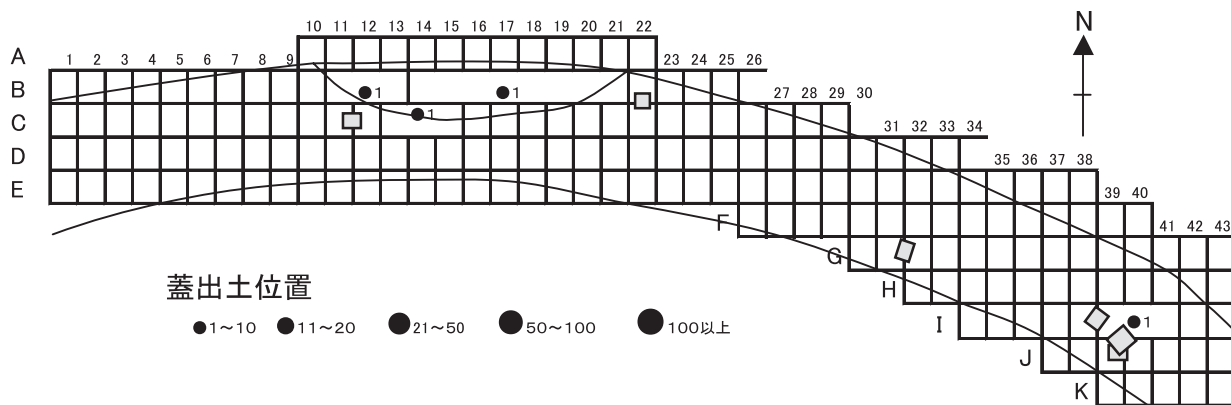
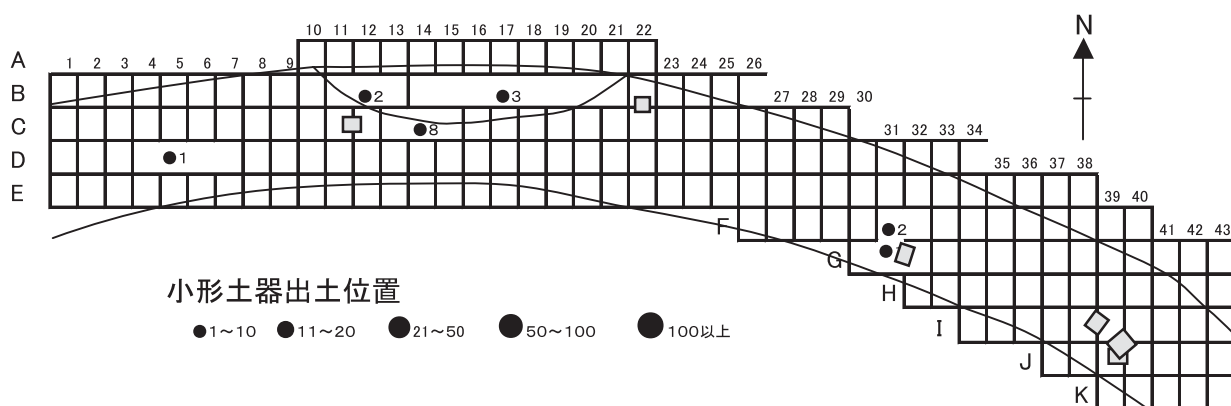
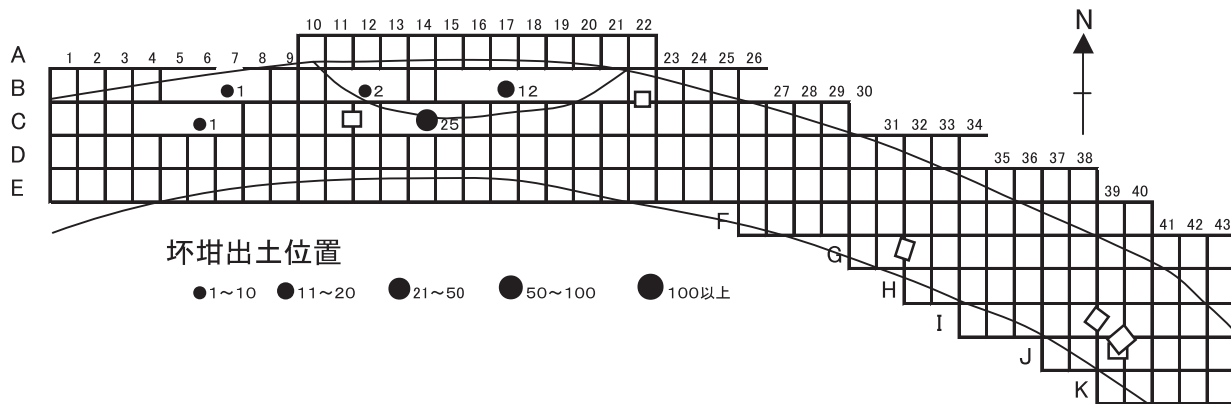




第34図 遺物出土位置図(1)



第35図 遺物出土位置図(2)



第36図 遺物出土位置図 (3)

らすると4・5号住居が南壁で1～3号住居が南東コーナーである。6号住居は南東コーナーの可能性もあるがカマドの残存状態が悪く不明である。

しかし、住居の年代を決めるのには、出土遺物も重要な要素となる。したがって、次の土器観察によって住居の年代を総合的に判断したい。

## 2 出土遺物

住居からの出土遺物には土師器と灰釉陶器、鉄製品があるので、順番にこれを説明する。

### ① 土師器 (第37図) (p75)

土師器には小皿・坏・甕・鉢(置きカマドの可能性もある)・羽釜がある。口径が8cm前後の小皿には底部が厚い柱状高台付小皿(1住)と、底部が回転糸切りで厚く切り離されているもの(3・4住)、体部よりやや厚い底部を持つもの(1住)の3種類がある。坏は10cm～13cmの口径を持つものをいうが、体部が内湾した曲線を持つタイプから直線的に外傾するものへと変遷する。特に4号住居の坏は底部が極端に厚くなる。

甕・羽釜は1、2、6号住居から出土している。特に羽釜は1、2号住居からの出土である。甕と羽釜は同時に出土することも多いが、平安時代の中頃までは甕が主体を占める。6号住居からは甕のみが出土しており、内外面ハケ目の甕と内外面がヘラ整形のものがある。ヘラ整形の甕は刷毛目に対して新しい傾向を持つ。どちらの甕も口縁部が短く外傾しているが、胴部との「く」の字状の境に分厚い粘土の貼り付けが行われていないのを特徴とする。1号住居の甕もハケ整形で口縁部は緩やかに外反する。笛吹市御坂町の姥塚遺跡38号住居や二之宮遺跡265号1号住居からも類例があるが、このような甕は県内では少なく、平安時代後期の盆地東部地域の特徴か、今まで知られていた生産地と違う製品なのか、見極めるのは今後の課題である。

器面整形がヘラとハケの違いは羽釜にも見られる。こうした両者の並存は11世紀から見られるが、2号住居からはハケ目整形の羽釜が、1号住居跡からはヘラ整形の羽釜が見られるので、刷毛からヘラへの変化を考えても良いだろう。また、釜の鏝は長いものから短いものへと変化する傾向があるが、2号住居の羽釜の鏝は比較的短く厚く、1号住居の羽釜の鏝は短く粗雑であるから、これも2号住居の羽釜が古く1号住居の羽釜が新しい傾向を持つ。

5号住居からは深鉢が出土している。これもハケ整形とヘラ整形の2種類がある。口唇部上端は水平で平滑に整形されているのが特徴である。このような鉢は両端外面に把手がつけられる例が多いが、ここでは器面整形が丁寧であり、把手部分が見られないことも特徴である。(なお、この鉢は、先の特徴から置きカマドの可能性も否定できない。)

これらの土師器の特徴から、1～6号住居の遺物は平安時代後期11世紀～12世紀の土師器と考えられる。また、6軒の住居から出土したこれらの遺物の細分は、それぞれの住居からの出土品が一定のセット関係を示していないので困難であるが、あえて分けるとすれば6号住居出土遺物がもっとも古く、1・2・3号住居が羽釜などの存在や住居の竈が南西隅に位置することなどにより、6号住居より新しい可能性がある。

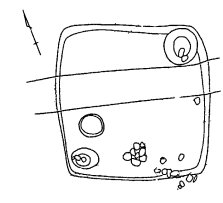
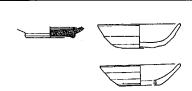
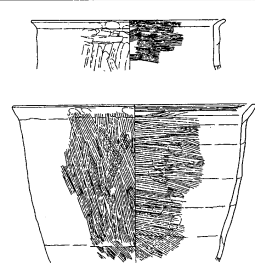
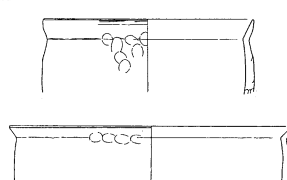
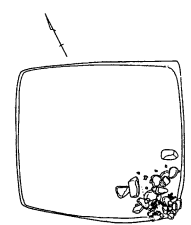
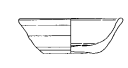
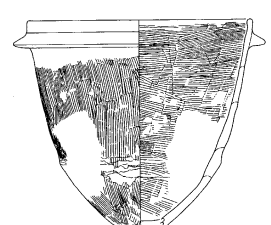
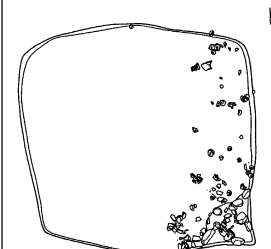
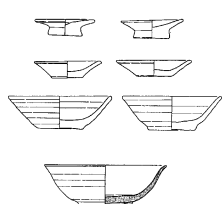
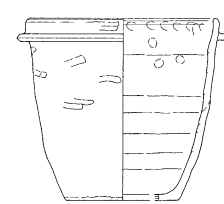
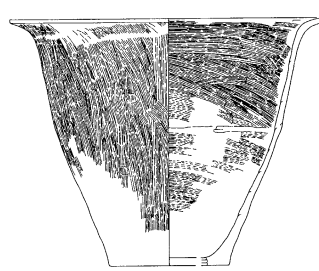
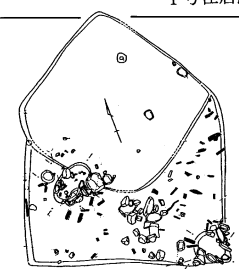
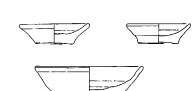
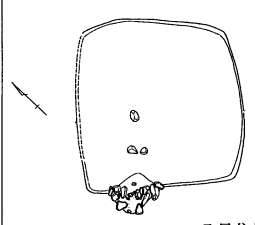

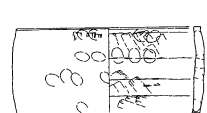
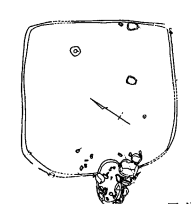
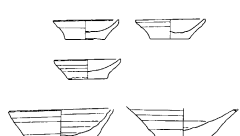
4号住居は切り合い関係により、3号住居より新しいことは明らかで、竈が南壁に位置する5号住居と同時期と考えられ、出土遺物の照合はできないけれども、近接した位置からも4号住居と5号住居は同時に存在したと考えられる。

従って、6号住居→2・1・3号住居→5・4号住居という時間差で新しくなるものと思われる。

これらの編年上の位置は、降矢哲夫・佐々木満・山下孝司らによる「山梨県内における中世土器様相について—土師器皿を中心に—」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』(2001)でも11世紀～12世紀に置かれる。

### ② 灰釉陶器 (第37図) (p75)



	住居跡	坏・皿・灰釉陶器	甕・羽釜等
I	 <p>6号住居跡</p>		 
II	 <p>2号住居跡</p>		
	 <p>1号住居跡</p>		 
	 <p>3号住居跡</p>		
III	 <p>5号住居跡</p>		 
	 <p>4号住居跡</p>		

第37图 平安時代土器区分

坏が2点出土している。6号住居からは底部破片であり、1号住居の坏はほぼ完形である。6号住居の底部破片には釉薬がかかっておらず、高台に特徴がある。東山72号窯期の製品と考えられ、11世紀前半に位置付けられている。1号住居の坏は無釉で高台断面が外に開く八字形を呈し、美濃窯丸石2号窯期に該当すると思われ、11世紀後半にあたる。

### ③ 鉄製品 (第26図) (p 50)

1号住居から鎌と紡錘車が出土しており、そのほかからも鉄の破片が出土しているが機種は不明である。鎌は柄への装着部が欠損している。また、紡錘車は円盤部が一部欠け、軸も上下が欠けている。この他にも鉄が出土しているが、製品の機種判断はできていない。

## 第3節 その他

第33図14 (p 61) は鞆の羽口破片で、I-39グリッドから出土している。平安時代のものであろう。古代末・中世の遺物ではI-37グリッドから白磁碗破片(第33図9)が出土しているが、これは一宮町西田遺跡・葦崎市中田小学校遺跡14号住居などから出土している白磁と同類で、11世紀末から12世紀に属する。青磁碗破片(第33図10他)は6点出土しているが、谷部やグリッドから発見されており、まとまった出土ではない。外面に蓮弁文があるもの2点、内面に曲線の陰刻文2点である。胎土は灰色でザラザラした割れ口を持つ。釉薬の色は青灰色と灰褐色のものがある。これらはいずれも12世紀頃と推定される。実測した青磁碗の内面に曲線文を持つものは同安窯系碗である。又、外面の蓮弁文には剣先状に尖るタイプと丸いタイプがあり、これらは龍泉窯系の青磁碗である。(国立歴史民俗博物館1993『日本出土の貿易陶磁器』)

素焼の播鉢や常滑・瀬戸の甕破片なども存在するが、いずれも完形品ではなく、一部が復元実測可能品である。なお、瓦器製の小型三脚付羽釜(第33図13)も出土している。これは、畿内や関西地域で出土している例が多く、類似品は京都府などからの例が知られている(鋤柄俊夫 1997 『国立歴史民俗博物館研究報告—中世食文化の基礎的研究—』第71集)。(財)京都府埋蔵文化財センターの伊野近富氏によれば、このような遺物は、12世紀から出現し13世紀をピークとして14世紀には減少するもので、初期の生産地は大府府枚方市楠葉あたりが想定されるという。出土地も畿内を中心としていることから、足原田遺跡の出土品も畿内からもたらされたと考えられ、小型のものであるため、祭祀に使われたとも思われる。

古銭が2枚グリッドから出土している。いずれも北宋銭で元豊通寶(初鑄1078)、紹聖元宝(初鑄1094)である。中世陶磁器との関係から年代的に違和感の無い渡来銭である。

## まとめ

足原田遺跡は読みにくい小字名を冠した遺跡である。この土地人々は「足原田」と書いた小字を「いしはらだ」と呼んでいる。この読み方に馴れるのにずいぶんと時間がかかったが、まだ、職場の仲間は読み間違える。

遺跡の現場に立つと、「いしはらだ」という地名は実に納得する。どこを掘っても花崗岩の風化した砂や石が累々と出てくる。場所によって確かに河原の様である。ではなぜ「いし」と呼んでいるのに「足」なのだろうか。おそらく「足」は「あし→悪し」から転化したのではなかろうか。石の多い場所だから「石の多い悪し原」で「悪し」では聞こえが悪いから「足」となり、さらに「石の多い」を縮めて「石」、「石」を「足」に書いたと思う。勝手な解釈であるが、如何だろうか。

さて、この遺跡で驚くべきは、『谷』と呼んだ部分から、夥しい古墳時代の土師器が出土したことである。様々な分析をしたが、廃棄期間には4世紀後半から5世紀初頭に至る50年間以上の幅があり、しかも全ての生活器種があることから、生活廃材の廃棄場所の可能性はある。ということは、この近くに長期間生活した多人数のムラが存在したことは明らかである。そのムラの場所はまだ分からない。おびただしい土器を使った人々は、どこに住み、どこに行ったのだろうか。なお、土器だけが捨てられたのではなく、石と

土器が混在していたことも重要で、土器と石を同じように大量に廃棄している、その行為の意味は謎である。

ただ、4世紀後半から5世紀初頭のこの時代は、現在の東八代郡中道町を中心として大丸山古墳や銚子塚古墳が築造されていた時代である。巨大な古墳、しかも畿内から直接もたらされた技術集団により指揮された古墳造営には、甲斐国の多くの人々が長期間動員されたことであろう。その間は地方の村々は疲弊し荒れ果てたに違いない。大量の土器の廃棄は、通常のもの送りの祭りというだけでなく、こうした背景をも想定させるに十分なものであろう。

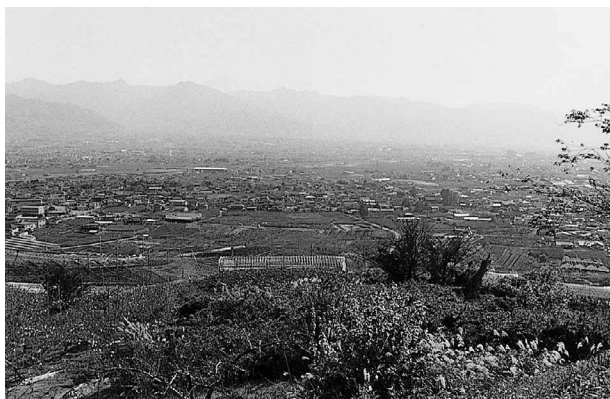
次に、平安時代のムラである。11世紀から12世紀のはじめに小規模なムラがあった。古代律令期の最後のムラであるか、荘園の時代か、あまり豊ではない、しかも笛吹川の氾濫にそなえ、自然堤防上に営まれたムラである。鉄製の鎌があり、糸を紡ぐ紡錘車が出ている。鎌はイネを刈り取ったものであろう。だとすれば水田が近くにあったであろう。紡錘車は糸を紡ぎ、布を織るための必需品である。古代律令時代、甲斐国の調、庸貢物に絹や麻の布がある。布の生産にかかわった人々の生活が、この場所にあった。なお、僅かな破片であるが、鞆の羽口もある。鎌や様々な鉄製農工具の生産や加工・修理もおこなっていた。火災の住居もあったが、1号住居は出土土器の多さから不慮の火災と思われる。また、炭化材が一面に存在した3号住居はあまりに土器が少ないので、家財や人の退去後に放火したものであろう。

なお、平安時代末の12世紀から鎌倉時代・中世にかけて、白磁や青磁等の陶磁器をはじめ瓦質の播鉢も出土している。遺構はないが地域の有力者の存在や生活が想定できる。この調査では、甲斐源氏一族の安田義定の活躍を想定させるなど、今まで知られていなかった古代中世の万力地域の歴史を紐解く手がかりが得られたと思う。まだ、道路予定地の中や外側に遺跡が連続しているので、今後の発掘調査成果が益々興味あるものとなった。

最後であります、地域の方や工事関係者、発掘調査に関係された方々、並びに報告書作成でご指導をいただいた方々に、衷心よりご協力を感謝申し上げます。

#### 参考引用文献

- 1 上野晴朗ほか 1987 『日下部』山梨市教育委員会
- 2 中山誠二 1986 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会
- 3 加納俊介 1991 「4 東海」『古墳時代の研究6—土師器と須恵器』雄山閣出版
- 4 小林健二 1993 「外来系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 5 国立歴史民俗博物館 1993 『日本出土の貿易陶磁器』
- 6 中山誠二ほか 1994～1997 『村前東A遺跡概報』1～4 山梨県教育委員会
- 7 山梨市教育委員会 1995 『東後屋敷遺跡』山梨市遺跡調査会・山梨市教育委員会・朝日商事有限会社
- 8 山梨市教育委員会 1995 『宮ノ前遺跡』山梨市教育委員会
- 9 鋤柄俊夫 1997 「土製煮炊具にみる中世食文化の特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 10 国立歴史民俗博物館 1997 『中世食文化の基礎的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 11 小林健二 1998 「山梨県出土の東海系土器—波及と定着と変容」『山梨県考古学協会誌』10号 山梨県考古学協会
- 12 小林健二 1999 「塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 13 三田村美彦ほか 1999 『村前東A遺跡』山梨県教育委員会
- 14 山梨県 1999 「古墳時代の編年」『山梨県史—資料編2』山梨県
- 15 降矢哲夫・佐々木満・山下孝司 2001 「山梨県内における中世土器様相について—土師器皿を中心に—」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』中世土器研究会
- 16 佐々木 満 2004 「山梨県における中近世土器の様相」『山梨考古学論集』V 山梨県考古学協会



足原田遺跡全景（北より）



足原田遺跡全景（東より）



足原田遺跡全景（西より）



作業風景（谷跡出土遺物発掘）



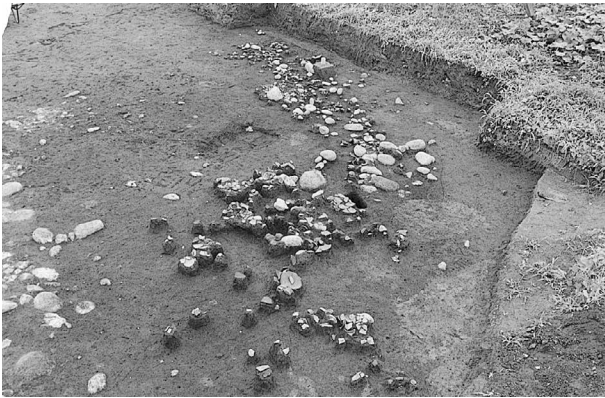
作業風景



作業風景（谷跡調査風景）



体験発掘風景



谷跡(旧4溝部分)



谷跡(旧4溝部分)



谷跡(旧4溝部分)



谷跡(旧4溝部分)



谷跡(旧5溝部分)

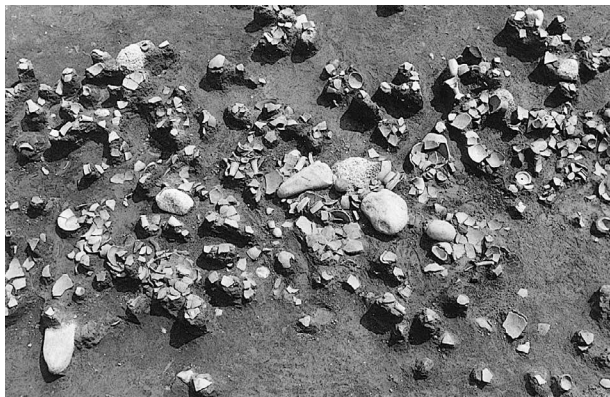


谷跡(旧5溝部分)

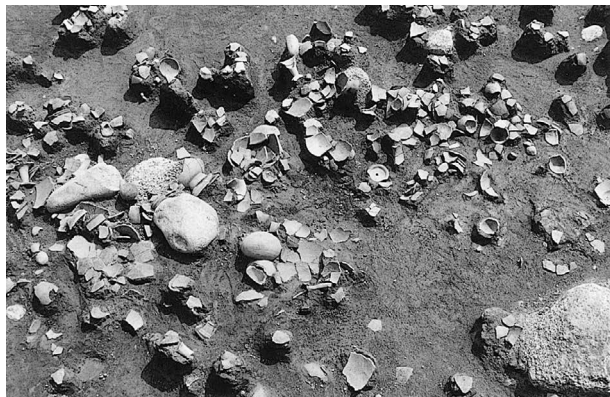


谷跡(旧5溝部分)





谷跡 (旧5溝部分)



谷跡 (旧5溝部分)



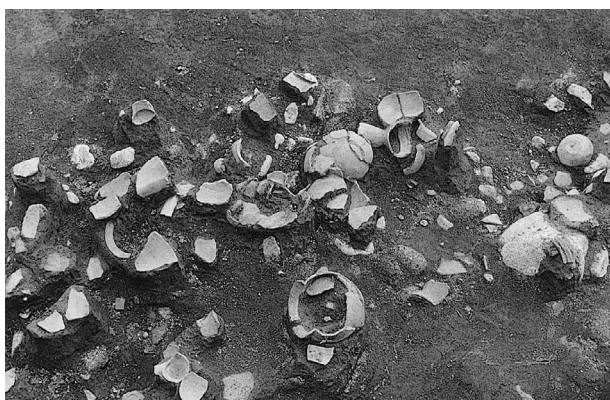
谷跡 (旧5溝下層部分)



谷跡 (旧5溝下層部分)



谷跡 (旧5溝下層部分)



谷跡 (旧5溝下層部分)



谷跡 (旧5溝下層部分)



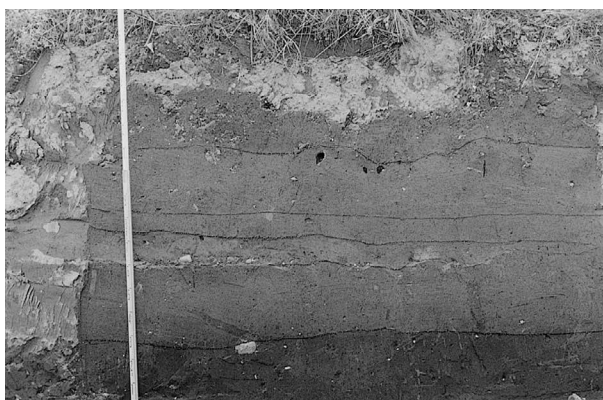
谷跡上層遺物出土状態



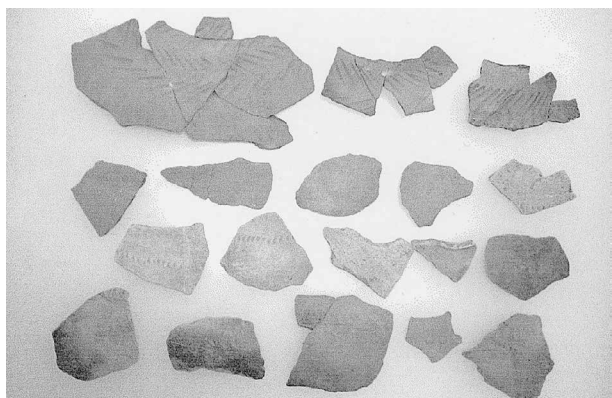
谷跡遺物出土状態



谷跡遺物出土状態



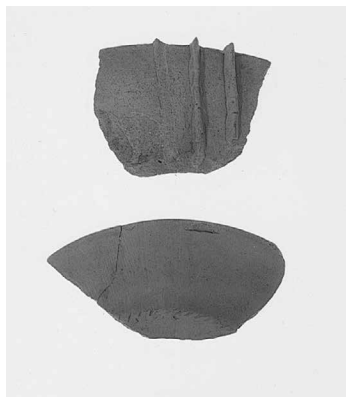
谷跡土層断面



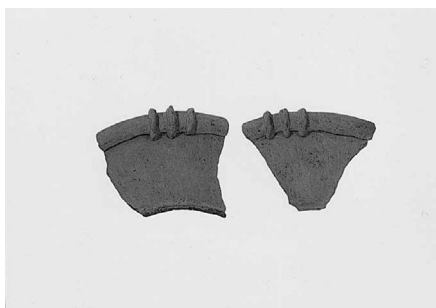
第4図 谷跡出土遺物加飾壺



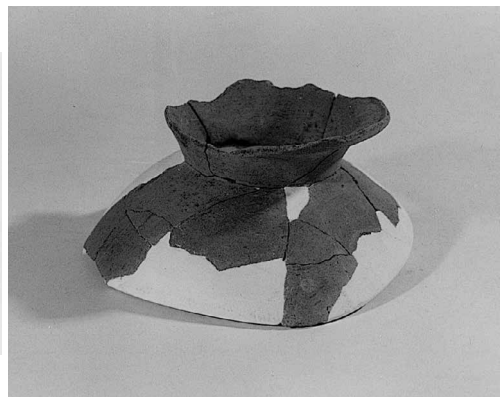
第5図 上段 (左から) 1・3  
下段 4



第5図 (上) 5  
第6図 (下) 2



第5図 6・7



第5図 8



第5图10



第5图11



第5图12



第6图1



第6图3



第6图4



第6图5



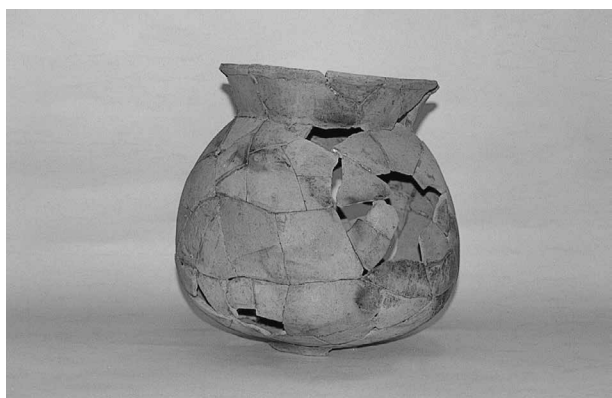
第6图6



第6图 7



第6图 8



第6图 9



第7图 1



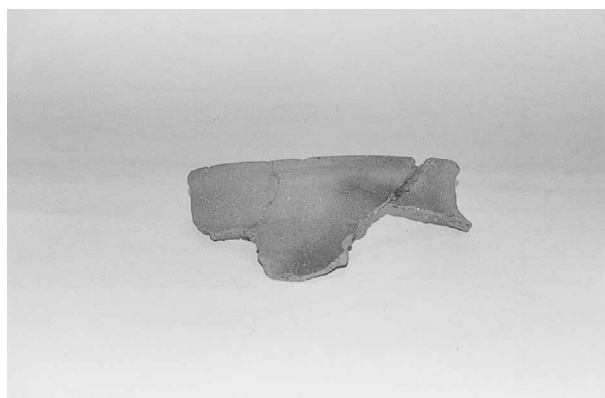
第7图 2



第7图 3

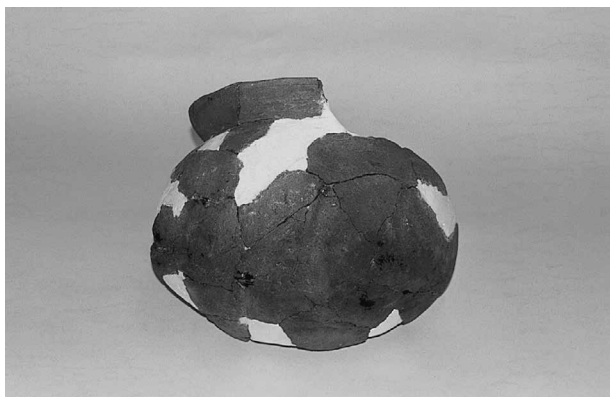


第7图 4



第7图 5





第7図 6



第7図 7



第7図 8



第8図 1



第8図 2



第8図 3



第8図 5



第8図 6





第 8 图 7



第 8 图 8



第 8 图 9



第 8 图 10



第 8 图 11



第 8 图 13



第 9 图 1



第 9 图 2



第9図 4



第9図 5



第9図 6



第9図 7



第9図 8



第10図 1



第10図 2



第10図 4



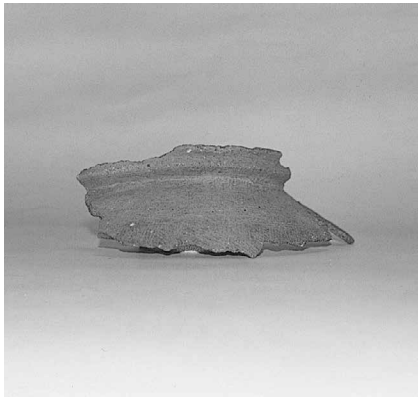
第10図 6



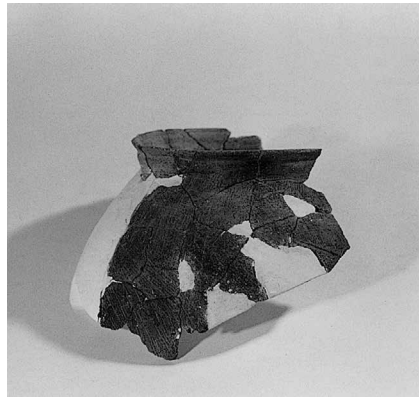
(左から) 第12図12・第10図8・第10図9・第10図7



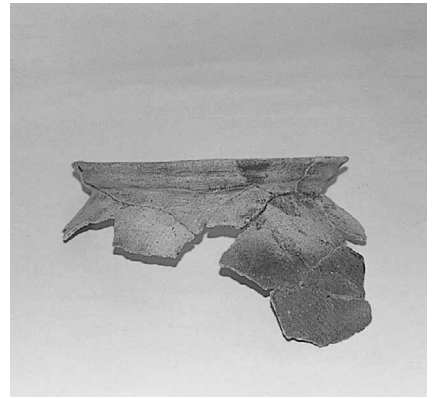
第10図 (左) 10 (右) 11



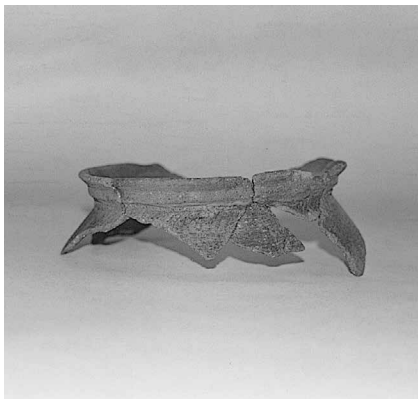
第11図 1



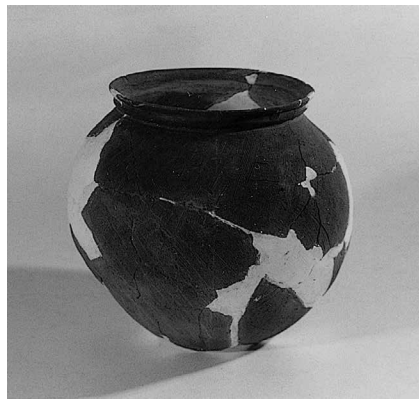
第11図 3



第11図 4



第11図 5



第11図 6



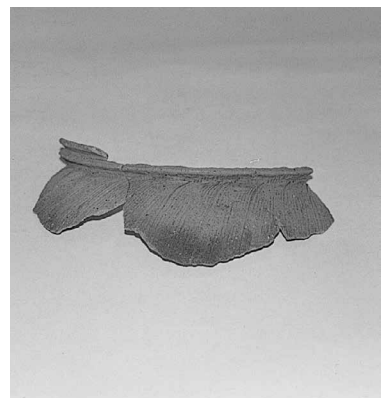
第11図 7



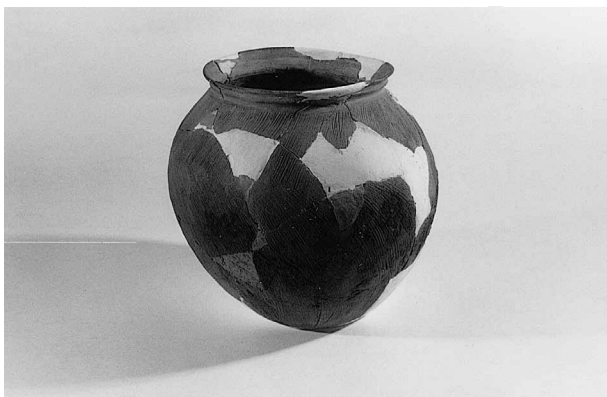
第11図 9



第11図 10



第11図 11



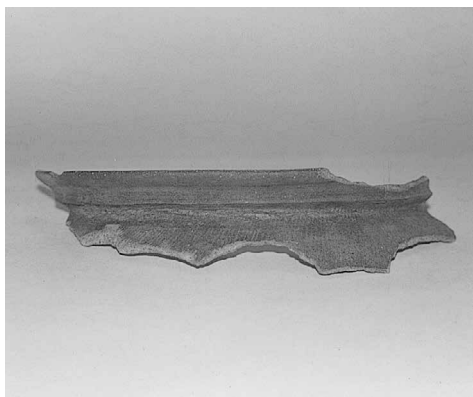
第11図 8



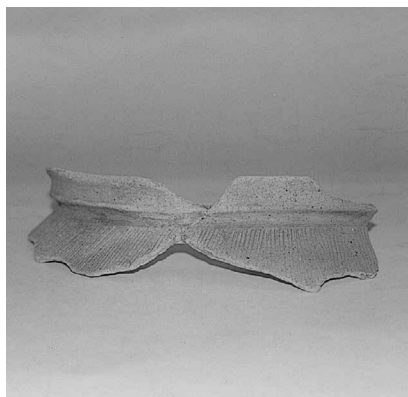
第11図 (左から) 8・7・6



第12図 1



第12図 2



第12図 3



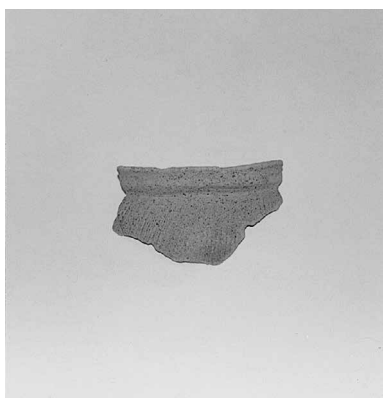
第12図 4



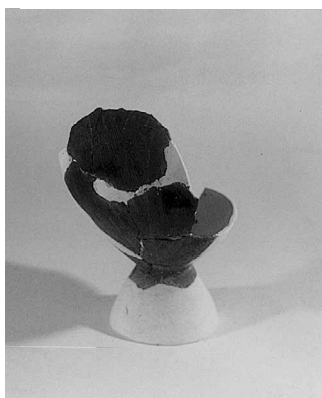
第12図 5



第12図 6



第12図 7



第12図 9



第12図 10



第12図 (左から) 13・14・15



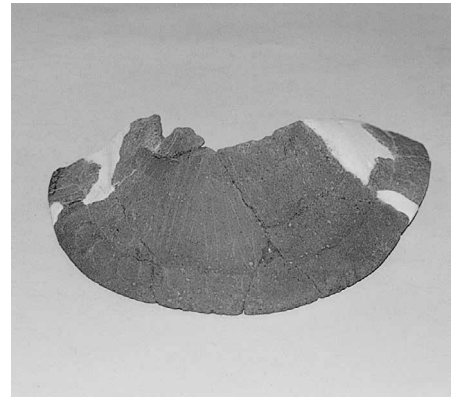
第12図 上段 (左から) 18・17 谷出土・谷出土  
上段 (左から) 谷出土 谷出土・谷出土



第13図 1



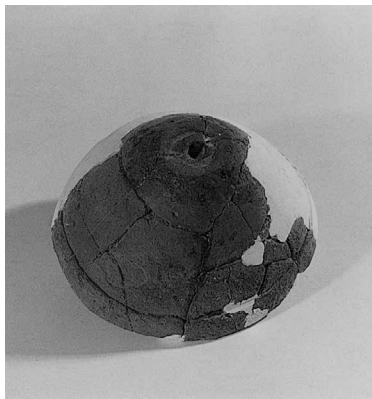
第13図 2



第13図 3



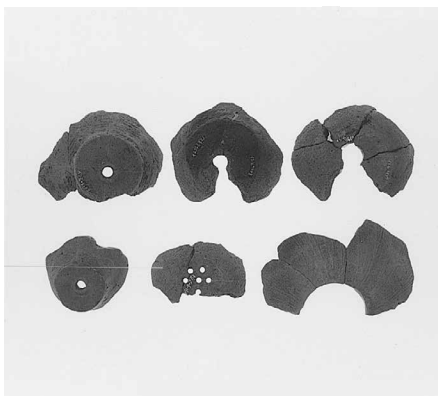
第13図 4



第13図 6



第13図 (左から) 8・谷出土・7



第13図 上段(左から) 9・12・11  
下段(左から)10・13・5



第13図 (左から) 14・15・16



第13図 16



第13図 (左) 18 (右) 17



第13図 19



第13図 20



第13図 21





第14図 1



第14図 2



第14図 3



第14図 4



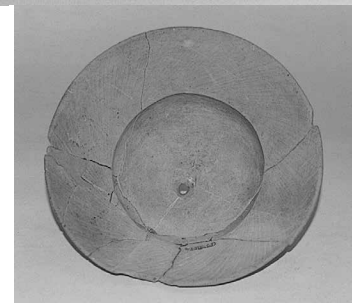
第14図 5



第14図 6



第14図 7



第14図 (上)(下) 9



第14図 10



第14図 11



第14図 14



第14図  
(左) 16  
(右) 15

第14図  
(左から)  
18・19・谷・17  
出土



第14図 (左から) 4・5・3・2・1



第15図 1



第15図 2



第15図 3



第15図 4



第15図 5



第15図 6



第15図 7



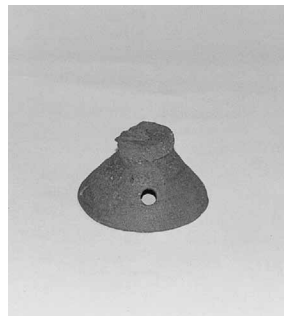
第15図 9



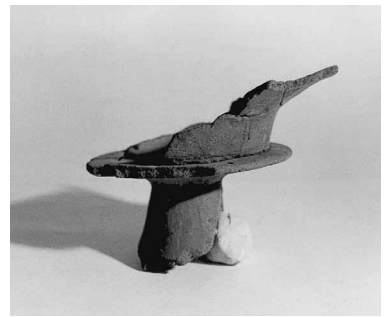
第15図 10



第15図 12



第15図 13



第15図 14



第15図 15



第15図 16



第15図 17



第15図 18



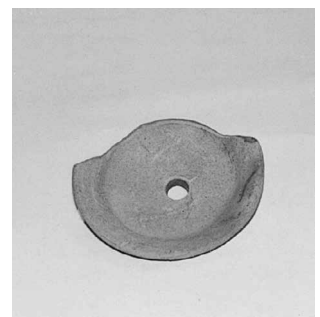
第15図 19



第15図 20



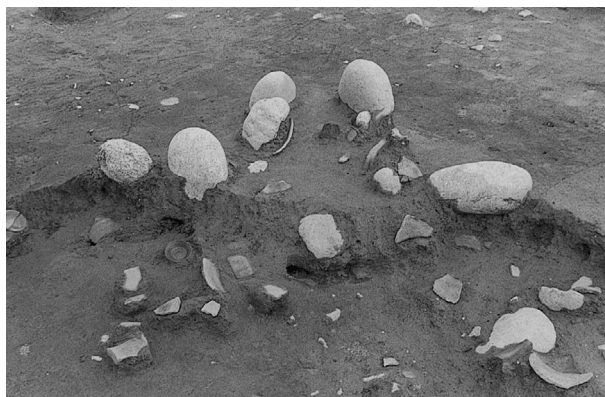
第15図 21



第15図 22



1号住居跡 全景



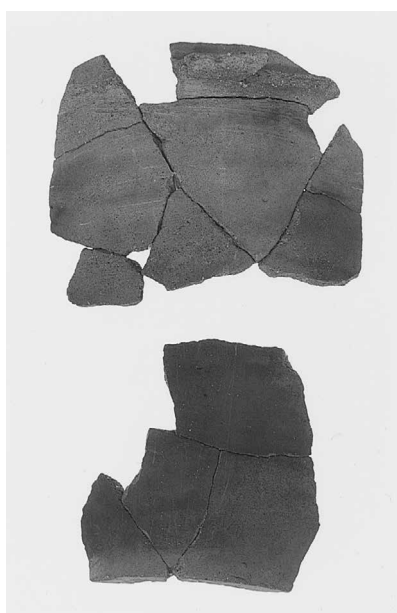
1号住居跡 かまど周辺遺物出土状況



1号住居遺物出土状況



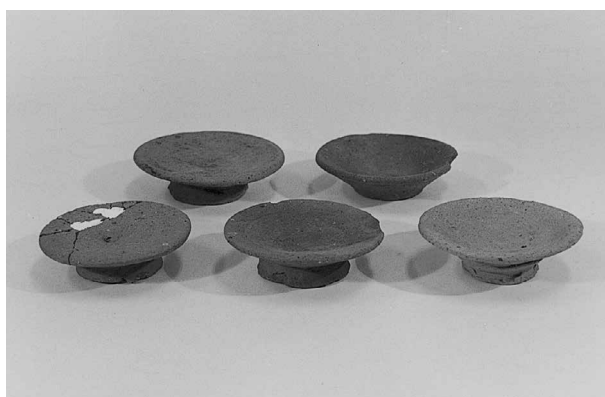
1号住居跡 かまど周辺遺物出土状況



第24図 26

第23図 17  
15・14  
11・9・16  
7・12・13・1住  
出土遺物

第25図 28



第23図 上段 (左から) 4・6  
下段 (左から) 4・2・3





第23图 20



第23图 22



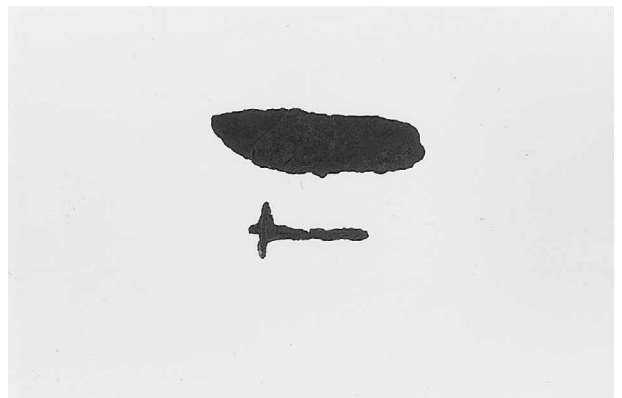
第24图 24



第24图 25

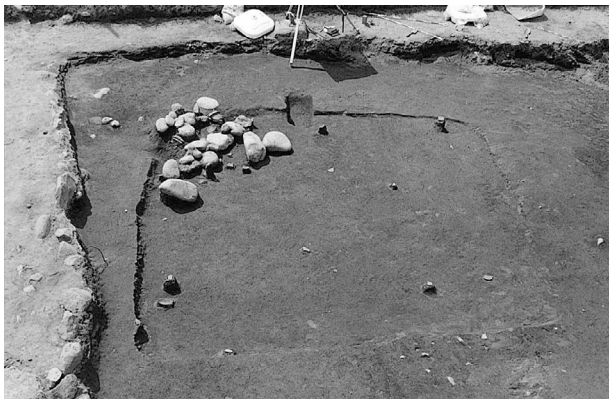


第25图 27



第25图 (上) 30 (下) 29





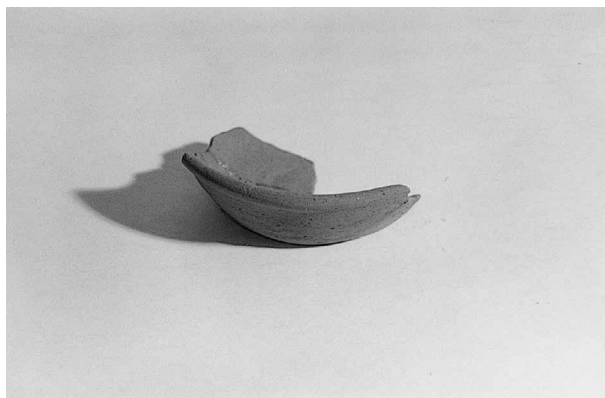
2号住居全景



2号住居 かまど



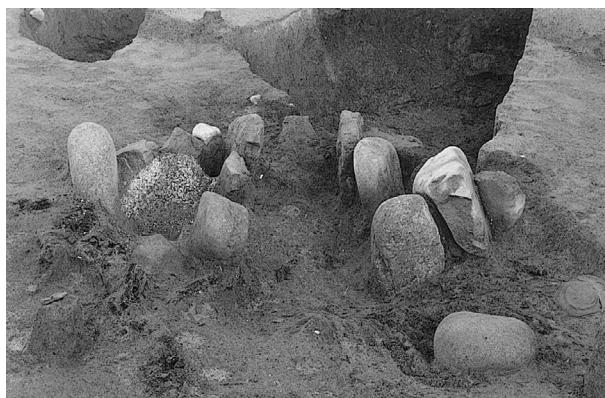
第26図 2



第26図 1



3・4号住居跡 全景



3号住居 かまど



3・4号住居跡 全景

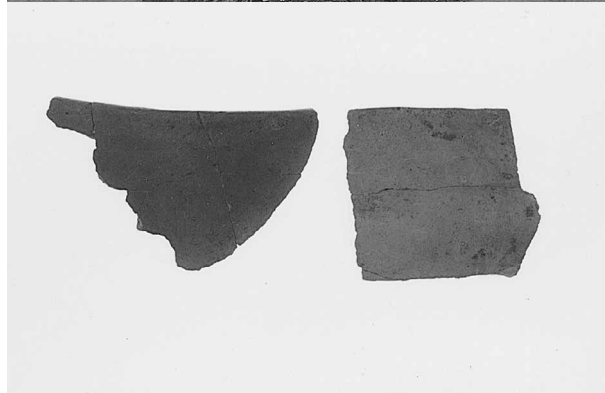




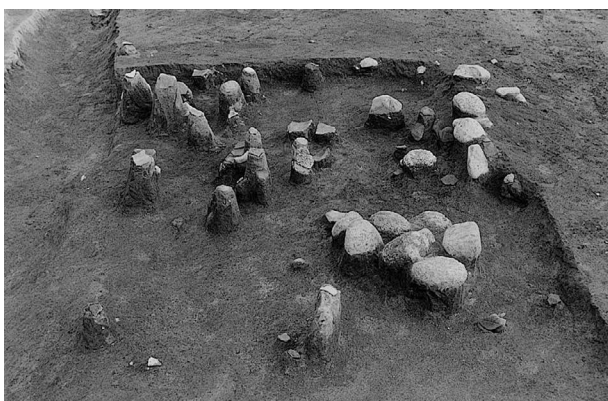
第28図 5 (3号住居跡出土遺物) 第28図(左から)3・1・4(3号住居跡出土遺物) 第28図 4 (4号住居跡出土遺物)



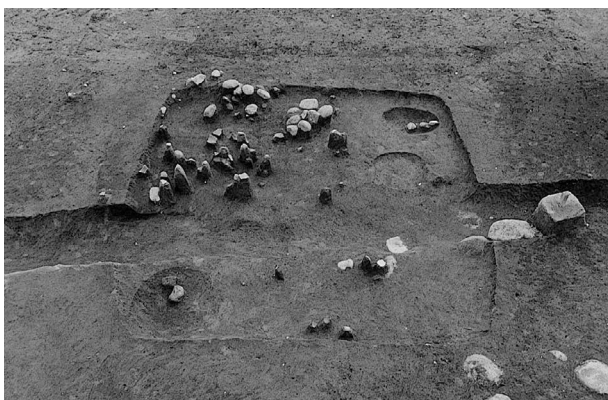
第28図 上段 (左から) 4・5 (4号住居跡出土遺物)  
 下段 (左から) 1・2・3 (4号住居跡出土遺物)



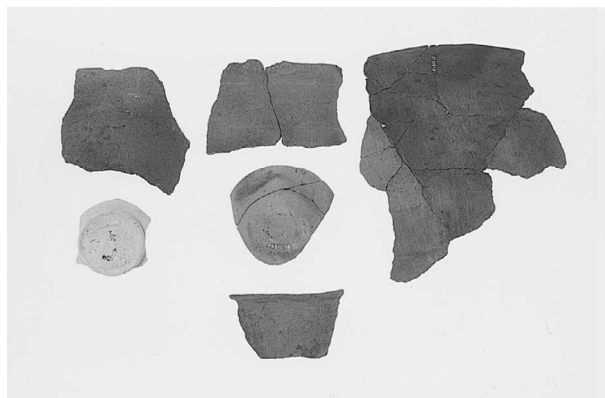
5号住居跡 全景  
 第29図 (左から) 1・2 (5号住居跡出土遺物)



6号住居跡全景



6号住居跡 かまど



第30図 上段 (左から) 7・8・6  
 中段 (左から) 1・2 (6号住居跡出土遺物)  
 下段 5



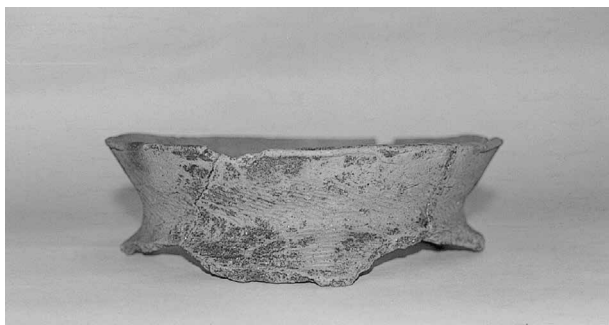
第31図 1



第31図 2



第31図 7



第31図 3



第31図



第31図 4



第31図 9



第31図 5



第31図 6



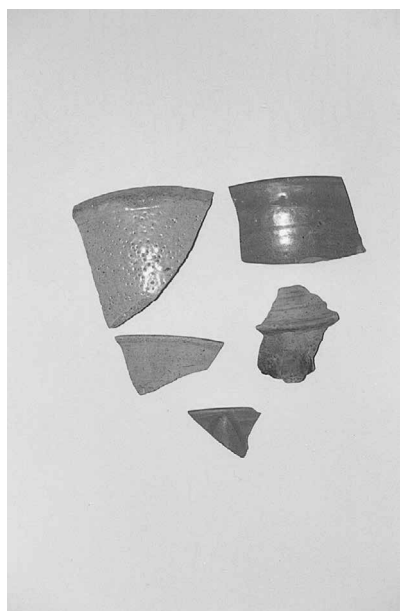
第31図 10



第32図 3



第32図 (左から) 6・7 谷出土遺物



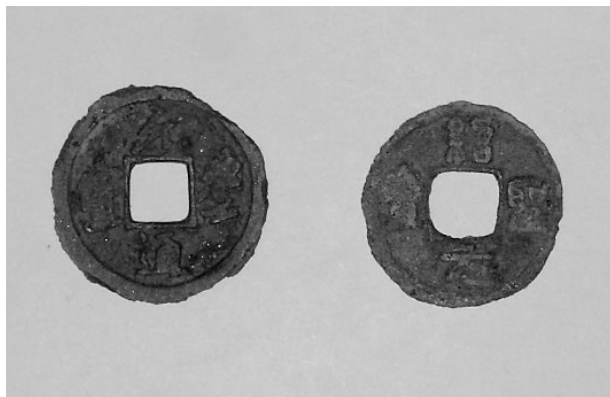
上段 (左) 第32図 9 (右) 第32図 10  
中段 (左) 第32図 8 (右) 第32図 13  
下段 第23図 21



第32図 12



第32図 14



古銭

# 報告書抄録

ふりがな	いしはらだいせき
書名	足原田遺跡Ⅰ
副書名	西関東連絡道路関連発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第230集
著者名	山本茂樹・小林（石神）孝子
編集機関	山梨県埋蔵文化センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
発行日	2005年 8月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
足原田遺跡	山梨市万力 950番地他	19205		35°	138°	平成15年 5月22日 ～11月28日	3,800	西 関 東 連 絡 道 路 建 設
				41'	40'			
				20"	25"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
足原田遺跡	集落遺跡	古墳時代 平安時代	土器捨場1 竪穴住居6	土師器	杯・器台 壺・甕等	埋没谷に大量の古墳時代前期の土器が 廃棄されており、石の間から破損した 土師器が夥しく出土した。
				土師器 灰釉陶器	杯・甕・ 羽釜杯	

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第230集

# 足原田遺跡Ⅰ

西関東連絡道路関連発掘調査報告書

印刷日 2005(平成17)年 8月 25日  
 発行日 2005(平成17)年 8月 31日  
 編集 山梨県埋蔵文化財センター  
 発行 山梨県教育委員会・山梨県土木部  
 印刷 株式会社 アド井上